六道 慧

奥方様は仕事人

おくがたさま



文庫書下ろし
長編時代小説

光文社文庫

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

奥方様は仕事人

六道慧（りくどうけい）



光文社

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

奥方様は仕事人

六道慧（りくどうけい）



光文社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

目次

第一章　鴛鴦同心　9
第二章　虎落笛　62
第三章　いのちの膳　109
第四章　犬目与力　157
第五章　菩薩先生　205
第六章　魂風　259
第七章　剔抉の太刀　308
あとがき　354

『奥方様は仕事人』主な登場人物

野村留以　のむらるい
二十歳。定町廻り同心である野村平左衛門の妻。幼いころ両親を夜盗に殺される。小野派一刀流の使い手で「剣術小町」との評判も。

野村平左衛門　のむらへいざえもん
二十五歳。盆暗同心、与太郎同心と揶揄されていたが、留以と所帯を持ってからは、鴛鴦同心と呼ばれ見直されている。

野村希代、環紀　のむらきよ、たまき
平左衛門の母と姉。留以にとっての姑、小姑。

近藤時之助　こんどうときのすけ
留以の義父。天城小十郎と同役だった。両親を亡くした三姉妹を引き取る。

近藤織江　こんどうおりえ
留以の姉。時之助の配下、左兵太（さへいた）を婿に迎え一児をもうけている。

山崎朋江　やまさきともえ
留以の妹。薬種問屋（やくしゅどんや）の山崎屋に嫁ぐ。

おのぶ、弥太郎　おのぶ、やたろう
三年前、近藤家のころから留以に仕える下女下男。

本庄美之助　ほんじょうよしのすけ
頭脳明晰、容姿端麗の同心。平左衛門とは同役同期。幼なじみでもある。

本庄沙苗　ほんじょうさなえ
十九歳。美之助の妻。

八木沢兵庫　やぎさわひょうご
平左衛門、美之助の上司。六尺を超える大男。冨田（とだ）流免許皆伝の腕前。

奥方様は仕事人

第一章　鴛鴦同心

一

犬が来る。
目を血走らせて、三匹の犬が追いかけて来る。
「助けて」
女は、転びそうになりながら走っていた。左右に広がるのは闇に沈んだ田畑のみ、人気はまったくない。月も星もない夜空からは、ちらほらと白いものが落ちてくる。雑司ヶ谷の鬼子母神から、どれほど走っているだろう。さして時は経っていないはずだが、やけに長く感じられた。
「逃げろ、逃げろ」

背後でひびいた愉しげな声に、二つの声が続いた。
「まずは捕らえましょうぞ、若」
「さよう。思い知らせてやるのが宜しかろうと存ずる」
思い知らせる、つまり、兄の仇討ちを企んだ女を陵辱したうえで、いつものように殺すと告げていた。
「むろん、そのつもりよ。まさか女子とは思わなんだが、試し斬りにもいささか倦いていたところじゃ。飛んで火に入るなんとやら、逃げろ、それ、行け。もっと早う逃げろ。もたもたしておると、追いついてしまうではないか」
笑いを含んだ言葉には、今までの悪行が表れていた。いったい江戸市中で何人を殺めたのか。無抵抗な町人を次から次へと殺害した外道は、犬と呼ぶに相応しい相手。いや、そう呼ぶのは犬に悪いかもしれない。
風が強くなり、雪が本降りの気配を見せ始めている。
「だれか、だれか助けて」
雪まじりの風が、女の哀願を掻き消した。南に高田馬場があるこの区域には、百姓地や寺、武家屋敷が立ち並ぶばかりで町家はほとんど見あたらない。慌てるあまり足を滑らせ、何度も畑に落ちかけた。

「疲れてきたな。そろそろ休まぬか、ええ、女剣客殿よ」

皮肉めいた声が嗤っていた。おそらく、にやついているに違いない。申し入れを受けたわけではないのだが、女の足がわずかに遅くなる。道の前方に小さな橋が見えていた。粉雪が風とともに吹きつけて来る。目を開けていられなかった。

「おお、あれに見ゆるは面影橋。亡き兄の面影でも偲ぶか」

若と呼ばれた男は、自信があるのか、刀の鯉口さえ切っていない。他の二人も同じだった。女は橋に向かってひた走る。

「待て」

男の呼びかけは、形だけのものだった。獲物はもはや手中に陥ちたも同然、焦ることはない。面影橋の手前に植えられた大きな柳の木が、枝を差し伸べるように揺れている。

女はそこで足を止めた。

「観念したか」

にやりと口もとをゆがめた、かもしれない。男は二人の若党を残して、女のもとに歩み寄る。足音が近づいて来た。一歩、二歩、三歩目のとき……。

女は振り向きざま、短刀を男の胸に突きたてた。

「ぐ」

さげていた男の両手に力がこもる。愚かな若い主の異変に気づいたのか、

「若？」

「いかがなされましたか」

二人の若党が問いかけた。応えはない。男は一撃で絶命していた。地面に流れ落ちる血を見て、ようやく察したのだろう、

「若に、な、なにをした」

「この女」

二人が刀の柄に手をかける。ほとんど同時に柳の木陰から、二つの人影が忍び出た。ひとりは男、ひとりは女。男は刀を抜き放つや、ひとりに逆袈裟斬りを放った。女は握りしめていた千枚通しで、もうひとりの胸をつらぬいた。

「あ……」

と、最後の声を発したのは、どちらの男だったのか。

刀を抜く暇もなく、二人は地面に崩れ落ちる。

三人は何事もなかったかのように、三方に分かれた。囮役の女は来た道を戻り、男は橋を渡って右に、そして、残る女は橋を渡って左に進む。

弘化三年（一八四六）十二月。
雪は、霙まじりの雨になっている。
面影橋のたもとに残された骸の横を、痩せた野良犬が通り過ぎて行った。

二

翌日の未明。
若と呼ばれた男を始末した女――野村留以が戻ったのは、町奉行所の与力や同心の組屋敷が立ち並ぶ八丁堀の家だった。
「おや、お戻りですか」
義母の希与が玄関先で出迎えた。えらの張った顔と、への字に固く結ばれた薄い唇、さらにもはや癖になってしまった上目づかいの眼差しが、気むずかしい印象を与えずにはおかない。年は五十二、これ見よがしに廊下の拭き掃除をしている姿にも、これでもかというほどの厭味がこめられていた。
時刻はそろそろ七つ（午前四時）になる頃だろうか。外はまだ薄暗いため、家の中は闇夜のように暗かった。

（ふだんなら白河夜船でしょうに）

留以は、胸に浮かんだ言葉を呑みこんだ。無理に笑顔を浮かべる。

「二日も家を空けまして、申し訳ございません。お陰様で恙なく、亡き両親の祥月命日の法事を終えられましてございます。義母上様と義姉上様には、夫の世話をお引き受けいただきまして、まことにありがたく思うております。近藤の義父、そして、姉と妹が、くれぐれもよしなにとのことでございました」

吐く息の白さが、濡れた足の冷たさを増すように思えた。雪はさほどひどくならなかったものの、霙まじりの雨が降って道はぬかるんでいる。泥だらけの足を洗い、早く座敷にあがりたかったが、希与はたやすくそれを許さない。

「さようか。わたしもご同席したかったのじゃが、我が野村家は浄土真宗。日蓮宗の近藤家とは、宗派が違いますゆえ、差し障りがあってはならぬと思い、遠慮つかまつりました次第。それにお上の御目付役を務めるお家とは、格が違いすぎますからの。おまけに持病の腰痛が出てしまい、動けぬ有様でございましたゆえ」

などと言いつつ、自称、腰痛が出ている義母は、ひたすら廊下を拭き続けている。あげてもらえるには、まだまだ時がかかるかもしれない。

ちなみに、近藤家とは、亡き父の盟友であり、同役であった十人目付の一家であ

る。両親亡き後、織江、留以、朋江の三姉妹は、子供のなかった近藤夫婦に引き取られたのだった。近藤家は、長女の織江が婿を取って継いでいる。

「留以殿がおられぬと、米櫃の米が減らぬので驚きました。総菜にかかる金子も少なくて済みましたよ。わたくしと母上は、漬物と味噌汁があれば充分ですからね」

義母に負けず劣らずの言葉を発したのは、義姉の環紀だ。台所に続く廊下を糠袋で磨きあげている。大年増のうえ、出戻りとあって、母譲りの顔立ちに険が加わっていた。せめて足だけでも洗わせてもらえまいかと、留以は、つい奥座敷に目を向けている。

（平左衛門様はまだお寝みなのかしら）

そんな苛立ちを察したのだろう、

「お土産をいただきましてございます」

後ろに控えていた下女のおのぶが言った。抱えていた風呂敷包みを、すかさず玄関先で広げる。年は四十前後、夫の弥太郎も同じぐらいの年齢だが、口数の少ない男で、さっさと勝手口の方に行っていた。薪割りでも始めるつもりなのかもしれない。

「まあ、〈鈴木越後屋〉の菓子ではありませんか」

環紀が台所前の廊下から滑るようにして来た。甘いものが口に入るのは、正月や冠婚葬祭といった特別なときしかない。野村家の主は、南町奉行所の定町廻り同心を務めているのだが、通常の同心よりも実入りが悪かった。

「母上。お茶を淹れます」

目を輝かせた娘を、希与は冷ややかに見やる。

「なんですか、はしたない」

ぴしゃりと手を叩いて、告げた。

「まずはご先祖様に差し上げなければなりませぬ。それにしても〈鈴木越後屋〉とは、贅沢でござりますな。十年目の祥月命日でこれですからね。十三回忌はさぞ派手やかな法事になるでありましょう。お上は奢侈贅沢を禁じておるというに、なにを考えておられるのやら」

同心だった夫を五年前に亡くした希与は、質素倹約の化身とも言うべき寡婦。野村家の財布をがっちりと握りしめ、間違っても紐をゆるめるような真似はしない。子供は環紀と平左衛門だけで、孫はまだひとりも授かっていなかった。

「贅沢でございますか。では、お返しして参ります」

おのぶが伸ばしかけた手を、娘同様、ぴしゃりと叩いた。

「それには及びませぬ」
希与は恭しく菓子折を掲げたが、
「おや、この箱はなんですか」
その下に重なっていた箱に目を留める。
「薬でございます。あの、妹が気を利かせてくれまして」
言いにくそうに答えたのが気に入らなかったに違いない。
「そうそう、お妹君は、日本橋の薬種問屋に嫁がれたのであったな。もとは御目付の家柄であるというに、ようも町家の男と所帯を持つ気になられたものじゃ」
「お金でございますよ、母上」
環紀が隣で相槌を打った。
「日本橋通一丁目の〈山崎屋〉は、江戸でも一、二を争う薬種問屋の大店でござります。蔵には小判が唸っていると聞きました。もしや、この箱の底にも」
箱を持ちあげようとした娘から、いち早く希与が奪い取った。右腕に菓子折、左腕に薬箱を抱えこむ。
「つまらぬことを言うでない。お恵みいただいた薬は、ありがたく頂戴しようではないか。我が家の家宝ぞ」

最後のひと言にあらん限りの毒をこめた。あとで箱の底を確かめるのは必至、余禄が少なくない御役目であるにもかかわらず、野村家が貧しいのは、心の貧しい義母がいるからだと、留以は思っている。嫁が自由になる金子は一銭もなかった。

「さて、まずは御先祖様じゃ」

つんと顎をあげて、希与が立ちあがる。

「はい」

すまし顔で環紀もあとに続いた。二人が使っていた雑巾と糠袋は、廊下に置かれたままだったが、とりあえず座敷にあがれるのをよしとするしかない。

「菓子と薬が効いたようですね」

留以は玄関を出て、勝手口にまわった。嫁は勝手口で足を洗うものだと、野村家の御定書には記されている。夫より先に寝んではならぬ、朝は夫より先に起きて身支度を調えねばならぬ、というのはまだいいとしても、下僕のごとく義母や義姉に仕えること、嫁して二年、子ができぬときには離縁、その際、慰謝料として五十両を支払うこと、などなど、いささか腹に据えかねる事柄も記されていた。

「大奥様と環紀様ですが、昨夜は、寝ていないのかもしれませんね」

おのぶが囁いた。弥太郎が足を洗う桶に湯を入れると、それに水を足して、台

所の板場に座った留以のもとに運んで来る。
「さあ、どうでしょうか」
「そうでなければ、こんなに早く起きられませんよ。織江様たちのお誘いを辞して、早めに戻ったのがよかったようでございます。戻るのが遅ければ、あのままずっと廊下を拭き続けていたかも」
不意に言葉を切り、ちらりと見あげた。
「その方がよかったかもしれませんね」
「おのぶさんったら」
主従は、顔を見合わせて、笑った。
おのぶと弥太郎は、もと仕事人である。三年ほど前、怪我をしていた二人を助けたのが縁で、留以は同じ道に入ることになった。なぜ、修羅の道を生きてきたのか、詳しい話を聞いたことはない。
「ああ、気持ちがいい。おのぶさんの湯加減は、ほんにいい按配ですねえ」
足を桶の湯に浸して、ひととき幸福な気分を味わう。おのぶが丁寧に足を洗ってくれた。二度目の『仕事』を終えたあとのことが、自然に浮かんでくる。
あのあと留以は、鬼子母神で待っていた弥太郎夫婦と一緒に、浅草にある〈山崎

屋〉の寮に向かった。長女の織江と三女の朋江が待つ家には、湯殿の用意が調えられていたし、着替えも揃えられていた。無事な姿を見て姉妹が、安堵したのは言うまでもない。ほとんど言葉をかわすこともなく、二人とは別れている。

「仕事のことですが……宜しいのですか」

おのぶの問いかけには、なにも応えず、差し出された手拭いで足を拭いた。手も足も身体も鉛のように重い。それなのに、頭だけが異様なほど冴えわたっていた。しばらくは眠れぬ夜が続くだろう。

「旦那様は、おいでにならぬのではありませんか」

二度目のおのぶの問いかけに、留以は怪訝な眼差しを返した。玄関先に履き物はなかったが、平左衛門は縁側から出入りすることも珍しくない。しかし、沓脱ぎ石に履き物があるかどうか、まだ確かめていないのに、なにゆえ不在と思ったのか。

「留以様のお声がしているのに、出ておいでになりませんから」

笑いながら、おのぶは答えた。

「恋女房が二日も家を空けたんですよ。祝言をあげて以来、初めてではありませんか。おいでになるのであれば、大奥様たちを押しのけて、お出ましあそばされるに違いありません。こーんなお顔をなされて」

両目尻を手でさげつつ、鼻の下をのばしてみせる。まさに相好を崩すという感じだった。苦笑いせずにいられない。

「物真似で見世物小屋にでも出ますか。もっとも平役の同心の真似をしたところで、だれにもわからないかもしれませんけれど」

言い置いて、板場にあがる。おのぶの言うとおりかもしれないが、念のため、夫婦の座敷に足を向けた。

「ただいま戻りました」

廊下で声をかけ、障子を開けたが、やはり、平左衛門はいなかった。戻って来なかったのだろうか。布団も敷かれていない。留以は座敷に入って、障子を閉める。そこで大きく呼吸をついた。

（戻って来られた）

と、思った。ここを出るときには、二度と帰れないかもしれぬと覚悟を決め、心の中で夫に別れを告げたのだが……。

ふと気配を感じて振り向いた。環紀が障子を細めに開けて覗きこんでいる。野村家の母娘は、若夫婦の座敷を覗くのが、いまや趣味のひとつと化している。驚きはしないが、不愉快であることに変わりはない。

「いかがなされましたか」
留以の問いかけに、くすっと環紀は笑った。
「それそれ、その顔ですよ」
招き入れてもいないのに入って来る。
「頬をふくらませたそのお顔。いえ、母上がいつもと様子が違うと仰せになられたものですからね。丈夫なのだけが取り柄のあなたが、どうしたのかと気になったのです。いつもどおりのふくれっ面を見て、なんとなくほっとしましたよ」
丈夫なのだけが取り柄、の部分でかちんときたが、こらえた。丈夫でなければ、とても野村家の嫁は務められない。
「平左衛門様はお戻りにならなかったのですか」
「ええ」
頷いて、環紀は続ける。
「日本橋檜物町に、できたみたいですよ」
「え？」
「これ」
と、右手の小指を立てる。

「芸妓屋の若女将だとか。名は千也と聞きました。一年経っても子ができぬことに、業を煮やしたのかもしれませんねえ。母上と言うたのですよ。外に妾を作るとは、平左衛門も満更、捨てたものではないと。宜しいですか、留以殿。妻たるもの動ぜずに、毅然として受け止めなされ。うまく男児を授かった折には、野村家の跡取りとして引き取りましょうぞ」

「……」

まさか。

「おや、戻って来たようですね。あなたの気持ちも知らずに、いい気なものですよ。泣かされるのはいつも女子、あ、わたくしから聞いたことは、くれぐれもご内密にお願いしますよ」

頭が真っ白になった留以を置いて、環紀は座敷を出て行った。なにも考えられない。ただ若女将、名は千也、外に妾という言葉が、ぐるぐると頭をまわっている。

三

そもそも惚れたのは、平左衛門の方ではないか。

忘れもしない、あれは、そう、一年と二か月前のこと。盗みを働いた浪人を、平左衛門が捕らえようとしたとき、斬りつけられた。あわやの場面を救ったのはだれあろう、近藤留以。男女が入れ替わったような出逢いではあるが、平左衛門は袴を着けた力弥姿の留以にひと目惚れ。日参したその想いを受けて、八丁堀の奥方様と相成ったのである。

（それなのに）

留以はきゅっと唇を噛みしめた。噛みしめすぎて、血が滲んだことにも気づいていない。

「惚れてしもうたのじゃ。あの日から、そなたの顔しか浮かばぬ。身分違いであるのは百も承知。そなたさえいてくれれば、他にはなにもいらぬ。頼む。わしの妻になってくれ。頼む」

土下座せんばかりに頼んだあれは、偽りか。他の女子など目に入らぬと言うたあれもでまかせか。懐に入れていた手拭いを取り出して、きつく引っ張っていた。身体が丈夫なだけではなく、留以は力も強い。手拭いが引き裂かれるように破れた。

「許しませぬ」

声になった呟きに、平左衛門の弾んだ呼びかけが重なる。

「留以」

障子から覗いた顔は、名前どおりの凡庸さ。中肉中背、年は五つ上の二十五だが、三十五、六に見られることも珍しくない。年の割に皺が多いのは、長年、あの母娘にいびられたからかもしれなかった。無理に長所を探すとすれば……忍耐強いことであろうか。

「いかがしたのじゃ。唇から血が出ているではないか」

平左衛門は慌てた様子で、懐から出した手拭いを、留以の唇にあてた。かすかに香の薫りがする。やはり、と思った。

（女がいる）

腸が煮えくり返るどころか、煮えすぎて爆ぜそうだった。この顔で妾、この顔で他の女子を口説いた。この顔で、この顔でと、思わず手刀で目を突きそうになる。落ち着かなければと、自分に言い聞かせた。まずは話を聞かなければならない。

「近藤様や姉君たちは、ご息災であったか」

夫の問いかけがどこか遠くでひびいている。

「はい。くれぐれもよしなにとのことでございました」

答える自分の声もまた他人の声のようだった。

「さようか。十三回忌には、必ず行くからな。なんとか暇を作ろうとしたのだが、此度はかなわなんだ。昨夜、ここに戻ったところで知らせが来ての。見知っていた年寄りが、人を殺めてしもうたとか。かような仕儀を働く者ではなかったゆえ、急ぎ、番屋に駆けつけた次第よ」

「見知っていた年寄り」

一部を繰り返して、訊いた。

「それでお出かけになられたのですか」

「さよう」

ここでようやく平左衛門は、腰の刀を外した。留以の唇から出た血に狼狽えて、まず手拭いを出したところに気質が表れている。刀と脇差を受け取って、留以は刀掛けにそれを置いた。むらむらと怒りが湧いてくる。

（いっそこの脇差で）

ひたと脇差に目を据えた。いやいや、ぶすりといくのはまだ早い。言い訳がましい話ではあるが、真偽を確かめてみなければならない。

「どちらの番屋に行かれたのですか」

「深川よ」

と答えたのに、留以には「深川でもとは芸者をやっていた若女将の千也」と聞こえた。ぴくりと頬が引き攣る。振り向きざま、胸に正拳突きを放ちそうになったが、これもかろうじて抑えた。

「なにゆえ、お戻りになられましたか。真っ直ぐ奉行所に向かわれた方が、宜しかったのではありませんか」

我知らず冷ややかな口調になっていたが、

「それは」

平左衛門は口ごもって、留以を見つめる。だれもが誠実であることを信じて疑わないだろう。口下手な分、眸に想いがこもる……と今までは思っていたのだが、それはとんでもない過ちだったかもしれない。

この眸だ。

これで芸妓屋の若女将を口説いたに違いない。

名は千也、年はおそらく二十七、八。脂の乗りきった女盛り、もとはたぶん芸者だろう。男を騙す手練手管に長けた女子か。拳を握ったり開いたりして、迸りかける憎悪の正拳突きをなんとか制している。

留以のそんな様子に、平左衛門はまったく気づいていなかった。

「そなたの顔を、なんというか、その、見たかったのじゃ」
眸を逸らして、ぼそぼそと告げた。真っ直ぐ顔を見られないこれこそが、浮気をしているという証。かっと燃えあがった怒りの矛先を、いったい、どこに向ければよいのだろう。
一年もあの姑と小姑に苛められたのに、平左衛門のために耐えたのに！
ぽろぽろと涙があふれ出した。
「い、いかがした、いかがしたのじゃ、留以」
またもや平左衛門は、無様なほどに狼狽える。
「唇ではのうて、口の中を切ったのか。さいぜんの血は、それか」
ち。
と、ひびいた一文字は、千也と言ったように思えた。だが、先走ってはならない。この目で見るまでは、怒りと憎悪の正拳突きを放つべきではないと判断した。
「大事ありませぬ。亡き両親のことを思い出したのでござります」
ごまかしたが、平左衛門は驚きに目を瞠る。
「なにか思い出したのか？」
小声で問いかけた。心から案じている様子に、留以は戸惑いを覚える。環紀の密

告は真実だろうか。偽りを吹きこんで、仲違いさせるつもりではないのか。じっと覗きこむ平左衛門を、留以もまた見つめ返した。

「いえ、なにも……なにも思い出せませぬ」

「そうか。いや、無理に思い出さずともよい。こうして平らかに暮らせることこそが、なによりの幸せ。そなたの他はなにも要らぬ」

「旦那様」

目の奥が熱くなった。悪くない雰囲気に、身体の奥もじわりと熱くなる。急いで布団をのべようか。褥に誘って、子作りに励もうか。いっそ畳の上というのも、趣が変わっていいかもしれない。

「あの」

頬を染めた留以を、環紀の呼びかけが無情に遮る。

「平左衛門。髪結いが来ましたよ」

ああ、いいところだったのに、決まって邪魔が入る。それゆえ、一年経っても子ができないのだが、妻の心、夫は知らず、か。

「すぐに参ります」

平左衛門は答えた後、早口で言い添えた。

「さいぜんの話だが、なにゆえ、藤兵衛、あ、これがくだんの年寄りだがな。彼の者が人を殺めたのか、合点がいかぬのじゃ。すまぬが、ちと調べてはもらえぬか」

得心できない騒ぎに関しては、できるだけ調べるのが夫のやり方だった。捕まえて白状させて、終わりではない。留以もそういうところを好ましく思っている。この一年、下男夫婦の手を借りながら、支えてきたつもりだが……。

「住まいはどこなのですか」

仏頂面で応じた。

「葛西の浜辺にある小屋を塒にしていたようじゃ。年は六十一、本人によると身寄りはないとの話であった。物乞いをして、生計をたてていたようでな。頼まれれば文や荷などを届けることもやっていたとか。便り屋のようなことを、していたのであろう」

目障りな妻を葛西へ追いやり、その間に芸妓屋の若女将とうまくやるつもりではないのか。面倒な探索は留以にまかせて、檜物町の千也と酌しつ酌されつの時を持つ。

不意に妄想が湧いた。

「いいんですか、旦那。奥方様に知られたら」

「言うな」
「あ、まだ布団を」
「かまわぬ」
と、のしかかる平左衛門。ついさっき畳の上でもと思ったのが、仇になっていた。またもや嫉妬の炎が燃えあがる。
「平左衛門」
環紀の二度目の呼びかけで、平左衛門は障子に手をかけた。
「わしが頼りにできるのは、そなただけだ。藤兵衛を助けるのは無理だが、せめて、理由が知りたい。なにゆえ、人を殺めるなどという仕儀に及んだのか。調べてくれると助かるのだが」
「わかりました」
はい、調べます。ついでに日本橋檜物町の若女将のことも。
心の中で答えた。嘘か真実か、得心したいのは留以も同じだった。平らかな暮らしに起きた小波が、大きな障りにならぬように……。
知らぬ間にまた留以は、きつく唇を噛みしめていた。

四

留以の様子がおかしい。

平左衛門は、消えぬ憂悶を抱えて、南町奉行所の右側の小門を通り抜けた。

今月の当番は北町奉行所であるため、南町奉行所の門は閉められている。当番月のとき、門は明け六つ（午前六時）に開き、暮六つ（午後六時）には閉じられるのが常。ちなみに左側の小門は、囚人や付き添いの役人が使う不浄の門とされていた。

「いかがなされた、平左殿。お顔の色がすぐれぬようでござるが」

本庄美之助は、詰所に入って来た平左衛門に声をかけた。同役で同期、さらに年も同じという幼なじみであり、向かいに構えた家同士も親しく付き合っている。頭脳明晰、容姿端麗という言葉は、この美之助のためにあるのかもしれない。奉行や上役の覚えもめでたく、若手の有望株であるのは、だれもが認めるところだろう。

一年前までは、なにひとつとして、平左衛門に負けるものはなかった。そう、留以を、平左衛門が娶るそのときまでは……。

「ちと機嫌が悪うてな。いささか案じておるのじゃ」
平左衛門の顔色は冴えなかった。すわ、喧嘩か。さもありなん、あれほどの美貌と才覚を持つ女子が、平左ごときに満足するわけがない。内心、にんまりとしたが、むろん美之助はおくびにも出さなかった。
「確か昨日は、留以殿の亡き両親の祥月命日であったな」
さりげなく探りを入れる。一昨日、昨日と、平左衛門がいつも以上にうすぼんやりとしていたのは、愛しい奥方様が家にいなかったから。譫言のように繰り返された話を、いやでも思い出していた。
「さよう。話しているうちに、こう、涙をぽろぽろとあふれさせたのじゃ。どうしたらよいかわからず、おろおろするばかりよ。わしまで泣きそうになってしもうた」
話しながら平左衛門は涙を滲ませる。幼いときは「平左」「美之助」と呼び合っていたのだが、それぞれ親のあとを継いでからは「殿」をつけるようになっている。
（阿呆か）
なかば呆れつつ、囁いた。
「月のものではあるまいか」

「あ」
声をあげて、平左衛門は膝を打った。
「そうか、そうであったか。いや、流石は美之助殿。女子の気持ちには、通じておられるな。これからも色々とご助言願いたい」
「褒められたのやら、けなされたのやら、だな」
「は？」
「いや、こちらのことだ。かねてより思うていたのだが、神田界隈の道場では、剣術小町と呼ばれた留以殿を、おぬしがどうやって口説き落としたのか。それが不思議でならぬ。江戸の七不思議よ」
美之助は、しみじみ呟いた。
留以は小野派一刀流の門下生なのだが、その美しさゆえに評判が高まり、侍だけでなく町人までもが、稽古見物に日参していたのである。きりりと結いあげた髪に、勇ましく胴衣を着けた姿は、惚れぼれするほどだったのを、美之助も憶えている。足繁く通う若い男たちのほとんどは、かなうものなら妻にしたいと思っていたに違いない。
美之助もそのひとりだった。

（それがこやつに）

忌々しげに睨みつける。まさに横から、かっさらわれたのだ。

凡庸すぎて絵にならない男、人の好さだけが取り柄の与太郎同心、無能という実に立派な能力を持っている男、女房自慢しかできない男などなど、平左衛門に対する陰口は枚挙に遑がない。あの美人と毎夜と思うだけで、美之助は落ち着かない気持ちになる。

そんな気持ちを知ってか知らずか、

「留以には、辛い昔がある」

平左衛門はぽつりと言った。

「父君と母君を無惨に殺められた。押し込みであるのは間違いないが、十年、経った今も下手人がわからぬ。わしはこの手で捕らえてやりたいのじゃ」

「それは無理、あ、いや、無謀、いやいや、気持ちはわからぬでもないが、今は眼前の御役目に気を向けるのがよかろうな。今朝方、鬼子母神の近く、そら、高田馬場のそばに面影橋があるではないか。橋のたもとに三人の若侍が斃れていたとか」

「また辻斬りであろうかの」

「さあて、どうであろうか。二人は心ノ臓をひと突き、もうひとりはおそらく逆袈

袈斬りで殺られたのではないかと聞いた。手練れであるのは間違いあるまい。そうそう、くだんの辻斬りにしては、亡骸が綺麗すぎるとも言うていたな。それに此度は侍だ。今までとはあきらかに違うておる」

度々、出没している辻斬りは、町人をなますのように切り刻んだり、首や手足を切り離したりしていた。

「では、だれの仕業であろうか」

してはならない愚問を発したが、苦笑いでかわした。

「それを調べるのが、われらの役目よ。まあ、此度は侍ゆえ、出番はあるまいが」

「確かに」

「これも小耳にはさんだのだが、おぬし、昨夜、捕らえられた爺さんと知り合いだとか」

「うむ。それで北町から使いがきた。何度か蕎麦を馳走してやった程度の知り合いだが、嬉しかったのやもしれぬ。藤兵衛がわしの名を出したらしゅうてな。呼ばれた次第よ」

「なるほど」

頷きながらも、内心、穏やかではなかった。与太郎同心だったはずなのに、留

以と所帯を持ってからは、周囲の評価が変わり始めている。盗っ人や騙りを捕らえたり、逆に無実の者を助けたりと、日々、確実に手柄をあげていた。決して口にしたくない言葉が、美之助の頭に浮かんでいる。

鴛鴦同心。

だれが呼んだのだろう、腹が立つことこのうえない。はじめは皮肉と嘲笑まじりだった異名が、これまた日々、らしくなってくるのを感じている。同役だけではなく、上役たちの耳目を集め始めていた。

美之助には焦りがあった。

「また藤兵衛とやらの頼みを聞いてやるのか」

訊かずにいられない。平左衛門は囚人となった者の願いを、密かにかなえてやるのが常だった。むろん町奉行も刑をくだす間際に、美味い飯を食わせる、知己に逢わせるといった便宜を取り計らっている。しかし、多くの囚人は、心を開かぬまま刑に赴くことが多かった。

平左衛門は囚人の、固く閉ざした心を開かせるのが上手い。取り柄はそれぐらいだが、少しずつ話が広がって、今回のように名指しする者も現れていた。

「なにも言わぬのじゃ」

ふたたび浮かぬ顔になっていた。

「事情があるゆえ、殺めたに相違ない。なれど詳しい話はせぬ。いくら考えてもわからぬのじゃ。なにゆえ、藤兵衛があの若者、豊吉というのだが、豊吉を殴り殺したのか」

「殴り殺したのか」

「うむ。削った樫の木で、これでもかというほどにな。かわいそうに、顔がわからぬほどであったわ」

樫の木は、木刀の材料に使われるほど堅い木だ。どんな思いで藤兵衛はそれを削ったのか。殺す相手の顔を思い浮かべながら……そのさまが頭に広がり、美之助は身震いした。

「それだけ怨みが強いということか」

「ゆえに、わからぬのよ。その怨みが、その深さが」

平左衛門は言い、腕を組む。

「永尋の扱いにできればのう」

独り言のように呟いた。

永尋は期間を切らずに調べること、日限尋は期間を切った調べのことで、欠落

や押込、追い剝ぎ、人殺しといったさまざまな犯罪に用いられる。しかし、騒動を有耶無耶にするために、わざと永尋扱いにする場合もあった。平左衛門が考えるようには運ばないのが世の常。ましてや人を殺めたとなれば、永尋になどなるわけがない。

「それはそうと、与力の八木沢様だがな」

つまらなくなったので話を変える。今日はいつになく早出をしたため、詰所に他の同心はいない。それでも注意深く戸口を見やってから、美之助は告げた。

「留以殿にいたくご執心だとか。用もないのに、家を訪ねることがしばしばあると、噂になっておる。剣術小町の頃より、気にかけておられたご様子。与太郎同心に、あ、いや、まさかおぬしの妻になるとは、思うてもおられなんだのだろう。気をつけた方がよいかもしれぬ」

「まさか」

平左衛門は一蹴した。それにかちんとくる。人が親切に言っているものを、こやつはなにもわかっておらぬ。どうとでもなるがよいわ。

「ま、いちおうな。耳に入れておいた方が、と、噂をすればじゃ」

慌てて自分の文机に戻った。

「おお、もう来ていたのか。わしが一番早いかと思うたが、感心なことよ」

八木沢兵庫が、悠然とした足取りで入って来る。年は三十五、背丈は軽く六尺（百八十二センチ）を超えていた。妻女を二年前に亡くして以来、独り身だったが、怜悧ではあるものの、整った顔立ちの持ち主。女が放っておかない。噂では、深川の借家に愛妾がいるようだった。

「野村」

呼ばれて、平左衛門は立ちあがる。

「は」

うつむいたまま、上役の席に行った。

五

「昨夜、北町から呼び出しがかかった由。捕らえられた者が、知己ということであるが、まことか」

兵庫が訊いた。美之助はむろん聞き耳をたてている。ひと言も聞きのがすまい、機会があれば助け船と称して、上役に自分を売りこもうと狙っていた。

「は。本庄殿にも話したのでござりますが」
平左衛門が肩越しに後ろを見る。呼ばれたと勝手に決め、美之助はすぐさま平左衛門の隣に進み出た。
「何度か蕎麦を馳走した程度の間柄だそうにござります。藤兵衛と申すそやつは、北町と南町の区別もつかぬ爺なのでござりましょう。名を出せば、思いどおりになると考えるのは無知の証にほかなりませぬ。それがしは、北町にまかせるべきであると存じます」
これ以上、平左衛門に手柄をたてさせてなるものか。上役や同役の耳目を集めるのは、この本庄美之助。悪態があふれ出そうになったが、それらは胸に秘めて、幼なじみの良き友を演じた。
ちらりと目をあげる。
「面倒なことは、我が南町に押しつけるか」
「仰せのとおりではないかと」
美之助の返事を、平左衛門が継いだ。
「北町の御奉行様におかれましては、かような御存念はないと思いまする」
地声が大きいのが功を奏していた。おまけに平左衛門は独特の遅い話し方をする。

美之助は口をはさむ機会を逸していた。

「では、あくまでもその藤兵衛とやらは、南町の同心、野村平左衛門を頼りにして、名指ししたと申すか」

兵庫の口もとには、皮肉めいた笑みが刻まれている。鈍い平左衛門も流石に慌てたようだった。

「い、いえ、頼りにしたなどとは思いませぬが、その、あの」

言葉にならない呟きを繰り返している。

「ときに、八木沢様」

好機到来とばかりに、美之助は口をはさんだ。心の中で隣の平左衛門を蹴り飛ばしている。そのうえで続けた。

「お上におかれましては、御旗本や諸藩に鉄砲の修練を奨励なされた由。これは、やはり、英吉利や亜米利加といった国々の船が、数多く訪れたせいでありましょうか」

得意な方に話を変える。

十二代徳川家慶の御代であるが、火事や騒ぎの多い年といえた。年が明けたばかりの一月十五日。小石川馬場のあたりから火の手があがり、本郷一帯、京橋方向

や鉄砲洲、佃島にいたる方向まで、二百九十町あまりが焼けた。

二月には、仁孝天皇が崩御、孝明天皇が即位している。

さらに四月から五月にかけて、外国船の渡来が頻発し、幕府は危機の折から、江戸市中における鉄砲の四季打ちを奨励していた。佐渡海岸要地に台場を築き、佐賀藩も反射炉を築いている。

剣呑な空気が高まっているときであった。

「さよう。お上も事ここに至っては、静観できぬと思うたのであろう。なれど今の旗本や大名家の藩士に、鉄砲を扱える者がいるのであろうか。疑問がなきにしもあらずよ。ぬるま湯のような暮らしの中では、鉄砲どころか、まともに刀も使えまい」

兵庫は、冨田流の免許皆伝を許された腕前であるため、どうしても武道の話が出る。直心影流を学び、腕におぼえのある美之助は大きく頷き返した。

「仰せのとおりにござります。かの柳生十兵衛様におかれましては、刀にわざと赤銅の鍔を用いていたと聞きました。流石と思いました次第」

「ほう。美之助はあの話を存じよるか」

兵庫は、話を振るように、平左衛門を見た。美之助の意図を読み取ったに違いな

い。以心伝心、さて、どう出るかと、横目で盗み見る。

「それがしは剣術は苦手でござりますゆえ、剣客の話も存じませぬ。柳生十兵衛様が、柳生新陰流の優れた剣客であることぐらいはわかりますが」

あっさりと白旗をあげた。拍子抜けするほど、声や表情に翳りがない。ときに童子を思わせるこの屈託のなさが、曲者なのかもしれなかった。

「美之助」

答えよという命を受け、美之助は平左衛門に向かって告げる。

「赤銅の鍔というのは、あまり丈夫なものではない。ときとして斬り落とされかねぬ。ゆえに普通の武術家は用いぬのよ。されど、十兵衛様はそれだけ腕に自信があったに相違ない。敢えて、使うたそこに心意気が感じられるではないか」

「なるほど」

平左衛門は同意した。特に感心している様子はないが、さりとて馬鹿にするでもない。いつもどおりの、あるがまま受け入れるという態度だった。妙に腹が立つのは、美之助だけではなかったのだろう、

「野村は刀にも興味はないか」

兵庫の語調がいささかきつくなる。

「いえ」
と答えたものの、あとが続かない。もごもごと口ごもるのを見て、仕方なく美之助は助け船を出した。
「八木沢様。おめでとうございます」
意味ありげに告げ、畳に額をこすりつけんばかりにして、一礼する。ふたたび横目で盗み見ると、平左衛門は「はて？」と首を傾げていた。留以がいなければ、今までどおりの与太郎同心。それを上役に見せつけて、少しだけではあるものの溜飲をさげた。
「年明けには、与力の支配役に就かれると伺いましてございます。すでにお務めあそばされている年番役に加えてのご出世。ただただ驚くばかりにございます。八木沢様のお年で賜ることは、めったにない由。なれど、それがしは、いささか遅すぎた感がなきにしもあらずと思いました次第」
「なんと!?」
遅れて、平左衛門も平伏した。
「おめでとうございます」
「いつもながら、美之助は早い」

兵庫の苦笑いには、隠しきれない喜びが見え隠れしている。よくぞ言うてくれたという、声なき褒め言葉も表れていた。話を早くつかむのは言うに及ばず、世辞や追従がうまくなければ、やりにくくなるは必定。思わずほくそえみそうになったが、意識して生真面目な表情を造った。

「八木沢様には及びませぬ。これからもご指南、賜りたく存じます」

「それがしもお願いいたしまする」

平左衛門も慌て気味に頭をさげたが、とってつけたように聞こえなくもなかった。してやったりと、美之助はひさしぶりに満足感を覚えている。実際のところ、平左衛門が留以と祝言をあげるまでは、毎回、この調子だったのだ。美之助にとって平左衛門は、引き立て役にほかならなかったのである。

「わかっておると思うが、内密にな」

兵庫の言葉には、二人同時に頷いた。

「ははっ」

「それはそうと、野村。剣術小町はご息災か」

兵庫はさりげなく留以の話を口にする。

（やはり、な）

美之助は待ってましたと快哉を叫びかけたが、むろん口にするわけもない。黙ってやりとりを見守るのが得策、口ごもる平左衛門の腕を肱で突いた。

「は」

ひと文字で終わる。

「この間、さよう、三、四日前であったか。そちの家の前を通りかかったとき、ちょうど家から出て来た留以殿をお見かけしたが、いちだんと美しゅうなられたの。まさに花が咲いたかのような風情であった。野村は果報者よと、しみじみ思うた次第よ」

「は。それがしにはもったいない妻と思うております。あの気むずかしい母にも、よう仕えてくれております。料理や家事はまだおぼつかないのですが、一生懸命、やる姿が実に健気と申しますか。朝はそれがしよりも早く起き、夜は戻るまで寝みませぬ。一昨日と昨日は、亡き両親の祥月命日で実家に帰ったのでござりますが、留以のいない家は火が消えたよう。帰る足が重うて、重うて」

「平左衛門殿」

流石に美之助は窘めたが、自慢話は止まらない。

「八木沢様も仰せになられましたとおり、それがしは、まことに果報者。毎朝、留

以の顔を見ては、これは現実なのかと目をしばたたかせることも珍しくありませぬ。ご存じやもしれませぬが、智恵者でござってな。そのうえ物覚えがまたよいのでござるよ。一度、見た人相書は絶対に忘れませぬ。それがしがあげた手柄のほとんどは、留以の知らせによるものでして……」

「野村殿」

他人行儀に告げたそれで、ようやく平左衛門は我に返った。

「あ」

「いやはや、熱い、熱い。朝から惚気を聞かされては、たまりませぬな、八木沢様」

美之助はおどけたが、兵庫は冷ややかな一瞥を返しただけだった。あきらかに気分を害している。上役の機嫌を損ねては、後々、支障が出かねない。

「かねてより、ひとつ、気になっていることがあるのだがな。どうやって留以殿を口説いたのだ。なにか言うたのであろう。剣術小町を陥とした色男の台詞を、是非、教えてはもらえぬか」

かなり無理して、受けそうな話を口にする。ともすれば引き攣りそうになる頬に、強張った笑みを浮かべた。留以に助けられたという、なれそめは知っているが、所

帯を持つにいたった言葉、留以にその決意をさせた言葉について、聞いたことはなかった。

「それは」

平左衛門は目をあげた後、耳まで赤くなった。ふたたび俯いて、念仏のような繰り言を始める。

「……」

鼻白んだ顔で、美之助は兵庫に目を走らせた。上役はすでに関心を失っている。入って来た同心のひとりを見て、立ちあがった。

男が頬を染めた姿など面白くもなんともない。

（こやつは、まことに与太郎同心よ）

美之助はさっさと席に戻る。二人が立ち去ったことにも気づかず、平左衛門は俯いたまま、「あの、その」と繰り返していた。

呆れるのを通り越して、哀れにさえなってくる。先刻まであった焦りの気持ちは、見事に消え失せていた。

嘲笑まじりの苦笑いが、美之助の唇に刻まれている。

六

そして、八丁堀の野村家でも、平左衛門のことを笑う者がいた。

「……いつまで笑うているのですか」

留以はこらえきれずに、おのぶを睨みつける。朝餉（あさげ）の支度を終えて、姑と小姑に膳を運び、台所に戻ったところだった。留以は一緒に食べることを許されていない。これまた野村家の御定書により、二人が終えた後でなければ、朝餉を食べられないのだった。

「申し訳ありません。でも」

そう答えながら、おのぶは、またもや含み笑いを洩らした。

「いいかげんになされ。平左衛門様は、野村家の主ですよ。なにがかように可笑（おか）しいのですか」

「いえ、留以様のお顔が、あまりにも真剣だったものですから。ご案じなされますな。旦那様が浮気をするなど、ありえぬこと。天地がひっくり返っても、かような事態にはなりますまい」

「なれど、義姉上様は」
「嘘ですよ。お二人の仲がおよろしいので妬いておられるのです。鴛鴦同心などと呼ばれ始めているのが、お気に召さないのでしょう。真に受けてはなりません」
おのぶは笑って、塩をひとつまみ、手に取る。飯櫃から炊き立ての飯を杓子で取ると、手早く塩の握り飯を作った。
「ですが」
さらに反論しようとした留以の口に、小さな塩握りを放りこむ。いつもであれば、その旨さに満面の笑みを浮かべるのだが、
「う」
危うく吐き出しそうになった。
「留以様」
慌てて、おのぶが自分の両手を差し出した。かろうじて飲みこんだが、喉につかえたようになっている。柄杓で水を汲み、やっとの思いで飲みくだした。
「大丈夫ですか」
「ええ」
「また、ですね」

「え？」

「一度目のときも」

おのぶは、曖昧に言葉を濁した。

一度目のときとはほかでもない、初めて『仕事』をしたときのことだ。四か月ほど前になるが、今のように喉のあたりで物がつかえてしまい、三日間、なにも食べられなくなった。希与は悪阻ではないかと早とちりして、大騒ぎになった憶えがある。

「無理なのではありませんか。わたしから元締に、お話ししましょうか。探索役を務めれば充分なのでは……」

「少し風にあたってきます」

遮るように言い、留以は勝手口から外に出た。南向きの庭には、大根や葱といった野菜が植えられている。庭に家を建てて貸す同役もいたが、野村家では野菜畑にしていた。留以は裏木戸の方に足を向ける。

「おお、寒い」

強い北西風が吹きつけてきた。身を切るように冷たい風だったが、むしろ今はそれが心地よい。もっと、もっと凍りつくほどに、冷たくなればいいのにと思った。

この身体が凍りついて、この世から消えてしまうほどに……。

「おはようございます」

木戸の向こうから明るい声がひびいた。向かいの本庄家の嫁女、沙苗である。年は十九、十人並みの容姿だが、色がぬけるように白い。皮膚のきめが細やかで、白粉を付ける必要がないように思えた。

道の掃除をしているのか、竹箒を握りしめている。風が埃を舞いあげ、着物の裾に悪さをする。気をつけないと腰巻があらわになりそうだった。

「沙苗様。おはようございます」

留以も竹箒をつかむや、急いで木戸から道に出た。すでにおのぶが掃除をしていたが、同じようにしなければならない。挨拶だけで家に引っ込もうものなら、ろくに掃除もしないだの、野村家の掃除までやらされただのと言われかねなかった。

「希与様と環紀様のお世話は、大変でございましょう。朝餉のお支度にも手間がかかるのではありませんか」

なにげない口調で、沙苗が話しかけてきた。下手に頷こうものなら、半刻（一時間）後には組屋敷中に、留以が言ったという話が広まっているのは確かだろう。以前、返事をしないで黙っていたことがあるのだが、それでも「留以が言った」言葉

として、ひどい思いを味わわされた。楚々として、見るからにおとなしそうなのだが、なかなかどうして、気のぬけない女子なのである。

「いいえ。お二方ともなにを出しても黙って食べてくださいます。よい家に嫁げたことを幸いと思うております」

きっぱりと答えた。竹箒で掃き清めながらも、油断なく心配りをしている。やさしげな面をしている沙苗が、なぜ、意地の悪い真似をするのか、留以にはわからない。夫の美之助に不満でもあるのだろうか。

「さようでございますか」

沙苗は、仏のような微笑をくずさなかった。読めないこの表情がおそろしい。心ではまた野村家のよからぬ噂話を広めてやろうと目論んでいるのではないか。早々に引きあげたかったが、ひとつ、どうしても確かめたいことがあった。

「民子様のおかげんは、いかがでございますか」

本庄家につい視線を向けている。本庄民子は、美之助の母なのだが、長い間、胸を患っているため、あまり外には出てこない。一日置きぐらいに見舞うようにしていたが、三日ほど無沙汰をしていた。

「そのことなのですが」

我が意を得たりとばかりに、沙苗の顔が輝いた。
「かような場所で立ち話もなんでございますゆえ、中にどうぞ、おいでください。義母も留以様がおいでにならなくて、寂しがっておりました。法事でご不在なのだと言うたのですが、同じ話を繰り返すばかりで」
答えを聞く前に、本庄家の裏木戸を開けて押さえつけた。押さえていないと、強風ですぐに閉まりそうになる。
「見舞うてやってくださいませ」
「では、おのぶにその旨、伝えて参ります」
「後ろに」
沙苗は顎をあげて、背後を指した。畑の雑草でも抜きに出て来たのか、弥太郎が小さく会釈する。留以は早口で告げた。
「民子様のお見舞いに参ります。義母上様にお伝えしてください」
無言で弥太郎は頷き返した。たとえ向かいの家であろうとも、断りなく訪ねるのはご法度。これまた嫁いだばかりの頃は、独特のしきたりがわからなくて、お小言をもらうこともしばしば。いまだに慣れることはできないものの、かわすぐらいはできるようになっていた。

（元締の）

木戸に足を踏み入れる直前、目の端に仕事人の元締の使い役が映る。まだ稚なさの残る面立ちの美少年だったが、留以は素知らぬ顔をして、本庄家に入った。

家や庭の造りは変わらないが、若き主、美之助の趣味は花を育てることだ。庭には野菜ではなく、春に咲く草花が寒風に葉を震わせている。それらを横目で見ながら、留以は、煎じ薬の匂いが漂う廊下にあがった。

「すごい風ですね」

手拭いで着物の埃を払い、沙苗のあとに続いた。

「義母上。留以様ですよ」

呼びかけて、奥座敷の障子を開ける。本庄家も野村家同様、民子は寡婦として、美之助を助けてきた。労咳の症状が表れたのは、三年ほど前からのようだが、留以は妹――朋江の伝手で玄斎という優れた医師を本庄家に紹介している。ここしばらく容態が落ち着いているのは、そのお陰ではないのだろうか。

「留以殿」

民子は、留以を見て起きあがろうとする。

「どうかそのままで」

素早く枕元に行き、乱れた掻巻を掛け直した。火鉢に載せられた鉄瓶から、しゅんしゅんと白い湯気があがっている。南側の一番よい座敷を、大奥様の寝所にしているところは野村家と変わらない。

「よう来てくださいましたな」

「沙苗様にお声をかけていただきまして」

目と目が合っただけで、民子の表情がなごんだのを感じた。留以も同じ気持ちをいだいている。狐や狸が跋扈する組屋敷において、唯一、落ち着けるのが、民子の傍らだった。亡き母を思い出さずにいられない。

雰囲気が似ていた。

「今、お茶を」

立ちあがろうとした沙苗に、民子は早口で告げた。

「茶はよい。わたしは水飴がほしゅうてならぬ。すまぬが、沙苗殿。十軒店まで買いに行ってはもらえぬか」

一瞬、微妙な間が空いた。追いやろうとしている気配を察したに違いない。それでも姑に逆らうのは、まずいと思ったのだろう。

「承知いたしました」

答えて、沙苗は部屋をあとにした。真っ直ぐ玄関に向かい、出て行くのを確かめた後、

「さあ、これで邪魔者はいなくなりましたよ。思う存分、話をいたしましょう」

民子は悪戯(いたずら)っぽく笑った。

「はい」

留以も笑顔で応じる。

「沙苗殿も悪いお方ではないのですがねえ。八丁堀生まれでございますゆえ、悪癖(あくへき)が身についてしもうている様子。許してやってください、留以殿」

「いえ、そんな……許すもなにもありませぬ。わたしは右も左もわからぬ未熟者、沙苗様には色々と教えていただいております」

「悪い噂の広め方とか？」

民子の答えに、どちらからともなく笑みが洩れた。小さな笑いは、やがて、大きな笑い声となる。外に出られなくても、民子はよくわかっていた。六畳間に敷かれた布団の上から、実にさまざまな事柄を見ている。

「お顔の色がよろしいので、安堵いたしました。玄斎先生の往診は、昨日だったと憶えておりますが、お薬は間に合うておられますか」

「そのことなのですよ、沙苗殿の話とは」
ふたたび起きあがろうとした民子に、今度は手を貸した。傍らにあった綿入れを羽織らせてやる。喉を湿らせるためだろう、枕元の盆に載せられた湯飲みに手を伸ばした。
「お待ちください。お身体にさわりますので白湯を」
留以は素早く動いた。湯飲みを空にすると、手拭いで鉄瓶を持ち、湯飲みに注いだ。それを、民子に握らせる。
「ほんに、留以殿は行き届いておりますな。そなたが美之助の嫁であればと、何度、思うたことか」
「いえ、粗忽者のうえ、大雑把な気質でござります。義母上様には、叱られてばかりでございます。それで」
と、話を進めた。
「玄斎先生がいかがなされましたか。往診には来られぬとでも仰ったのですか」
「そうではありません。ただ沙苗殿は、ちと往診代が高すぎると、まあ、そういうことです。なんでも本所相生町にいる女医者が、たいそうな評判であるとか。往診料や朝鮮人参といった薬の値段も格安であるらしゅうてな。そちらに替えたい

のでしょう」

「朝鮮人参は、上品と下品の差が大きい薬です。安かろう、悪かろうでは困ります。多少、料金が高うても、安心して診てもらえるのがなによりではありませんか。それに本所はいささか遠いように思えます。なにかあったとき、すぐに来てもらえませぬ」

顎をあげて、留以は言った。

「わかりました。わたしの口から沙苗様に、あらためて申しあげます」

「おお、戦場に行くようなお顔をしておいでじゃ」

民子の揶揄に、すかさず応える。

「はい。八丁堀の戦でござります」

そこでまた笑い合った。

この空気がいい。噂話をしているのだが、あからさまにあげつらうわけではない。互いに陰口を抑えて、笑いに変えるのが好きだった。

笑い声が途絶えた一瞬、

「風が」

ふと留以は、その音に気づいた。

虎落笛（もがりぶえ）である。

笛が鳴るような音が、外でひびいていた。辛い昔を呼び覚ます音、聞いているだけで涙があふれそうになる。耳を塞（ふさ）ぎたくなる気持ちを感じたに違いない。

「大丈夫ですよ」

民子がそっと手を握りしめた。母のような眸をしていた。留以は知らないうちに、きつく民子の手を握り返している。

十年前のあの日が脳裏に甦（よみがえ）っていた。

第二章　虎落笛（もがりぶえ）

一

家のまわりの竹垣や柵に、冬の強い北風が吹きつけ、笛が鳴るような音を出すことを虎落笛という。

もがりは、もともとは戦の際、竹を筋違いに組み、縄で結わえた防御柵の矢来（やらい）や、竹を高く並べた物干し場のことだった。

十年前のその日、虎落笛が聞こえていたその日、天城（あまぎ）留以はまだ十歳。風邪をひいて熱を出していた。本当は姉や妹とともに、父――天城小十郎（こじゅうろう）の盟友、近藤時之助（ときのすけ）の家に行くつもりだったのだが、ひとりだけ屋敷に残らざるをえない状態になっていた。

「姉上たちは、今頃、近藤様と」

呟いたとたん、激しい咳が出る。織江と朋江は、時之助夫婦に連れられて浅草の酉の市に行き、今日は近藤家に泊まることになっていた。賑やかな酉の市、そして、その後は料理屋で会食。指折り数えて楽しみにしていたのに……。

「また次がありますよ。織江がお土産を買うて来ると言うていたではありませんか。それを楽しみになさい」

母の安江がぽんぽんと、慰めるように掻巻を叩いた。不思議に心がなごむ仕草だった。掻巻をやさしく叩かれているうち、いつしか深い眠りに落ちていたのかもしれない。

「安江」

父の叫び声で、留以は目覚めた。ほとんど同時に刃鳴りの音と怒号がひびきわたる。枕元にいた母は、ただならぬ空気を感じ取ったのだろう。留以を抱き起こすと、隣の仏間に移った。

「母上」

「静かに」

母は落ち着いていた。床の間の脇にしつらえられた飾り棚に手を入れると、なに

かを引っ張るようにぐっと力をこめた。次の瞬間、床の間の壁がわずかに横に動き、背後に隠れていた小部屋が現れた。壁全体が引き戸のように、動く仕掛けになっていたのである。

「この隠し戸は、内側からしか開けられぬ仕組みになっています。母がここを閉めたあとは、絶対に声を出してはなりませぬ」

留以をそこに入れて、安江は囁いた。

「なにが起ころうとも……よいですね」

隣室の明かりが、緊迫した母の表情をうすぼんやりと浮かびあがらせている。留以は無言で頷いた。そうすることしかできなかった。

もとに戻される壁、母の姿が見えなくなる。が、暗闇の中に一点の明かりが見えた。あらかじめ設けられていた覗き穴だったのか、ただの節穴だったのかは、わからない。留以はその穴から座敷の様子を覗き見た。

刃鳴りと怒号は続いている。

それは次第に、奥座敷の方に移って来た。安江は懐剣袋（かいけんぶくろ）の紐を解き、袋から出すと、躊躇（ためら）うことなく抜いた。

「女だ」

「奥方か？」

留以が寝んでいた座敷から、男たちの声がひびいた。だれかが座敷にあった行灯を掲げたのだろう、仏間に立つ安江の顔が、はっきりと浮かびあがる。

「いかにも天城安江です」

眼前に懐剣を構えて答えた。

「だれに命じられてここに……」

問いかけの途中で、男たちは切りつけた。安江はよくしのいだが、右側から襲いかかった男の匕首に手首を切られた。

懐剣が畳に落ちる、流れた血も落ちる。

「すぐ始末するつもりだったが」

男のひとりが傷ついた右手を握った。安江は舌を噛もうとしたのかもしれない。別のひとりが手際よく猿轡を咬ませた。手慣れていた。

そこから先のことは思い出したくもない。

賊は安江をかわるがわる陵辱し、最後に喉を切って、殺した。留以は肌脱ぎしたひとりの背中に、虎の彫物を見た。

「お頭」

と、男は呼ばれていた。
「金はあったか」
「二十両ほど」
「なんだ、それっぽっちか。目付も景気が悪いようだぜ」
「終わりました」
別の男が姿を見せた。
「ひとり残らずか」
「へい」
「よし、引きあげるぞ」
頭と思しき男は、着物に袖を通して、言った。
「上方に行く。当分の間、江戸とはおさらばだ」
だれもいなくなった座敷に、虎落笛の音がひびいている。
身体が締めあげられるような音だった。

二

もがりの猛蔵。

それが夜盗の頭の異名であることを知ったのは、仕事人になった後である。留以は夫の平左衛門にも、賊の背中に虎の彫物があったことを告げていない。町奉行所が捕らえるのは無理だと端から諦めていた。

翌日。

留以は家を抜け出して、鎌倉河岸に向かっている。

小伝馬町の牢屋敷を左に見ながら通り過ぎ、本銀町四丁目に差しかかっていた。供をしているのは、おのぶひとりで、弥太郎は家に残っている。午を過ぎたばかりの町は、師走の忙しさがあふれていた。行き交う人々はいつも以上に早足であるため、落ち着かない気持ちになる。

「帰ったらまたお小言でしょうね」

独り言のような呟きを、おのぶが継いだ。

「仕方ありませんよ、あれが大奥様の生き甲斐なんですから。なんと申しますか、

ご自分以外の女子に対しては、激しい敵意をお持ちのお方でございますね。実の娘の環紀様にさえ、辛辣な物言いをなさいます。思いますに、世の中の女子すべてが、敵なのではありますまいか」

どきりとするような意見を述べた。修羅の道を生きてきたからだろうか。非常に鋭い観察眼を持っていた。

「世の中の女子すべてが敵、ですか」

噛みしめるように繰り返した。

「はい。大奥様にもわからない気持ちかもしれません。敵意を叩きつけることで、この世にいる女子のすべてが、死に絶えるとは思えませんけどね。邪魔者を取り除き、生き易い状況を作る術には、長けているように感じられます」

面白いことを言うと思った。希与の狭量さや気むずかしさは、だれもが感じるものだろう。若い頃からああいう気質だったのか、そこまではわからない。

「八丁堀は、独特の空気を持つ土地。正直な話、そのまん真ん中の家に奉公することになるとは思ってもいませんでしたよ」

おのぶの唇に、皮肉な笑みが滲んだ。仕事人と八丁堀の与力や同心は、水と油の間柄。間違っても助け合うことなど、あるわけがない。おそらくそう思い続けてき

たであろう弥太郎夫婦が、今は八丁堀の同心宅の下男と下女を務めている。
「ほんに、縁とは不思議なものですね」
しみじみした留以の言葉に、なにか感じるところがあったのか、
「ひとつ、お伺いしたいことがございます」
おのぶが言った。
「留以様ほどのご器量よしであれば、大身の御旗本に嫁ぐこともできたのではありませんか。ご実家は御目付役を賜る家柄、同格の家どころか、重臣の家に嫁ぐこともできたでしょう。朋江様に伺ったのですが、剣術小町は引く手あまただった由。降るような縁談を断ってまで、なぜ、旦那様を選ばれたのですか」
あんな盆暗を、とまでは流石に口にできなかったのかもしれない。が、言葉の端々に隠しきれない平左衛門への評価が表れていた。似合いの夫婦はよく使われる言葉だが、留以たちの場合は、不似合いな夫婦ではないのか。いつもの口癖は出なかったが、目は口ほどに物語っている。しかし、ここで夫婦談義をするつもりはなかった。
「旦那様は、春の陽だまりのようなお方。わたしは、あのあたたかさに包まれるのが好きなのです」

あたりさわりのない返事に満足できなかったのか、
「留以様に決意させた旦那様のお言葉は？」
おのぶは、一歩、踏みこんできた。
「なんと仰られたのですか」
「言えませぬ」
答えて、留以は足を速めた。この男の妻になろう、一生、添い遂げようと、決意させた言葉が確かにある。しかし、軽々しく口にするつもりはなかった。同じ話をしても仕方がないと思ったのだろう、
「それで、いかがなされます。旦那様が仰られた藤兵衛という老人を調べますか。それとも先に日本橋檜物町の芸妓屋をあたりますか」
おのぶは隣に来て囁いた。不覚にもぴくりと眉が動いた。それで充分だったに違いない。
「承知いたしました」
早口で応えたそれに慌てた。
「おのぶさん」
思わず足を止めたが、

「留以様は正直なお方。わたしも亭主も、そのご気質に惚れたのです。だからお仕えしようと決めました」

真顔で言われてしまい、返事に詰まる。先に歩き出したのは、おのぶだった。今度は留以が追いかける形になる。

「ご案じなされますな、藤兵衛という男のことも調べます。深川の遊女屋の外で待ち伏せていたらしいという話は聞きました。殴り殺したようですが、そのあたりのことも含めまして、詳しく調べます」

おのぶは歩きながら、すでに調べ始めているのだと告げた。弥太郎夫婦は頼りになるうえ、信頼できる。二人の扶けなくして、裏の仕事は成り立たない。留以の方も「だから」なのだった。

仕事人として生きようと決めたのである。

「二人に出逢わなければ、今のわたしはありませんでした。ありがたく思うています」

「ですが」

おのぶは目を逸らして、続けた。

「今も揺れているのでございますよ。本当にこれでいいのか、と。わたしどもに出

逢わなければ……」

「出逢えた幸いだけを考えます」

遮って、また足を速める。本銀町一丁目の通りから、堀に面した通りに出た。右に曲がって竜閑橋を渡れば、そこが鎌倉河岸である。

西に三河町一丁目、北に松下町と新革屋町、堀を挟んだ南側には、伝奏屋敷を含む武家屋敷が立ち並んでいる。さらにその先はと見れば、将軍の住まう御城が広がる区域だった。その鎌倉河岸の一角に、仕事人の元締――源内が営む諸色問屋〈なにわや〉の見世がある。

「お知らせして参ります」

おのぶが小走りに見世へ急いだ。

諸色問屋は、おもに江戸と地方の間で流通する米や油、木綿といった商品の仲介をする商いだ。見世の造り自体は、呉服問屋とさして変わらない。土間の向こうに帳場を兼ねた畳敷きの場所があって、そこで見本の品を客に見せたり、商談したりする。おのぶが戻って来る間、留以は鎌倉河岸に立ち、向かいの土手を見るとはなしに眺めていた。

春には芝桜で桜色に染まる土手が、吹きすさぶ風を受けている。西に目をやれ

ば神田橋御門があって、向かいには大番所が設けられていた。鎌倉河岸は広小路のような感じがするほど広々としている。雛祭用の白酒を売ることで有名な〈豊嶋屋〉もこの一角に見世を構えていた。

「先に乗っているようにという仰せです」

おのぶが戻って来た。

「こちらへ」

先に立ち、船着き場の方に案内する。留以は先日のあれが、二度目の仕事であり、言うなれば新参者だ。不慣れであるのはいなめない。あとに続こうとしたとき、

「どちらへお出かけですか」

背後で鋭い声がひびいた。肩越しに振り向くと、源内が御新造に腕を摑まれていた。婿入りした源内は、尻に敷かれているのだった。

「寄り合いですよ。昨夜、そう言ったじゃありませんか」

「聞いていませんよ。また深川でしょう。気づかないふりをしてきましたけどね。とうの昔に気づいていたんです。新しい女の年は十八、よくもまあ、ご自分の娘と同い年の妾を囲う気になったものですよ」

「や、やめないか、声が大きい」

源内は狼狽えて周囲を見まわした。留以は苦笑いせずにいられない。何処も同じ悩みを抱えているのだろうか。

「他人事ではありませんね」

おのぶの、心を読んだような言葉には、曖昧な笑みで応えた。案内されるまま竜閑橋を渡って、船着き場に繋がれていた屋根船に乗る。中には炬燵と手炙りまで用意されていた。一度目のときもそうだったが、源内は裏の仕事に関わる話は、この屋根船の中ですることが多い。

「いつも船を使うのですか」

留以は訊いた。乗りこんですぐに船の障子を閉めている。船頭も仲間だと聞いていたが、昼日中、屋根船に乗っているところは、できるだけ見られたくない。

「いえ、以前は、依頼人の訴えを聞く古寺を使っていたんですけどね。留以様を慮っているんじゃないでしょうか。家を抜け出すのがむずかしいのは、元締もおわかりだと思いますので」

「訴えを聞く古寺とは」

「仕事人になるとき、お話しいたしました浅草の今戸の古寺でございますよ。なまぐさ坊主も、もとは仕事人。『犬』の始末を頼みたい者は、密かにこの古寺を訪ね

るのでございます。此度の依頼人は、辻斬りの被害に遭った中店の主の御内儀だったとか。依頼人を知りすぎると、仕事に障りが出かねません。色々と考えたうえの、やり方なのではないかと存じます」

「そうですか。被害に遭った夫の仇討ちでしたか」

呟きの途中で船が揺れた。

「やれやれ、とんでもないところを見られてしまいましたね」

源内が姿を見せる。年は五十前後だろうか。絹の着物と羽織に、洒落た縞柄の襟巻きを巻いている。若い頃はさぞや女を泣かせたに違いない。なかなかの色男だったが、おっとりとした物腰を見る限り、仕事人の元締とはとても思えなかった。

「行っておくれ」

呼びかけると、船がゆっくり動き出した。

三

「まずはご苦労様でございました」

源内は深々と頭をさげる。

「ささ、どうぞ、お使いください。ご遠慮なさらずに」
と、留以に炬燵と手炙りを勧めた。おのぶが横で熱燗の用意をしている。あらかじめ積みこまれていた箱膳には、仕出し料理と思われる小鉢や丼が並んでいた。名のある料亭に違いない。彩りも美しく、まず目で楽しめた。
「途中で他のお二人を拾う段取りになっています。今日は冷えますね。留以様も一献、いかがでございますか」
差し出された杯を、留以は丁重に辞した。
「いえ、昼間からお酒の匂いをさせるわけにはいきませんので」
「さようでございますか」
「元締。わたしでよければ、お酌いたしますよ」
おのぶが、酌婦を買って出る。源内はどうせなら留以にという目をしたが、口にはしなかった。
「あの」
躊躇いがちに切り出した。
「お願いしている件でございますが、なにか新しい話はありましたか」
仲間たちが乗りこんで来る前に必要な話を終えたい。『もがりの猛蔵』の話が聞

きたかったのだが、源内は小さく首を振る。
「残念ながら新しい話はございません。江戸は鬼門と思っているのでしょう。上方から京を縄張りにしているようです。動きはありませんね」
「そう、ですか」
盗っ人の話を教えてもらうため、留以は、仕事人の世界に足を踏み入れた。背中に虎の刺青を持つ男が、『もがりの猛蔵』であることを教えてくれたのは源内である。
「猛蔵が江戸に姿を見せれば、すぐに知らせが入ります。及ばずながら、この源内。留以様の仇討ちにお力添えいたしますよ」
「ありがとうございます」
本当にその日がきたときには、断るつもりだったが、今は話を合わせた。「ただ」と源内は訝しげに眉を寄せる。留以はおのぶと目を合わせてから、問いかけた。
「なにか気になることでも？」
「いえ、猛蔵が狙うのは、大店や中店といった商人の見世。お武家の、それも御目付様の屋敷に押し入ったのが、いささか解せません。手に入れたい品でもあったのか」
自問のような言葉が出た。杯を空けて、留以を見る。

「盗まれた品の中で、特に憶えておられる物はございますか」
「わかりませんが、姉は憶えているかもしれません。この次、逢いましたときに、訊いて参ります」
「それにしても、大胆不敵と申しますか。御目付様のお屋敷に押し入るとは……猛蔵は盗っ人仲間では、たいしたやつだと言われているとか。ずいぶんと株をあげたようでございますよ」
「元締」
おのぶに窘められて、源内は慌て気味に言い添えた。
「申し訳ありません。口がすぎました」
「旦那様」
船頭の呼びかけがひびき、船が岸に寄る動きを見せた。人が乗りこむ動きの後、浪人の岡田文士郎が入って来る。
「お」
熱燗を見て、口もとをほころばせた。
「流石は元締。気が利いておるな」
文士郎は先祖代々の浪人暮らしという、江戸に多くいる侍のひとりだった。二十

代後半ぐらいだろうか。居合いの達人だが、女にだらしない一面がある。加えて、博奕好きときては、金が貯まるはずもない。仕事をしたあとにもらう礼金は、右から左に消えるようだった。

「首尾は上々、さて、次はいつだ」

炬燵に足を入れながら、源内に右手を差し出した。ほとんど同時に左手で鉄瓶に入っていた熱燗を取る。そのまま銚子の注ぎ口に口をつけた。

「まだ調べがついておりません。今少しお待ちを」

「さようか」

特に気を悪くしたふうもなく、文士郎は箱膳の料理を食べ始める。せっかちなところはあるものの、陽気な気質で、源内同様、仕事人とは思えない明るさを持っていた。あるいは努めてそう振る舞っているのかもしれない。

「お真佐か」

船の動きを読んで、文士郎が言った。ほどなく船が岸に着き、人が乗りこんで来る。地味な色目の着物姿は、いつ会っても変わらない。

「寒うございますね」

お真佐は挨拶して、炬燵に足を入れる。年は二十七、八。垢抜けた風情の女は、

幼い頃から吉原で針妙と呼ばれるお針子をしていた。ゆえに通り名は『針妙のお真佐』、ろくに腰巻も繕えない遊女たちは、お真佐たちの助けがなければ美しく装えない。

「さて」

源内は、座り直して、見まわした。

「三匹の犬は、見事に始末されました。留以様に仇討ちのふりをしていただいたのが、功を奏したようでございます。てまえが書いた脚本どおりに運んだのは重畳、御礼申しあげます」

頭をさげると、懐から懐紙に包んだ礼金を出した。文士郎、お真佐、留以の順に渡される。五両の重みを感じて、内心、安堵していた。

(これで、おのぶさんたちに給金を支払える)

吝嗇家の姑は、必要な金さえ渡さない。細々とした身のまわりの品を買う金や、嫁入りの際、留以が実家から連れて来た弥太郎夫婦への給金などを捻出するのが、ひと苦労なのである。姉の織江は婿養子を取って近藤家を継いでいるが、武家はどこも楽ではない。妹の朋江は裕福な商家に嫁いだが、妹から金子を扶けてもらうのはいささか抵抗があった。

『もがりの猛蔵』の行方を探るためと、苦しい懐具合。これらを考えぬいた結果、留以は仕事人に身を投じることにしたのである。

まだ慣れない新参者が気になるのか、

「濃やかな仕掛けをするのが、真の仕事人でございます」

源内は、過日と同じ話を口にした。

「近頃は弁えない仕事人が多くて困ります。ただ始末すればいいと思っている輩がほとんどではないでしょうか。綿密に筋書きを描いて、標的に不審をいだかれぬよう、細心の注意を払いながら仕事をする。この心得がなくてはいけません」

「あの『三匹の犬』が手にかけたのは、十二人にものぼるとか」

文士郎が酒を飲みながら続けた。

「わかっているだけで、だがな」

少しでも新参者の気持ちを楽にしてやろうと、努めているのが伝わってくる。仲間たちは標的を敢えて『犬』と呼んでいた。これも己の心の負担を軽くするためだろう。もっとも留以は、たとえ本物の犬であろうとも斬るのは抵抗があるのだが……。

「鬼子母神から逃げるときのあれですが、留以様は、もっと大声をあげた方がよか

ったように思います」
お真佐が遠慮がちに意見を発した。
「確かに」
と、文士郎が受ける。
「つい、そうしてしまったのだろうがな。だれかに聞こえては困ると、留以殿は心のどこかで考えたわけよ。ゆえに、叫び声が小さくなった」
言われてみれば、そのとおりだったかもしれない。助けを求めたにしては、声が小さすぎたかもしれなかった。
「申し訳ありませんでした」
謝ると、
「いや、生真面目にとらえることはない」
文士郎が答えた。
「『犬』どもが不審をいだけば、筋書きを変えるだけのことじゃ。仕事人に求められるのは、水のごとき柔軟さよ。元締の脚本は、あくまでも頭の中の話だ。その場にいるわけではないからな」
「仰せのとおりにございます」

神妙な顔で頷いた源内に、留以は問いかける。
「仕事人というのは、数多くいるものなのですか」
「それはもう数えきれません。一度だけでやめる者もいれば、どうしてもやめられずに続ける者もおります」
ちらりと文士郎に目を走らせたが、説教がましい話はしなかった。
「『犬』を始末する仕事人自身が、『犬』に成り果ててはなりません。わずかでも『人』の心を残すのが大事なのです。心を喪えば、やがて、魔道に堕ちるは必至。命を終われる側にならぬよう、くれぐれもご注意いただきたく思います」
「元締のお言葉、心に刻みつけます」
「それよ」
文士郎が笑った。
「留以殿の美点でもあるが、弱点でもある。真っ直ぐすぎるのじゃ。どこかにゆるみを持たせぬと行き詰まる。ま、おれには言われたくなかろうがな」
降りるぞ、と、呼びかけて、船を停めさせた。
「あたしも降ります」
お真佐が声をあげる。

「しばし道行きと洒落こむか」
差し出した文士郎の手を軽く叩いた。
「ご遠慮申しあげます。岡田様は女癖が悪すぎますもの。留以様、気をつけなければ駄目ですよ。気がついたら布団の上、なんていうことがありますから」
「言うてくれるわ」
苦笑いして、先に降りた。その後にお真佐が続く。船がどのあたりに来ているのか、まるでわからない。
「鍛冶橋を通り過ぎたところです。北紺屋町が見えました」
障子を閉めたおのぶが表情を読んだ。
「では、わたしも比丘尼橋を過ぎたあたりで降ります」
「おやおや、留以様もですか。てまえはひとり寂しく、取り残されるわけですね」
「なにを仰いますやら、元締には深川にいるじゃありませんか。この後、おいでになるのでございましょう。御新造様の恪気は、あたりまえのように思いますが」
おのぶが言い、船頭に声をかけた。船着き場に着く間に留以は、弥太郎たちの賃金分を懐紙に包み直した。
二度目の『仕事』が無事、終わって、安堵の吐息をついている。

四

「うまく言えませんけれど」

留以は、船着き場から離れて行く船を見て、言った。

「わたしは、もっと暗くて、陰惨な雰囲気なのだと思うておりました。一度目のときもそうでしたが、拍子ぬけするというかなんというか」

「元締のお人柄でしょうね。意味のある御役目なのだと思わせてくれる。おかしな言い方かもしれませんが、老舗の誇りがあるんですよ」

「どれぐらい一緒に仕事をしているのですか」

「そろそろ十年といったところでしょうか。その前もやっていたのですが、ろくに調べもしないで『犬』を始末するような元締でした。不謹慎かもしれませんが、源内様は脚本を書いたり、仕掛けに金子をかけたりして、道楽のような感じもいたします。でも、あの妙なこだわりが、わたしらを『人』に留めてくれるのかもしれません」

わたしらを『人』に留めてくれる。その言いまわしに、今も留以と一緒に仕事を

しているのだという気持ちが表れていた。些細なことかもしれないが、孤独感を覚えがちな仕事であるため、嬉しくなる。

「遅うなってしまいましたが」

野村の家に奉公する給金を素早く手渡した。

「留以様。以前にも申しましたように、幾ばくかの蓄えがございます。あの家に置いていただけるだけでいいのです。お金は……」

「いいえ」

返そうとしたそれを押し返した。

「気遣いは無用です。二人が助けてくれなければ、とても義母上たちの相手は務められません。蓄えの足しにしてください」

「わかりました。ですが、ひとつ、お願いがございます」

「なんですか」

「わたしどもは、下男と下女。名を呼び捨てにしていただきたいと思います。それから言葉づかいも丁寧すぎます。近藤様のお屋敷にいたときは、殿様が主でしたが、今は留以様が女主。そして、わたしと夫は使用人。はっきりと、けじめをつけてほしいのです」

「わかりました。すぐには無理かもしれませんが、おいおい『らしく』なるようにいたします」

答えを聞いて、くすっとおのぶが微笑んだ。

「なんですか」

「いえ、元締や岡田様が仰ったとおりだと思いまして」

真っ直ぐで生真面目という意味だろう。思わず反論しそうになったが、おのぶは遮るように言った。

「それで、いかがいたしましょうか。日本橋檜物町は目と鼻の先。来たついでに、旦那様の浮気相手を探ってみますか」

反応を窺うように目を覗きこんでいる。腹立たしくなって歩き出したが、比丘尼橋に足を向けたことに気づき、慌てて踵を返しかけた。

「ここまで来たついでじゃありませんか。ぶらぶら歩きしがてら、さりげなく探ってみましょう」

おのぶに腕を取られて、行く気はないのに歩き出していた。これはおのぶがやらせていること、わたしが行きたいわけではない。心の中で懸命に言い訳している。

日本橋檜物町は、常磐津の家元があるためか、小粋な風情の漂う町だった。料理

屋も洗練された見世が多く、そぞろ歩けば、三味線の音がどこからともなく聞こえてくる。刺青を入れた鯔背な鳶職人などが、好んで住む町といえた。

「やめましょう、おのぶ。うまうまと、義姉上様にのせられるのは、愚かのきわみです。わたしは旦那様を信じておりますから」

と口では言いつつ、手でおのぶの背中を押している。足は引き返す素振りもないし、忙しく黒格子の家などを見定めていた。芸妓屋といっても看板を出しているわけではない。三味線の音や、粋な造りの家を見る度、足を止めていた。

「名は千也でございましたね」

「よく憶えていること」

他人事のように言ったが、おのぶはしっかり反論する。

「それだけ留以様のお顔が、真剣だったのでございますよ」

しばしお待ちください。そう言って、足早に走り去る。三味線の音がひびく路地裏に、留以はひとり、取り残された。

透かし門の向こうに、小さな前庭があって、客を招くように飛び石が玄関へと続いている。そんな洒落た造りの家が立ち並んでいた。

(旦那様が妾など作るわけがありません。わたし以外の女子を抱くなど、ありえま

せん）

知らぬ間に、きつく唇を噛んでいる。怒りや嫉妬といった感情が燃えあがると、決まってこの癖が出るのだが、手拭いを差し出してくれる夫はいない。聞こえてくるのは、風雅な三味線の音だけだった。

「常磐津かしら」

音曲には疎いものの、三味線が生み出す世界に、ある種のやすらぎを覚えている。張り詰めて、きりきりした八丁堀とは、異なる空気が流れていた。平左衛門もこんなふうにして、この路地裏を歩くのだろうか。見廻りのときに足を延ばして、立ち寄ったりするのだろうか。

（ありえませんね）

自嘲が滲んだ。慌てふためいて、手拭いを差し出した平左衛門。留以をあれほど案じてくれる男が、浮気などするわけがない。夫を信じられぬ己の心こそが、なによりも厭わしく思えた。

（やはり、帰りましょう）

そう思ったとき、おのぶが戻って来た。

「わかりましたよ。ちょうどこの路地の先です。芸妓屋を営んでいる千也という若

女将がいるとか」

指さしたその手を押さえつける。

「本当に千也という女子がいるのですか」

自分でもわかるほどに狼狽えていた。千恵ならばともかくも、千也という名はそうそう聞く名ではない。しかも檜物町、さらに芸妓屋の若女将である。心ノ臓が飛び出しそうになっていた。

「はい。年は二十七、名は千也だそうです」

おのぶは答えて、窺うような目を投げた。

「帰りましょうか。お顔の色が悪いですよ。一昨日から、ほとんど食べていないじゃありませんか。船の中でも料理には、まったく箸をおつけになりませんでした。そのあたりでお蕎麦でも……」

「見て来てください」

ごくりと唾を呑み、続ける。

「間違いないのか」

曖昧な言葉が出た。どうやって、平左衛門との繋がりを確かめるのか。若女将の千也がいたとしても、そこに通う姿を見ない限りは信じられない、いや、信じたく

ない。顔面蒼白だったのだろう。
「つまらないことを申しました」
おのぶは、申し訳なさそうにうなだれた。
「旦那様に限ってと思っておりましたので。いちおう顔だけ確かめて参りますが、なにかの間違いでございますよ」
路地の奥に歩を進めたが、すぐに引き返して来る。
「だれか出てきます」
「え」
「早くあちらへ」
おのぶに押されるようにして、転びそうになりながら通りまで戻った。顔だけ突き出して路地を覗きこむ。ほどなく、透かし門に設けられた戸が、からからと軽やかな音をたてて開いた。
中から出て来たのは――。
「それでは、御免つかまつる」
平左衛門だった。
「ありがとうございました」

千也と思しき女の声が聞こえた。人に姿を見られるのを懸念しているのか、路地には出て来ない。甘く艶っぽい声だった。かわしたのは、この短い挨拶のみ。平左衛門は、留以たちがいる道とは逆の方に歩いて行った。

「……」

まさか。

留以の心には、嵐が吹き荒れている。がくがくと膝が震えてしまい、立っているのがやっとだった。

「御役目の御用でございますよ」

おのぶの慰めが、虚しくひびいている。

「親しみのない型どおりの挨拶だったじゃありませんか。御用の筋だったに違いありません。旦那様に限って、浮気などなさるはずが……」

耐えきれずに、留以は走り出した。平左衛門が浮気、相手は若女将の千也、囲っているのは日本橋檜物町、粋で鯔背な町。愛妾の近くにいるのが我慢できない。少しでも遠くに離れようと、無我夢中で走った。

「留以様」

おのぶは遅れずに付いて来た。

「お待ちください。今一度、確かめて参ります」
「いいえ。もうよいのです。旦那様のお気持ちは、ようわかりました。わたしはまだ子ができませぬゆえ、他にお子を作るおつもりなのです。子供がお好きな方ですから、一刻も早うほしいのですよ」
留以は曲がり角で、ふと足を止める。道の途中に人が集まっていた。

五

安売りでもしているのだろうか。ときは十二月、瀬戸物屋の安売りならば、願ってもないことだった。四、五日前に平左衛門の茶碗を割ってしまったからである。
と、そこまで考えて苦笑した。
「瀬戸物の安売りでもしているのでしょうか。旦那様のお茶碗を割ってしまいましたから、新しいお茶碗を買いたいのですが」
吐息まじりの言葉が出る。
「こんなときにも、旦那様のことを考えるなんて」
「信じていらっしゃるからですよ。なにをしているんでしょうね。見て参ります」

「いえ、一緒に行きましょう」
話しているうちに、野次馬から声があがる。
「医者だ、医者を呼べ」
「おっかさんが苦しんでいるんだとよ」
場所は元数寄屋町三丁目、本庄民子のかかりつけの医師——玄斎が住む京橋の弓町から、さして遠くない。
「おのぶ、玄斎先生を」
言い置いて、留以は野次馬の方に向かった。裏店の木戸前に集まっている人々を、押しのけるようにして、路地に足を踏み入れる。驚きに目を瞠った。
一軒の家の前で、少女が茫然と天を仰ぎ見ていた。
着物の前が血だらけなのは、病人が血を吐いたからかもしれない。年は十二、三だろうか。少女は虚ろな目を虚空に向けている。
「病人は中ですか」
歩み寄ろうとした留以は、裏店の女房に手を摑まれた。
「おやめよ、母親は労咳なのさ。長患いしててね。急に具合が悪くなったみたいなんだよ。昨夜、医者に使いをやったんだけど、まだ来なくて……」

最後まで聞かずに駆け寄っていた。

「しっかりなさい。今、お医者様が来ますからね」

屈みこんで目を合わせたが、少女は虚ろな目を彷徨わせるばかり。留以を見ようとはしない。骨ばった小さな手を握りしめ、何度も呼びかけたが、その声もまた届いてはいないようだった。

「失礼いたします」

留以は戸口で告げ、家の中に入る。

六畳間に敷かれた布団の上から這い出すようにして、女が倒れていた。右手は畳を掻きむしるような形のままで、左手は喉を押さえている。もがき、苦しみ、のたうちまわった様子が見て取れた。布団や畳にも大量の血が付いている。ひと目、見ただけで事切れているのがわかった。

それでも念のため、座敷にあがって脈を取る。

身体はまだ温かかった。

「どう、ですか」

今し方、留以の腕を摑んだ女房が、おそるおそる訊いた。伝染されてはたまらないとでも思っているのか、戸の隙間から覗きこんでいる。

留以は無言で首を振った。

よくある九尺二間の溝板長屋である。のべられた布団以外、ほとんど物がない家だった。飯櫃や鍋、釜といったものさえ、見当たらない。煮炊きはどうしていたのだろうか。長屋の女房たちに、助けてもらっていたのだろうか。

「夜、来なかったものですから、朝方にも医者を呼びに行かせたんですよ。そろそろ来る頃じゃないかと、あ、来たみたいですね」

女房は身体をずらして、訪れた医者を家に入れる。

凛とした風情の女医者が、土間に入って来た。三十前後だろうか。きりりとした濃い眉と鋭い眼差しの持ち主は、留以を一瞥して、座敷にあがって来る。

「お手伝いいたします。なんでも仰ってください」

留以は申し出たが、

「わたしの病人ですので」

女医者は素っ気なく応じた。早く出て行けと言わんばかりの表情をしている。

「娘さんは」

肩越しについ後ろを見やっていた。

「佐知のことでございましたら、ご案じなされませぬよう。見習いですが、すでに

奉公し始めております。江戸には身寄りがないと聞きましたので、わたしが後見人になりました。今までは通いでしたが、住みこみに替えてもらえばよいだけのことです。食べて行く心配はございません」

きびきびとした言動は好感が持てた。馬鹿にされたり、相手にされないときも多いだろうに、女医者として道を極めようとしているように思えた。留以は敬意を示すように深々と頭をさげる。

「申し遅れましたが、わたくしは、野村留以と申します。夫は、南町奉行所の定町廻りの同心でございます。娘さんが困った折には、遠慮なく訪ねて来ていただきたく思います」

「奉行所の同心」

女医者は呟き、肩越しにゆっくりと留以を見やる。

「さようでございますか。それは、心強いことでございますな」

言葉ほど思っていないことが、冷ややかな眼差しに表れていた。多くの町人が似たような反応を見せる。煙たがられる存在であるのは百も承知だった。

「じきに番所から役人が参りましょう。定めに従った取り調べがあると思います。差し出口かもしれませぬが、残って口添えいたしましょうか」

あくまでも低姿勢に出る。

「ご丁寧なお申し出、ありがたく思いますが、さきほども申しましたように、助けは要りません。お引き取りください」

取り付く島もない。仕方なく、留以は家の外に出た。

入れ替わるようにして、少女が家の中に戻る。障子を閉めたとたん、悲痛な叫び声がひびいた。悲鳴のようなそれは、やがて、泣き声に変わる。

「医者は呼んだとのことでしたので、玄斎先生はお呼びいたしませんでした」

おのぶが言った。

「そうですか」

「本所相生町の医者だそうです。名は朝香笙子。貧乏人からは、お金は取らないとか。腕はいいと評判のようです」

流石はもと仕事人。命じられなくても、おおかたの話を得ていた。本所相生町の女医者と聞いて、思い出されるのは民子との会話である。

民子が言っていた医者ではないのか。異様なほど張り詰めていたのは、患者が死んだ衝撃のために違いない。取り乱してはなるまいと、冷ややかな対応になったのかもしれなかった。

「女ゆえ、でしょうか」

ごく自然に我が身を重ね合わせていた。剣術の稽古をするとき、留以は言動が大きく変化する。女を封印し、男にならねば道場の稽古には耐えられないからだが……姉妹からは怖い、人が変わると、よく言われた。

女医者にも女なればこその、悩みがあるのかもしれない。留以の気持ちを読み取るのが巧いおのぶも、流石に意味がわからなかったのか、

「どういう意味でございますか」

訝しげに問いかけた。

「なんでもありません。あの娘、父親はいないのでしょうか」

「母ひとり、子ひとりのようです」

「それでは」

これからずっと、ひとりで生きていかねばならないのか。女医者は江戸には身寄りがないと言っていた。長い人生をたったひとりで……二親は亡くしたものの、姉妹がいるだけ、自分はましなのかもしれない。

「参りましょう。あまり遅くなりますと、また大奥様が」

おのぶに促されて、木戸の方に足を向ける。

とそのとき、木戸のところに立つ若侍と目が合った。薄汚れた皺だらけの袴が、暮らしぶりを示している。食い詰め浪人か、江戸に出て来たばかりの下級藩士か。裏店の町人や近辺の商人が多い中、いやでも目立っていた。

（もしや）

娘の父親か。

話しかけようとした気配を察したのだろう、

「あ」

その前にいなくなっていた。

「いかがなさいましたか」

「いえ、ちと知り合いに似ている男が」

偽りの答えに、叫び声が重なる。

「喧嘩だ！」

ほとんど同時に、留以は木戸を走り出ていた。

六

狭い通りで刃を交えていたのは、目を合わせた若侍だった。
町家を背にして立ち、前と左右を三人の侍に取り囲まれている。三人は身なりからして、どこかの家中の下級藩士という感じがした。みなすでに刀を抜いて、殺気立っている。
「おやめください」
おのぶの制止は心に届かない。
「助太刀いたします」
留以は、するりと危険きわまりない対峙に割りこんだ。若侍の腰から脇差を取って、身構える。またたきする間の出来事であり、止める暇もあらばこその素早さだった。行き交う人々もまた一瞬のうちに離れている。逃げる者あり、残る者あり。残った者は、二対三の睨み合いを、遠巻きにして見つめていた。
「女の助けを借りるか」
「犬侍には、似合いの助っ人じゃ」

侮蔑をこめた挑発に、若侍はまんまとのせられる。

「よけいな手出しは無用に存ずる。女子の助けを借りたとあっては、末代までの恥となりますゆえ」

「殺められてしもうては、恥もなにもありますまい。まずはお命が第一と存じまする」

「流石は八丁堀の奥方様。いいこと言うねえ」

野次馬から愉しげな声があがる。騒ぎを聞きつけたに違いない。岡田文士郎が前列に陣取っていた。

「噂の『剣術小町』の、お手並み拝見といこうじゃないか。ささ、お代は見てのお帰りだよ。ひとり、四文にまけておこう」

揶揄するような言葉に、立ち去るかと思ったが、三人はまったく無視していた。ひとりが威嚇するような一撃を叩きつける。留以は動きかけた若侍を左手で止めた。不動の姿勢を保っている。仕事人同士は、外では他人のふりをするのが暗黙の了解となっている。だが、文士郎がいてくれるのは心強かった。

留以は、五行の構えのひとつ、脇構えに変化させる。

右足を一歩、引いて、体を斜めに開き、脇差の先端を後方下の斜めに向けた。刃

部を外に向け、脇差が三人から見えぬような形の構えだ。当然、相手は留以の脇差の動きが読みにくくなる。隙のない構えだと思ったのはあきらか。

「甘く見るなということか」

ひとりがじりっと前に出る。それが合図となって、他の二人も動いた。留以はひとり、若侍が二人を相手にする形になる。

放たれた右袈裟斬りを、留以は軽くかわした。相手の脇にまわりこみざま、脇差を閃かせる。いささか距離がありすぎたかもしれない。男の袴を浅く切るに終わった。が、この攻撃で火がついたのか、

「小賢しい真似を」

男の頬が朱に染まる。相手が女というだけでも、充分すぎるほどの侮辱だと思っているに違いない。怒りにまかせて、続けざまに斬撃を叩きつける。威力はあるが、速さはそれほどでもない。留以は難なくかわした。

「ええい、ちょこまかと」

ますます男はいきりたつ。留以が青眼に構えると、奇声をはりあげた。放たれた左の袈裟斬りを軽やかに撥ねのける。相手の刀が上に撥ねあがったその隙をのがさない。留以はすかさず踏みこむや、男の喉を浅く斬りつけた。

「う」

肝が冷えたのだろう。

男は身体を硬直させる。浅く斬った喉からは、鮮血があふれ出していた。それに気づいて、一歩、二歩と、よろめくようにさがる。手加減されなければ絶命していたのを、遅ればせながら悟っていた。

「ひ、退け」

他のひとりが、座りこみかけた仲間を支えた。もうひとりも反対側から支えて、三人は逃走に転じる。血を見たのが、よほど衝撃だったのかもしれない。あるいは真剣で戦うのは、初めてだったのか。源内であれば「近頃の侍は」と、嘆く言葉が出たのではないだろうか。

留以は脇差の血を懐紙で拭い、鞘に収めて、持ち主に返した。

「勝手に使わせていただきました。申し訳ありませぬ」

「いや、かたじけない」

若侍は言った。

「ゆえあって、姓名は名乗れませぬが」

御免、と、踵を返して走り出した。いつの間にか野次馬は散り、文士郎の姿も

見えなくなっている。
何事もなかったかのような景が戻っていた。
「お怪我はございませんか」
おのぶが問いかける。念のためという感じがした。
「大事ありませぬ」
「あの犬侍、奥州あたりから出て来たばかりなのかもしれませんね。独特の訛りがございましたよ」
「おやめなさい、犬侍などと。聞き苦しいですよ」
留以は、裏店の木戸から離れられなくなっている。母を喪った少女の明日が、気になっていた。朝香笙子という女医者にまかせておけば、大丈夫だと頭では思っている。しかし、佐知というあの娘のことが引っかかっていた。
「本庄様です」
おのぶに耳打ちされて目をあげる。本庄美之助が、ひとりの小者を従えて、こちらに来た。留以に気づいて、破顔する。
「これは、留以殿。喧嘩と聞きましたが、収めたのは留以殿でござったか」
「いえ、力添えしようと思いましたが、その前に双方とも逃げました」

嘘はつきたくないが、正直に答えれば、番屋に連れて行かれるのは間違いない。それに若侍の「ゆえあって」という言葉が心に残っていた。旗本か大名家かはわからないが、いずれにしても、侍の騒動に町奉行所は立ち入れない。互いに無駄な時を使う必要はないと考えていた。

「それよりも、本庄様。この裏店に母を喪った娘がおります。労咳だったとか。診ていたお医師も、さきほど来たところでございます。不審はないと思いますが、どうかお調べいただきたく存じます」

「承りました。平左殿は、別の調べに出ておりまして、此度はそれがしが命じられました次第。ちと遅うなりましたが」

言葉を切って、美之助は裏店の路地に目を向けた。

「労咳でござるか」

複雑な表情を見せた。母の民子が同じ病となれば、他人事には思えまい。だれに言うでもなく呟いた。

「沙苗が、本所相生町に腕のよい医者がいると言うておりました。いや、留以殿にご紹介いただいた玄斎先生が、駄目だというわけではござらぬ。なれど、薬代も馬鹿になりませぬゆえ」

「噂のお医師だと思います」
留以は目でくだんの家を指した。
「女医者が駆けつけられました」
「さようか。評判の医者でも、労咳を治すのは無理でござったか」
美之助の言葉には、少なからぬ落胆が含まれている。労咳は死病であり、早晩、民子も同じ道を辿る運命。一縷の望みを絶たれたような表情のまま、美之助は会釈して、佐知の家に足を向けた。
「早く帰りませんと」
おのぶは、やけに落ち着かない素振りを見せる。
「あとは本庄様におまかせして、ささ、参りましょう。どこかで甘いものでも買って、大奥様のご機嫌を取りませんとね」
先に立って歩き出したが、すぐに立ち止まった。木戸のところに見知った与力、八木沢兵庫が現れたからである。
「これは、八木沢様」
留以は、おのぶともども深く頭をさげた。与力がいちいち喧嘩や病人の騒ぎに出張ったりはしない。女剣士の噂を聞き、駆けつけたのかもしれなかった。

「やはり、な」
推測を裏打ちするような言葉を告げた。
「勇ましく助太刀したのは、留以殿であったか。もしやと思い、来た次第よ。いや、わしも剣術小町の活躍を見たかったわ」
兵庫はなめるように、留以の全身に視線を這わせる。舌なめずりしているのではないだろうか。この与力に会うと、いつも無理やり裸にされたような、不快さを味わわされるのだった。
急に気分が悪くなる。
「わたくしは、これで失礼いたします」
「いかがなされた。お顔の色がすぐれぬようだが」
伸ばした手をさりげなくかわした、つもりだったが、留以はよろめいた。兵庫に抱きかかえられる。
「留以殿」
その腕を払いのけようとしたのに、身体が動かない。
留以は、闇に吸いこまれていった。

第三章　いのちの膳

一

ああ、さわらないで！

留以は、いやな与力の腕を、懸命に払いのけようとしている。じっとりと湿ったなまあたたかい手が、蛇のようにからみついて離れない。

わたしにふれてよいのは、旦那様だけです。他の殿御はいや。間近に息づかいを感じるのもいやなのです。

叫び、腕を払いのけ、近づこうとする人影を押しのけた。黒い人影は殺めた者の顔になって、留以に襲いかかる。重たくて動けない。のしかかられて、なにかを口に押しこまれそうになる。

「やめてください」

どうにか声が出た。しかし、頭が朦朧としている。目が霞み、胃ノ腑がきりきりと痛んだ。死んでしまうのかもしれない。

「さあ、留以。わしが作った『いのちの膳』じゃ。口を開けてくれぬか。『いのちの膳』と名付けたのは、ほかのだれでもない。さよう。そなたであったな」

平左衛門の穏やかな呼びかけが聞こえた。それに心を向けた。

「食べることは、生きることよ。生きることを捨ててはならぬ。食べることを捨ててはならぬ。さあ、口を開けて、そうそう、ひと口でよい。食べてくれ」

「は、い」

口に入れられたものをそっと嚙む。まず深い味わいの出汁が、舌にゆっくりと沁みた。大根だろうか。あっさりとした味付けだが、嚙むとまろやかな風味が舌だけでなく、口の中全体に広がる。あれだけ食べ物を受け付けなかった胃ノ腑にも、なんの抵抗もなく吸いこまれていった。

「美味しい」

ぽつりと出た呟きに、おのぶが目をみひらいた。

「お食べになりましたよ、旦那様。鰤大根など、生臭いうえに固くて、飲みこめな

いかと思いましたが」
「よし、おのぶ。粥じゃ。粥を持て」
「はい」
おのぶが飛び出して行く気配の後、留以は、ようやく正気づいた。何度も目をしばたたかせているうちに、霞んでいた目の焦点が合ってくる。
留以は布団の上に起きあがって、綿入れを肩に掛けられていた。寝かされていたのは、夫婦の座敷であり、いつもは使うことを許されない火鉢にも、熾された炭が入れられている。
枕元に平左衛門が座っていた。
「わかるか。わしじゃ、留以」
絵に描けないほど平凡と言われる顔が笑っていた。春海のような、あたたかく、やわらかな笑顔だった。見ているだけで幸せな気持ちになる。どんな大罪も許されるのではないかという、甘い希望に縋りつきたくなる。
「旦那様」
「そなたは、元数寄屋町の裏店で倒れたのよ。与力の八木沢様と美之助殿が、家まで付き添うてくれたのじゃ。よけいな気遣いは無用ぞ。すでに御礼の品を両家に届

けておいたからの」

平左衛門は、おのぶが運んで来た粥を茶碗によそい、ふうふうと息を吹きかけて冷ました。その様子を見ているだけで、腹が大きな音をたてる。

「あ」

「お」

と、夫婦は顔を見合わせた。

同時に微笑む。

「胃ノ腑が動き出したな」

「はい」

「なれど、まずは粥じゃ。甘藷(かんしょ)を入れた芋粥よ。そういえば、そなたはこの間、この粥で正気を取り戻したのであったな」

この間とは、一度目の『仕事』をした後のことだ。留以は今と同じように、食事が摂(と)れなくなって倒れたのである。まさに生きる力を与えてくれた膳に、『いのちの膳』なる名を与えたのは、当然だったかもしれない。

「旦那様のお料理は、美味しゅうございますので」

心からの言葉が出た。

「これしか取り柄がない。喜んでくれるのは、そなたぐらいのものよ。母上や姉上には、男が台所に入るなど言語道断、と、睨みつけられる。ま、睨みつけられながら作った割には、ようできたやもしれぬな」

少し冷めた粥を、茶碗ごと留以に手渡した。傍らの盆には、小さな丼も載っている。見た目は鰤大根だが、ひと味、違っていたのを、あらためて思い出していた。

「今のあれは、鰤大根だったのですか」

粥を口に運びながら訊いた。

「うむ。天日干しの美味い塩が手に入ったゆえ、塩で炊いてみたのよ。醤油よりも、あっさりするのではないかと思うてな。柚子を添えたかったが、なかったので、ちと生臭いやもしれぬと思うたが」

「それで、お止めしたのでございます」

おのぶが継いだ。

「また吐いてしまいます、と」

「吐いたのですか」

驚いて、問いかける。胃が痛かったことしか憶えていない。平左衛門とおのぶは、呆れたように苦笑した。

「飲みこめるのは、白湯のみ。おのぶの料理は、すべて吐き出してしもうた」
「それで思い出したのでございます、旦那様が芋粥を作ったときのことを。もしかしたらと思い、お台所に立っていただきました」
「そうでしたか」
深く頭をさげてから、留以は閉められたままの障子を見やる。
「倒れてから何刻ほど過ぎたのでしょう」
外の明るさから見て、朝か昼間であるのはわかったが、一度目のときも丸一日、経っていて吃驚した覚えがある。内心、気が気ではなかった。
「倒れたのは、一昨日の八つ頃（午後二時）じゃが、今は朝の六つ半頃（午前七時）よ。一日半ほど経っておる」
「申し訳ありませぬ。すぐに……」
立ちあがろうとして座りこんだ。身体に力が入らない。平左衛門が、肩から落ちた綿入れを掛け直してくれた。
「無理をするでない。玄斎先生の診立てでは、疲れが出たのだろうということであった。ただでさえ気苦労の多い家であるのに、法事やらなにやらで忙しかったからの。今日一日、ゆるりと休むがよい」

「平左殿、髪結いが来ましたよ」
環紀の大声に、平左衛門は肩をすくめる。
「まさに地獄耳じゃ」
気苦労の多い家と、夫が理解してくれているのがありがたかった。ふたたび立ちあがろうとしたが、
「そのままでよい。たまには、姉上にも働いてもらわねばの」
平左衛門はにこやかに告げて、座敷を出て行った。障子を開けたとたんに、凍りつくような風が流れこんで来る。
まるで義母と義姉の冷たい気持ちが、忍びこんできたかのよう。
「寒い」
身震いすると、すかさず、おのぶが言った。
「視線が冷とうございますね」
以心伝心、わかりすぎるのが困りもの。十日間はたっぷり厭味を言われるだろう。
おのぶは、空になった茶碗に粥をよそった。
「いやな感じがしたんでございますよ。それで早く帰りましょうと申しあげたとき、八木沢様がおいでになりました。わたしの勘は、よくあたるんです。留以様を見る

あの目ときたら、おお、いやだ」

大仰に身震いする。

「八木沢様」

消えていた記憶が、徐々に甦ってくる。

八木沢兵庫と本庄美之助、犬侍と呼ばれた若侍を助太刀、裏店で死んだ労咳の女、茫然としていた娘の佐知、木戸に群がっていた野次馬。元数寄屋町に行く前は……そこまで思い出した瞬間、

「あっ」

留以は危うく茶碗を取り落としそうになる。

「い、いかがなされましたか」

おのぶが手を添えて支えた。

「わたし……笑うてしまいました」

「は？」

「旦那様にですよ。笑うて、普通に話してしまいました。檜物町の話をすっかり忘れていたものですから」

「留以様」

ふっと微笑った。

「そういうところが、旦那様は可愛らしいのでしょうねえ。鋭いのやら、鈍いのやら、わかりかねるところもありますけれど」

「褒めたのですか」

「お好きなようにお取りください。あれは御用の筋でございますよ。檜物町よりも、葛西の年寄りを調べましょう。もたもたしていると、これですから」

ちょんと首を切る仕草をした。平左衛門が気にしているのは、若い男を殴り殺した物乞いの年寄り、藤兵衛。なぜ、かような仕儀に及んだのか。夫ならずとも気になるところだった。

「それでは、まず殴り殺した場所に……」

「お目覚めか」

廊下から、希与の呼びかけがひびいた。慌てて留以は、綿入れに袖を通して、その場に畏まる。

「はい」

「入りますぞ」

そう告げて、義母は入って来る。留以は頭をさげたまま、わざと顔をあげないよ

うにした。面と向かって厭味を聞けるほど図々しくない。

「正気づいたのはなによりでした。それにしても、なさけないことですな。空腹で倒れたとは、信じられませぬ。末代までの恥ですよ。人聞きが悪いことですね。それとも、あれですか。我が家の嫁女は、わたしに恥を掻かせたくて、わざと倒れたのですか」

「いえ、かようなことは」

思わず顔をあげていた。お世辞にも色が白いとは言えない希与の顔は、まるで乾いた干物のようだった。干物は旨味がたっぷりと凝縮されているが、義母には旨味どころか、その欠片さえ残っていない。

あるのは鬱屈した思いだけである。

「なんぞ言いたいことでもあるのかえ」

希与は、じろりと睨めつけた。促されたからといって、吐露してはならない。留以は決して愚かな女ではないが、言葉は抑えられても、表情までは抑えられないのが玉に瑕。とたんに希与の眉があがった。

「言うてみよ」

きつい語調になる。

「その顔はなんじゃ、ええ、顔に出ているではないか。わたしにご不満がおありなのではありませんか。口やかましいうえ、朝から晩までこき使い、飯もろくに食べさせてくれぬと思うているのでは……」

「ごめんくださいまし」

不意に玄関先で呼びかけがひびいた。

「はい。ただいま参ります」

即座におのぶが腰を浮かせる。立ちあがる前、素早く留以の耳もとに告げた。

「援軍のご到着にございます」

やりとりが耳に入ったに違いない。希与は、苦虫を噛みつぶしたような顔で立ちあがる。無言で座敷を出て行った。

二

「おのぶが使いを寄越してくれたのです」

近藤織江は言った。

「そなたが、また倒れたと聞きましたので、取るものもとりあえず、参りました。

ほんに顔色が悪いこと。この間もそうでしたからね。別れるときも一抹の不安を覚えたのです。あたらねばよいけれど、と、思うていたのですが」

留以より四歳年上の二十四で三姉妹の長女である。並ばなくても血の繋がりがわかるほどに、二人はよく似ていた。織江はまだ若いが母のように、留以や朋江を常に気遣っている。おのぶも気を利かせて席を外してくれたため、座敷には二人しかいなかった。

平左衛門はいつも以上に遠慮して、知らぬ間に勤めに出ている。目付の跡取り娘が相手では、分が悪いと思ったのか、希与と環紀も出かけていた。

「申し訳ありません。なさけないことです」

うつむいた留以の背中を、織江はやさしく撫でた。

「謝ることはありませんよ。お姑(しゅうと)様も決して悪い方ではないのでしょうが、そなたに女主(おんなあるじ)の座を奪われるのではないかと、思うておられるのやもしれませぬ。年老いていく不安もあるに違いありません。内心、気が気ではないのかも……」

「姉上」

留以は小声で遮る。

「あれは、生来(せいらい)の気質です」

きっぱりと告げた。わずか一年、暮らしただけだが、希与の本質を見抜いていた。美辞麗句は無用、しらじらしいだけだ。わたしと姉上の間で体裁を取り繕うような話はやめましょう。

正直な言葉に、一瞬、織江は言葉を失ったが、

「留以はかような場にいても、留以なのですね」

珍しく声をあげて笑った。留以は苦笑いするしかない。

「仰せのとおりですけれど」

「いえ、馬鹿にして笑ったわけではありませんよ。留以らしさが失われてしまうのではないかと、密かに案じていたのです。内心、気が気ではなかったのは、わたくしの方。時々、思い詰めたような眸をすることが多くなっていましたゆえ」

「あれは」

答えようとしたその唇に、織江は指で軽くふれた。

「わかっています」

仕事人としての責務が、あまりにも重いから。子を産む女子の身でありながら、人を殺めなければならないという相反する状態。それがときに留以を追いつめる。生きることを投げ出してしまいそうになるほどに……。

「だから子を授からぬのでしょうか」
留以は、顔をそむけて言った。
「姉上には五歳のご嫡男（ちゃくなん）、朋江にも二歳の男児。二人とも母になっているのに、わたしはいまだに授かりませぬ」
「嫁してまだ一年ではありませんか」
「もう一年です」
むきになりすぎたかもしれない。
ふたたび織江は笑った。
「姉上は、お笑いになってばかり」
「いえ、そなたのふくれっ面が、子供の頃と同じなので、つい」
「義姉上（あねうえ）様も、似たようなことを言うておられました。わたしらしいふくれっ面を見せないので案じたなどと」
「それ、その顔ですよ」
両手で留以の頬を挟んだ。
「心を隠すのが苦手なのは、そなたの長所でもあり、短所でもあります。真っ直ぐすぎて、ついていけぬ者もいるでしょうが、わたくしと朋江はいつも隣におります

よ。なにが起ころうとも離れませぬ。いざとなれば」
言葉を切って、真剣な眼差しを向けた。
「ともに戦う心づもりでおります」
「姉上」
小さく頷いて、留以は続ける。
「なれど、手を血で染めるのは、わたしひとりで充分です。姉上と朋江には、いつも陽のあたる場所を歩いていてほしいのです。平左衛門様のように、翳りのない笑みを浮かべてほしいのです」
いささか話が重くなりすぎたかもしれない。
「おやおや、惚気ですか」
織江は軽くかわした。
「そなたが平左殿に嫁ぐと言うたときには、なにか裏があるのではないかと思いましたが、杞憂に終わったのは幸いでした。やさしくて、おおらかな殿御である様子。のんびりしすぎておられるため、仲間うちからは与太郎同心だの、盆暗同心だのと言われているようですが」
「与太郎？　盆暗？」

ぴくりと留以は眉をあげる。
「平左衛門様を愚弄するのは、だれでございますか。まさかとは思いますが、幼なじみの美之助殿ですか。それとも上役の与力、八木沢様ですか」
血相が変わっていたのかもしれない。
「落ち着きなされ、留以。せっかくようなった胃ノ腑が、また痛み出しますよ」
織江が軽く肩を叩いた。
「姉上がつまらない話をなさるから、あ、いたたた。本当に痛くなってきました」
「ごらんなさい。言うてるそばからではないですか。横になって、寝まなくては駄目ですよ。玄斎様のお薬をお服みなされ」
手を借りて、布団に横たわる。織江は枕元の煎じ薬を湯飲みに少し入れると、鉄瓶を取って湯を注いだ。
「でも、平左殿にぴったりの異名だと、わたしは思いますけれどねえ」
独り言のような呟きを、留以は聞きのがさない。
「わたしの夫の悪口は、家に戻ってからにしてください」
「はいはい、わかりました。蓼食う虫も好きずきとは、よう言うたものです」

「姉上」
「ささ、薬を」
「そうやって、ごまかすのですか」
軽く睨みつけた後、留以は起きあがって、薬を飲んだ。流石に言いすぎたと思ったのだろう。
「そういえば」
と、織江は話を変えた。
「この間は話しませんでしたが、ひと月ほど前からでしょうか。道端や堀の近くで、不審な亡骸が見つかっているとか」
人を殺めてきたばかりの留以に、話すのは躊躇われたのかもしれない。先日、妹の朋江をまじえて逢っていたが、この話は出なかった。
「辻斬りでしょうか」
留以は訊いた。
「詳しいことはわかりませぬ。ただ義父上は、顔が青黒くて、異様な仏だと言うておりました。さらに、まるで墓から這い出たかのごとく、土まみれだったとか。見つかったのはみな町人のようですから、目付の役割ではないのですが、気になった

のやもしれませぬ。義父上に命じられて、夫が内々に調べています」

「義父上らしいですね」

育ての義父、近藤時之助は、能吏として幕閣内でも名を知られている男。すでに妻を亡くしているが、織江の夫の左兵太は、時之助の配下として動いている。嫡男も授かって、近藤家はまさに安泰。絵に描いたような上級旗本の家といえた。

「顔が青黒いというのは、一服、盛られたということでしょうか」

気になった事柄を問いかける。

「さあ、そこまではわかりませぬ」

「何人ぐらい、見つかっているのですか」

「三人と聞きました。平左殿は、なにも言わぬのですか。さきほども言うたように、目付の役目ではありませぬ。そなたの口から、わたしが聞く話だと思いますよ」

だから与太郎同心、だから盆暗なのだと、言いたげだった。

「旦那様は……ある年寄りのことが気になっているのです。別に御役目を怠けているわけでは」

「またそのように唇を尖らせて。そなたはほんに正直だこと」

織江の言葉を遮るように、玄関先で大声がひびいた。

「姉様。姉上は、おいでになられておりますか」
「朋江ですね。ろくに挨拶もしないで、しようのない。希与様がおいでになられたら、すぐにお説教ですよ」
「姉上も、朋江になさりたそうですね、お説教を」
「あら」
はにかんだように微笑んだ。幼い頃の面影が覗く一瞬である。両親がいて、何不自由なく暮らせたあの頃。だがしかし、なんの不安もなく眠れたあの日々はもう還らない。またしんみりしかけたが、三女の足音がそれを打ち破った。

三

「申し訳ありませぬ。出がけに夫が、あれも持って行け、これもお見舞いに、と、言い出したものですから」
朋江が顔を出したとたん、座敷は夏の眩い光に包まれる。年は留以より一歳下の十九、美貌は二人の姉よりも多少、劣るが、向日葵のような明るさに、だれもが救われるのは間違いない。心延えの美しい妹だった。

「きっと夫は、今でも姉様のことを憎からず思うているのです。本当は剣術小町を妻にしたかったんですもの。倒れたと聞いたときは、わたしよりも狼狽えていましたよ」

「おやおや、朋江も惚気ですか」

織江が言った。

「惚気ではありません、本当のことです。本当にうちの旦那様は、姉様のことが忘れられないのです」

「留以のことを忘れられない男が、赤児を作れるわけがありませぬ。ゆえに、惚気だと言うたのです。口では夫の悪口を言いながらも、顔にちゃぁんと書いてありますよ。幸せで幸せでたまりません、とね」

「え、そうですか？」

朋江は、両手で自分の頬を押さえた。おどけているのは言うまでもない。思わず三人は笑った。

姉妹であるとともに、親友のようでもあった。気のおけない女友達、互いを敬いつつ進むなにげない会話、軽口を叩き、冗談を交わし合って、大きな笑い声をあげる。なにがあっても裏切らない。そう、三人は秘密を共有しているのだから……。

（ああ、また）

留以は、ふと二人を遠く感じた。

笑いながらも、小さな虚しさを覚えている。繋がっているはずなのに、なにかが違っていた。一度目のときにも覚えた孤独感に襲われていた。

笑い声が聞こえない、笑顔が見えない。なぜ、かような気持ちを覚えるのか。姉妹はともに地獄に堕ちると、折にふれて話しているではないか。信じられないのだろうか。ゆえに、虚しさが湧いてくるのか。

そこでまたよけい気持ちが沈みこみかける。

「いかがしたのです、留以」

織江の声で、我に返った。

「あ、いえ、ちと考えごとをしておりました。旦那様から調べてほしいことがあると、言われているのです。数日前に藤兵衛という年寄りが、若い男を殺めたとか」

とっさにごまかしていた。もとより自分でも、憂悶（ゆうもん）の理由がわからない。なにげなく出た言葉だったが、

「その騒ぎのことは耳にいたしました」

朋江が応えた。

「富岡八幡宮門前の、遊女屋から出て来た男に、木刀を振りあげて襲いかかった由。相手は正体をなくすほどに酔うていたそうです。殺したあとは、木刀を放り投げて、おとなしくお縄をちょうだいしたとも聞きました。覚悟のうえだったのではないでしょうか」

「やはり、怨みですか。娘さんかお孫さんを、ひどい目に遭わされたのやもしれませぬ。旦那様がいくら理由を訊ねても、なにも答えないようで」

「平左衛門様の病が出たのですね」

朋江はあっさりと告げる。悪気がない分、どう応じたらよいのか、苦慮する部分があった。当人も知らぬうちに、相手を傷つけることが少なくない。

「朋江」

代弁するように、織江が言葉を発した。

「病などという言い方をしてはなりませぬ。平左殿は、だれに対しても同じように接する稀有なお心の持ち主なのですよ。罪を犯した者であろうとも、いえ、だからこそやもしれませぬ。最期の願いを叶えてやりたいと、思われるのではないでしょうか」

先程の不審な亡骸云々のやりとりが、いささか引っかかっていたのかもしれない。

庇うような内容になっていた。

「わかっております、ええ、姉上の仰るとおりです。平左衛門様のお気持ちがわからぬわけではありませんけれど、だれが騒ぎを解決しているのでしょう。調べるのはいつも姉様ではありませんか。お忙しい合間を縫って、弥太郎やおのぶと調べているのに、耳目を集めるのは平左衛門様おひとり。わたしはそれが……なんとなく悔しくて」

末っ子ゆえか、朋江は留以よりもさらに素直な一面を持っている。ときにそれは過激な言動になりかねないのだが、年の離れた夫に甘やかされて、のびやかな暮らしを送っているのは確かだろう。口うるさい姑や小姑がいないのは、羨ましい限りだった。

「夫を守り立てるのは、妻の役目と心得ております。わたしはなんの不満もありません。平左衛門様の喜びが、わたしの喜びですから」

心からの答えだったが、朋江は訝しげに眉を寄せた。

「本心ですか」

「あたりまえではありませんか。そなたや姉上に偽りを告げて、なんとします」

「そう、ですよね。いえ、はじめはなにか思うところがあるのではないかと、あの、

町奉行所の同心の家に嫁いだのは、その方が都合よく事が運ぶとお考えになったのでは、などと思いまして」

いつになく口ごもりがちになったのは、例の密かな約定のことがあるからに違いない。

起請文をかわしたわけではないが、三人の胸には、両親の仇を討ちたいという思いがある。

「はじめはそうでした」

留以は正直に胸のうちを明かした。

「え？」

小首を傾げた妹に、早口で告げる。

「町奉行所の同心の妻になれば、さまざまな話を得やすくなります。見廻りの様子、仲間の同心や奉行所の動き、起きた騒動への対応などなど、やりやすくなるのは確かです。そういったことがあったため、心が傾いたのは事実ですが」

自嘲が滲んだ。

「邪（よこしま）な思いは、すぐに吹き飛びました。平左衛門様のお心にふれたとたん、己が恥ずかしゅうなりました」

少年のような想いを、真っ直ぐにぶつけてきた男。ともすれば仇討ちにとらわれがちだった留以の心を開かせたあの言葉。

「平左衛門様はなんと？」

朋江が小声で訊いた。

「姉様を射止めた言葉を、教えていただけませぬか。この一年、それが不思議でならぬのです。同心の妻が隠れ蓑ではないとしたら、なにゆえ、平左衛門様と所帯をお持ちになられたのか。そろそろ教えてくださいまし」

「駄目です。わたしと旦那様だけの秘密ですからね。姉上や朋江にも教えられません」

「嬉しそうな顔をして」

織江が割って入る。

「なれど、今の話を聞いて、わたくしは安堵いたしました。仇討ちを果たせるかどうかはわかりませんからね。『もがりの猛蔵』は、もしかしたら、すでに死んでいるやもしれませぬ。ごく普通の暮らしをするのが、なによりもたいせつですよ」

「気取られぬためにも、ですね」

朋江が悪戯っぽく二人を見た。どこまで自覚しているのだろう。過日、浅草の寮

において、返り血を浴びた留以を見たとき、朋江は顔面蒼白になっていた。

血が付いても目立たぬよう、仕事に臨むときは小豆色の着物姿と決めている。見た目には水で濡れた程度にしか思えなくても、霙まじりの雨が降ったあの日は、湿気のせいでむぅっとした血の臭気が立ちのぼっていたに違いない。

〝早く湯に〟

すぐに手を貸した織江の横で、朋江は為す術もなく立ちつくしていたのを憶えている。甘えん坊の寂しがり屋に、留以は曖昧な笑みを返した。

それをどう思ったのか、

「そういえば、向かいの本庄様ですけれど」

朋江は話を変えた。

「玄斎様のお話では、民子様は落ち着いておられるとか。人参の量を減らしても大丈夫だろうとのことでした。あとは滋養をつけるのが一番です。労咳も早めに治療をすれば、かなり良くなるのですね」

「何事もお金ですよ」

織江が冷静な言葉を放った。

「生き残れるのは、お大尽だけ。お上は貧困に喘ぐ民を救うてはくれませぬ。いざ

となれば、侍でさえ切り捨てるのですから」

両親が殺されたときの苦い思いが甦ったのかもしれない。横顔に無念な思いが浮かびあがっていた。

あのとき、公儀はろくな吟味もせずに、押し込みの犯行と断じた。盗っ人に押し入られた目付のことが、公（おおやけ）になるのを懸念した部分もあるだろう。侍として恥以外のなにものでもないと言われれば、姉妹は耐え忍ぶしかなかった。

「お上など頼りになりませぬ」

留以も同意する。

「裏の世界を知る者にしか、『もがりの猛蔵』は始末できませぬ。必ずや見つけ出して、始末いたしまする」

あらためて誓ったが……得体の知れない違和感を覚えていた。なにかが違ってきている。姉妹と微妙に嚙み合わなくなっているのを、留以は感じていた。

四

翌日。

留以は、おのぶと一緒に深川の富岡八幡宮に向かっている。時刻は午近くだが、雲に覆われているせいか、陽射しがなくて風が冷たかった。

「玄斎先生の家に行くという言い訳が使えるのは、今日だけでございますね」

おのぶの言葉に頷き返した。

「言うまでもないと思いますが、玄斎先生は往診でご不在。お戻りになるのを待っていたので遅うなったということに」

「わかっております」

若い女主に忠実な下女は、両腕にしっかりと小太刀を抱えていた。目立ちすぎるので留以は反対したのだが、過日のようなことがあってはと、押し切られた形になっている。いつも脇差を借りられるとは限らないというのが、おのぶの意見だった。

「まずは若い男が殺められた場所をあたってみましょう。下手人の藤兵衛が住んでいたという、葛西の家にも行きたいですが、今日中に片づけるのはとても無理です。少し日にちを空けるしかないでしょうね。そうそう抜け出せませんから」

寒風に押されるように足を速めた。とはいえ、昨日は一日、動かなかったうえ、今朝は丼飯を二杯もお代わりしたとあって、身体がやけに重かった。姑に呆れられたのは言うまでもない。

〝一気に米櫃の米が減りましたぞ〟

という、いつもの厭味に送られて、家を出て来たのだった。

「義父上の屋敷にいたときのように、お代わりぐらいは自由にしたいものです」

つい愚痴まじりの本音を呟いている。

「急にたくさん食べると、身体が重うて、重うて」

永代橋の急な勾配が、いささか怨めしく思えた。ふだん動かない者であれば、さして感じない変化なのかもしれない。しかし、朝稽古、家の雑用、夫や姑と小姑の世話、近所付き合いと、こまねずみのように働く留以にとって、動けなかった日の翌日は、思うようにならない身体との戦いがあった。

「素振りの音も、ちと鈍うございました。切れが悪かったように思います」

おのぶに言われるまでもない。

「一日、怠ければ、戻すのに三日はかかります。武道だけではありますまい。職人の技も同じだと思いますよ」

太鼓橋のような造りの永代橋は、真ん中に立つと、大川だけでなく対岸の景色もよく見えた。強風に煽られて、川面には白い波頭が立っている。視線を河岸に転じた留以は、河岸沿いを歩く女に目を留めた。

「あれは」

朝香笙子が、かなりの早足で歩いていた。住んでいるのは、本所相生町と聞いた憶えがある。どこに行くのだろう。往診だろうか。

「そなたはゆるゆるとおいでなされ」

留以は橋を駆け降りたが、

「尾行けるのですか」

ぴたりと、おのぶが付いて来る。

「人聞きの悪いことを言うものではありません。様子を見るだけです」

「普通はそれを尾行けると言うのでは……」

「少し黙っていなさい」

鋭く遮って、橋から降り立った。真っ直ぐ女医者が消えた方角、深川佐賀町の方に歩を進める。

深川佐賀町は、永代橋の東畔に位置する町で、仙台堀の大川への流出口から、永代橋の南——御船蔵のあるあたりまでを指している。東側に御船手組の組屋敷や、何軒かの武家屋敷が建ち、自身番屋が下ノ橋際に設けられていた。

「ここに入ったのではありませんか」

おのぶが、裏店の木戸を目で示した。九尺二間の溝板長屋だが、ちょうど正午であるためか、狭い路地と井戸近辺に女房や子供の姿は見えない。

「訊いて参りましょう」

「お待ちなさい」

留以の制止と、一軒の家の戸が開くのが同時だった。姐さん被りに襷掛けをした笙子が出て来る。おそらく洗濯物だろう。両腕にそれらを抱えて井戸の方に歩いて行った。水を汲みあげた後は、黙々と洗濯を始める。

（だれの洗濯物を洗っているのかしら）

ほどなく疑問の答えが出た。他の家から出て来た女房が、井戸で洗濯に勤しむ笙子に、大声で話しかけたのである。

「物好きだねえ、女先生も。亭主でもない子持ち男の下帯まで洗う医者なんか、他にはいないよ。往診の代金だって、もらっていないんだろ。高い人参をずいぶん渡しているようじゃないか。大丈夫なのかい」

最後の言葉には、少なからぬ労りがこめられていた。笙子が医者を続けられなくなれば、この女房も困るのかもしれない。隣に屈みこんで、不安げな眼差しを向けている。

「病人の辛さを思えば、泣き言を言っている暇はありません。幼子がおいでになるのに、働くのもままならないのですから、二重の意味で苦しいはずです。特別に人参を分けていただけないかと、目安箱に訴えているのですが、なかなか思うようにはなりませんね」

この場合の人参とは、普通の人参ではない、薬効の高い朝鮮人参のことだ。労咳は言うに及ばず、さまざまな病に効果があるとされていた。滋養強壮の代名詞であるのは、昔も今も変わらない。

「は。お上なんか、あてにならないさ」

女房は吐き捨てるように言った。

「近頃は小石川養生所も看板倒れだろ。貧乏人を助けてくれるのは、朝香先生だけだよ。いえ、あたしもさ。洗濯ぐらいはしてやりたいと思っているんだけどね。うちの亭主がさ、おまえに伝染ったらどうすんだ、うちには子供がいるんだぞ、なんて怒鳴るもんですから、思うようにはできなくて」

次第に声が小さくなっていった。うつむいた態度にも、女房の正直な気持ちが表れている。ときに女は、父親や夫をうまく利用して言いのがれるものだ。それをすると父親に怒られる、それをやったら夫に、と、いかにも立場が弱いように装いつ

つ、角を立てずにご近所と円満に付き合うのが、裏店で生きるコツといえた。

（洗濯をして労咳が伝染ったなんていう話、聞いたことがありませんよ）

似たようなことを感じたのかもしれない。

「ええ、気楽なものですよ、わたしは独り身ですからね。怒鳴りつける夫も、病が伝染る子供もおりませんから」

笙子は、皮肉たっぷりに言い返した。留以は吹き出しそうになったが、こらえる。女房はばつが悪そうに顔をそむけていたが、洗い物もそこそこに、家へ戻って行った。横目で見送っていた笙子が、ふとこちらに目を向ける。

目が合った瞬間、

「申し訳ございません」

留以は謝っていた。

「富岡八幡宮にお詣りしようと思うたのです。永代橋の上に立ったとき、朝香先生のお姿が見えたものですから、つい後を尾行けてしまいました」

虚実ないまぜの言葉を告げて、井戸の方に足を向ける。笙子の隣に座る間に、着物の袖に入れておいた腰紐で、素早く襷掛けをしていた。躊躇うことなく洗濯を手伝い始める。

「旦那様に怒られませんか」
笙子が探るように眸を覗きこむ。
「手伝わなければ、怒られると思います」
答えて、下帯や幼子の肌着を濯いだ。おのぶも井戸の近くに来る。抱えていた小太刀を脇に置くと、水を汲みあげ出した。
「ご病人のご妻女は？」
留以は訊いた。
「同じ病で昨年、亡くなりました。刀ですか」
笙子がちらりと小太刀を見る。
「小太刀です。女だてらにと笑われそうですが、小野派一刀流の道場に通うております。幼い頃より、剣術が好きでございまして」
これまた虚実ないまぜの言葉が出た。確かに三歳のときから剣術を習っていたが、強い興味を持ったのは、両親を失った後だった。が、初対面の相手に告げられる内容ではない。笙子はかすかに口もとをほころばせる。
「『女だてらに』は、褒め言葉と思うております。言われすぎて、耳にタコができてしまいましたが」

「わたくしもです」
留以の答えに、硬かった女医者の表情がようやくゆるんだ。
「女子は苦労が多いですね」
「はい」
「負けないようにいたしましょう」
「はい！」
気合いが入りすぎたかもしれない。
「留以様。下帯を破きませんように」
おのぶの言葉で、心からの笑いが出た。少しの間、同じ想いを共有できたかもしれない。留以はあらためて笙子を見やる。
「それにしても、驚きました。お医者様が病人の下帯まで洗うとは」
「今日はたまたまです。いつもは弟子を連れて来るのですが、使いにやってしまいましたので」
笑みを浮かべていた顔に、ふと暗い翳がよぎる。
「私がもっと早く行けば、佐知の母親は助かったかもしれません。それが悔やまれてならないのです。他の家をまわっていて、遅くなってしまったのですが」

問わず語りという感じで告げた。あのとき、異様なほど張り詰めていたのは、自責の念があったから。忙しすぎる女医者は、病人に追われながら、次の家へと急ぐ。前夜に知らせが来ていたにもかかわらず、元数寄屋町の家に行けたのは翌日の午過ぎだった。

「朝香先生のせいではありません」

慰めが虚しくひびいた。運命だと言えば、笙子は楽になるだろうか。いや、むしろ苦悩が深まるのではないだろうか。力づけるよい言葉はないものか。忙しく考える留以の肩に、おのぶが軽くふれた。

「留以様」

木戸の方を目顔で指している。肩越しに後ろを見た留以は、過日の若侍が立っているのを見た。犬侍と呼ばれた男である。

「相手にしないでください」

笙子が言った。

「つきまとわれて迷惑しているのです。何度、追い払っても、すぐに現れて」

男女の仲になったことがあるのだろうか。笙子の方は冷めたのに、若侍は燃えあがるばかり。意外な感じがしたが、流石に口にするのは憚られた。代わりにもう

ひとつ浮かんだ疑問を投げかける。
「もしや、あのときの三人は……朝香先生が頼んだのですか」
助けたのは間違いだったのかもしれない。遅ればせながら浮かんだ後悔に、笙子は怪訝な表情を返した。
「あのときの三人とは？」
「彼の者は、襲われたのです。それで、わたくしが助太刀いたしました。よけいなことをしてしもうたかと思いまして」
「さようでございましたか。でも、その三人に心あたりはありません。厄介事に巻きこまれているのかもしれませんね。関わり合いにならない方が、宜しいのではないかと存じます」
「仰るとおりでございますよ、留以様」
念を押すように、おのぶが継いだ。ひと言、多いと、喉元まで出かかった叱責を呑みこむ。洗濯が終わる間に、犬侍は姿を消していた。

五

「人というのは、やはり、話をしてみないとわからぬものですね」

留以はしみじみ呟いた。笙子と別れて、深川黒江町を左に見ながら、富岡八幡宮に向かっている。今の気持ちを示すように、雲の切れ目から弱い陽射しが伸びていた。

「初めて逢うたときとは、少し異なる感じを覚えました。ぴりぴりと張り詰めておられて……もっともあのときは、診ていた病人が亡くなったばかりでしたからね。朝香先生の様子が尋常ではなかったのは、あたりまえだったのだと思います」

「元数寄屋町でしたか。裏店で朝香先生の話を聞きましたが、悪く言う者はひとりもおりませんでした。野菜が代金ということも珍しくないとか。武家の出なのかもしれませんね。立ち居振る舞いを見ると、どうもそんな気がいたします」

おのぶが同意した。

「話したくない昔があるのは、朝香先生だけではありますまい。相生町の家にも是非と、お誘いをいただきました。お言葉に甘えて、近々訪ねてみようと思います。

ああ、そうでした。朋江にも話してみましょうか。人参を安く分けてもらえるかもしれませんから」

「〈山崎屋〉は質のよい人参を扱うので有名な、老舗の薬種問屋でございますよ。安くしていただいても、はたして、手が届くかどうか。朝香先生のところに来るのは、貧乏人ばかりですからねえ」

水を差されてしまい、ぐっと言葉に詰まる。

「そなたは」

「言うとおりでございましょう？」

おのぶはすかさず言った。

「わたしも朝香先生は立派な医者だと思いますよ、ええ、仰るとおりです。でも、できることと、できないことがありますからね。期待しすぎない方が宜しいのではないでしょうか。留以様の、がっかりなさる顔を見たくありませんので」

「かようなことを言うていたら、なにもできなくなってしまうではありませんか」

おのぶの言葉が正しいと、心のどこかでわかっているのに苛立ちがつのる。仕事人をやっているからだろうか。物事に動じないおのぶは、ときに冷たく思えるほどの意見を述べることがあった。我知らず小走りになっている。

「八幡様には、お詣りはなさらないのですか」
おのぶの声が追いかけてきた。富岡八幡宮の門前は、いつものように賑わっている。見るからに裕福そうな親子や夫婦が目立っていた。煤払いの時季だが、そんなことを気にする必要はないのだろう。
「高い人参を買える人々ばかりですね」
つい裏店の寂しい景色を思い出していた。懸命に母を支えていた少女、労咳に罹った子持ちの男。金持ちが生き残って、貧乏人はろくな手当ても受けられずに死ぬ。
「さようでございますね」
おのぶは戸惑っていた。留以の苛立ちが理解できないに違いない。無理もない話といえた。留以自身、理解できないのだから。
「『死中、活あり。苦中、楽あり』というのは、日蓮上人のお言葉ですけれど」
思いついた言葉を口にしてみたが、
「はあ」
おのぶはますます困惑したようだった。主従で八幡様の門前に立っていても仕方がない。留以は藤兵衛の騒動を調べることに気持ちを向けた。
「男が殺められたという場所に、案内してください」

「畏まりました」

踵を返したおのぶが立ち止まる。富岡八幡宮の鳥居から、仕事人のひとり、『針妙のお真佐』が出て来たのだった。お真佐も「あら」という顔をしたが、むろん挨拶はしない。仕事人は外で会っても親しく接してはならぬという、定めを守っていた。留以はおのぶに導かれるまま、細い路地に足を向ける。

「ただのお詣りでしょうか」

小声でおのぶに訊いた。

「わかりません。元締に命じられて、なにか調べているのかもしれませんね。ああ、そういえば」

と、足を止めて振り返る。留以も立ち止まっていた。

「八幡様の北側にある仙台堀で、女の仏さんが見つかったそうです。うちの亭主が聞きこんできた話ですが、このひと月ほどの間に、立て続けに三人と言っていましたよ。たまたまかもしれませんけどね」

「その話であれば、わたしは姉上から伺いました。女子も混じっていたとは思いませんでしたが」

「御目付様が動いているんですか」

「声が大きいですよ」
留以は素早く窘める。
「すみません」
「義父上は、気になることがあると、武家や町家の別なく調べるお方なのです。亡骸の顔がどす黒く変色していた由。それが引っかかったのでしょう」
ふたたび留以は歩き出した。遊女屋が立ち並ぶ一郭は、物憂げな空気が漂っている。煙草や酒、そして、白粉の匂いがないまぜになって、見世から流れていた。昼見世に誘うつもりなのか、綿入れを羽織った遊女が、寒そうに首を縮こませている。
「毒でしょうか」
おのぶは、噂話にとらわれていた。
「わたしもそう思いましたが、話はあとにいたしましょう。今は旦那様に言われたことを調べなければなりません。どこの見世ですか」
遊女や見世の男衆が、じろじろと無遠慮な目を向けている。武家女が足を運ぶ場所ではない。奉行所の同心の妻とは思わないだろうが、早めに立ち去るべきであるのは、だれの目にもあきらか。
「申し訳ありませんでした。こちらです」

慌て気味におのぶは、角の一軒を指し示した。明かりが灯されていない提灯（ちょうちん）に〈高砂（たかさご）〉という屋号が見えた。留以は暖簾を分けて、中に入る。

「ご免くださいまし」

玄関先にいた男衆が、すぐに応じた。

「なにか御用で？」

年は三十前後だろうか。いちおうその場に屈みこんだものの、好奇心あふれる眼差しは、路地の遊女や男衆と同じだった。

「過日、この見世の前で、藤兵衛という年寄りが、男を殺めたと聞きました。そのことでちと訊ねたいと思いまして」

「定町廻り同心、野村平左衛門様の奥方様でございます」

おのぶが言い添えた。特に隠すことではないと思っている。今まで調べるときも、定町廻り同心の妻であることを告げるのが常だった。

「お調べの筋ですか」

男の顔が、かすかに強張る。つまらないことに関わりたくないという気持ちがあるのだろう。商売にさわりが出るのではないかと警戒していた。

「いえ、吟味は終わっております、藤兵衛はすでに罪を認めておりますので。今一

度、確かめたいことがあるのです。騒ぎが起きたとき、藤兵衛はどんな様子だったでしょうか」

「どんなって……若旦那が見世から出たとたん、これですよ」

男は殴りかかる真似をした。

「止める暇もあらばこそってやつでさ。いきなり殴りかかりました。『こりゃ、まずい』と思って、爺を押さえつけたときにはもう虫の息でさ。なにがなんだかわかりませんね」

「若旦那というのは、豊吉さんですね」

「へい」

「こちらの常連客ですか」

「そんなとこですが」

男は唇をゆがめた。

「つけがたまってましてね。出入り禁止だったんでさ。そのあたりで飲んで来たんでしょう。外に追い出したとたん、あの騒ぎになりまして」

「豊吉さんの家は、本所で小間物屋を営んでいるとか。家の商いは」

「手伝ってりゃ、つけがたまることもなかったと思いますぜ。二男だったか、三男

だったか忘れましたがね。悪い仲間とつるんで、強請りやたかりもやっていたようでさ」

「捕まったことがあるのですか」

「いや、しょっぴかれるようなヘマはしませんでしたよ。親が内済にしたんでしょう。その尻ぬぐいに疲れちまったのか、勘当されたって話です」

「悪い仲間」

呟いた留以の横で、おのぶが問いかけた。

「そいつらの溜まり場はわかりませんかね」

「さあて、どこだったか」

男は頭を掻きながら立ちあがった。見世の主と思しき男や、他の男衆が、内所から廊下に顔を突き出している。男は主らしき男と話した後、戻って来た。

「本所に溜まり場があったようなんですがね。仲間は姿を消したそうでして」

「仲間も襲われたと聞きました」

主と思しき男がこちらに来た。

「爺さんは、まず仲間たちを襲ってから、ここに来たようです。豊吉が死んだとわかって、逃げたんでしょう」

「仲間たちは、豊吉さんの仇を討とうとは思わなかったんでしょうか」

思わず訊いていた。主らしき男と男衆は、顔を見合わせる。

「今時、仇討ちしようなんていう気概のあるやつはいませんよ。特にやくざな連中同士ではね。関わり合いになるのをおそれて、我先にと逃げ出すのがオチでしょう。豊吉の父親がぽつりと言ってましたよ」

いつかこうなると思っていた。

「とね。まあ、倅ですから、死んで嬉しいわきゃないでしょうが、これでもう悪さはできないと、しみじみ呟いていましたよ。あ、申し遅れましたが、主の志之助と申します」

頭をさげた主に、留以も会釈した。五人の男衆は興味津々、玄関先に集まっている。痛いほどの視線を受けながら、留以はあらたな問いかけを発した。

「豊吉さんと藤兵衛は、顔見知りではなかったんですか」

「いたぶっていましたぜ」

若い男衆が前に出て来る。

「爺さんが稼いだわずかな銭を、奪い取ったりしてました。相手が悪いと思ったのか、爺さんはへらへら笑っていましたっけ。堪忍袋の緒が切れたってとこじゃねえ

んですか。物乞いをしている年寄りから、なけなしの銭を奪うやつなんざ、人間じゃありませんよ」

藤兵衛に同情しているようだったが、主は冷ややかに言い捨てた。

「町の塵芥みたいなもんです。襲った爺さんも、襲われたやつらもね。いなくなっても哀しむ者はいませんよ」

その言葉をしおに、留以は見世をあとにした。いたぶられた挙げ句の意趣返しなのだろうか。堪忍袋の緒が切れたのか。町の塵芥、いなくなっても哀しむ者はいない。主の言葉が繰り返しひびいていた。

「なけなしの銭を奪い取られても笑っていたのに……なんとなく、ぴんときませんね」

「葛西に行ってみるのが、宜しいのではありませんか」

おのぶの申し出に、生返事をする。

「そうですね」

主従は早足になっていた。どんなに急いだところで姑の小言攻撃に遭うのは、間違いないのだが、それでも早く、早くと気が急いている。永代橋の手前に来たとき、おのぶが袖を引っ張った。

「人だかりができております。なんでございましょうか」
「おやめなさい。急がないと遅くなりますよ」
と言いつつ、留以も足を向けていた。おのぶの背中を押すようにして、人垣ができている方に歩を進める。
「なにかあったんですか」
おのぶが、一番後ろに立つ男に訊ねた。
「ふざけやがって、役人のやろうが朝香先生を番屋に連れて行こうとしているんだとよ。病人に毒を飲ませたと言ってるが、そんなことあるはずがねえ。役人に先生を渡しちゃならねえと集まったのさ」
「まさか」
身裡を冷たいものが走りぬけた。とんでもない厄介事に、笙子は巻きこまれたに違いない。あの犬侍の仕業か。だれかに陥れられたのではないのか。
「どいてください。朝香先生の知り合いです、夫は定町廻りの同心です。わたしも付き添いますから、朝香先生のそばに行かせてください」
叫び声は届かない。集まった人々の怒号に掻き消される。それでも留以は笙子の名を呼び続けていた。

第四章　犬目与力（いぬめよりき）

一

朝香笙子は、元数寄屋町の病人に、毒入りの薬を与えて、命を奪った。

これがお縄を掛けられた理由である。だれかに嵌（は）められたのか。怪しいのはあの犬侍ではないのか。平左衛門にその旨を告げ、留以は懸命にくだんの若侍を探したが、行方は杳（よう）としてつかめない。

番屋から町奉行所に移された笙子は、なにも語らぬまま、数日が過ぎていた。

「次は仏間じゃ。環紀、仏壇の扉は閉めましたな」

希与に言われて、小姑は慌て気味に仏壇へと走る。

「はい、閉めました」

「さて、あとは思いきり煤払いをしてもらいましょう。留以殿はとかく動きが乱暴でならぬ。用心のために仏壇の扉を閉めましたゆえ、これで安心できるというもの。心おきなく好きなように、おやりなされ」

「では」

留以は、天井の煤を払いにかかる。着物の裾をからげて、姐さん被りに襷掛け、さらに手拭いで口を覆っていた。

「かようなことをしている場合ではないのに」

不満を呟きながら、えいっと天井の煤を払い落としていった。朝香笙子の付き添い役になれぬかと、再三再四、頼んでいるのだが、こういうとき、残念ながら夫は頼りにならなかった。

〝だれかを庇うておるのやもしれぬ〟

ぼそっと笙子の様子を語ったそれが、近況を知る唯一の手がかり。笙子に助けられていた数多くの民が徒党を組み、奉行所に押しかける騒動になっていた。女医者はいまだ罪を認めていないため、奉行所に留め置かれているらしい。

「だから、わたしが調べると言うておりますものを」

鬱憤晴らしの煤払いは、それなりに効果を発揮していた。仏間の天井をすぐに終

えて、次は自分たちの座敷に移動する。弥太郎が庭から代わりましょうと、仕草で示したが首を振って、応えた。下男にやらせれば、希与の機嫌が悪くなるのは間違いない。

「早く終わらせて、早く奉行所に参りましょう」

と自分に言い聞かせる。若夫婦の座敷に移ったとき、ふと文机の上に目が行った。夫の日記が載っていた。平左衛門は常日頃、たいせつそうに携えて持ち歩いている。夜、記していることが多いのだが、留以は気になって、気になって仕方がない。

それが、今、目の前にある。

（檜物町の若女将のことが、書いてあるのではないかしら）

まだ見ぬ千也の、白い貌がうすぼんやりと浮かんでいた。きっと美しい女なのだろう。剣術に没頭する留以のような、がさつで、大雑把な気質ではあるまい。濃やかに気を配って、男をたてる慎み深い女。と、そこまで考えたとたん、猛然と腹がたってきた。

男をたてるのは苦手だが、腹をたてるのは得意である。

（許せない）

きつく煤払いの竹の柄を握りしめ、文机の日記を睨みつけた。

煤払いを行うと、埃だらけになってしまうかもしれない。そうしないためには、日記をいったん他の部屋に移した方がいい。移すためには、この手に取らなければならない。それらを浮かべることによって、ようやく後ろめたさをねじふせた。

「少しの間ですよ」

やさしく告げて、少しの間、丁を繰る。まず最初の丁、細く縦に線引きされて、日付毎に短いひと言が記されていた。次の丁、次の丁といくら丁を繰っても変わらない。記されているのは、たったひと言のみ。

〝日々是平安也〟

と書かれていた。

「……」

留以はしばし絶句する。半年間ほどの日記だが、日付の下にその日の天気、そして、同じ文言しか記されていなかった。

(もしや)

疑問がよぎる。

これは、見られてもいい日記なのではあるまいか。ゆえにわざと文机の上に置い

たのかもしれない。真実を吐露した日記、檜物町の若女将、千也のことなどを記したものは、しっかり持ち歩いているのではないだろうか。

「かようなものでごまかそうなどと」

別室に移す予定だった日記を、投げるように文机に置いた。かっと心が燃えあがる。やり場のない怒りと嫉妬で、腸（はらわた）が千切れそうだ。

「留以殿」

希与の呼びかけに、

「なんでしょうか」

無愛想な答えを返した。口もとは手拭いで覆っているため、表情は見えないはずなのだが、姑と小姑は細かいことによく気がつく。

「おや、先程までよりもずっとご機嫌ななめですね。平左衛門の浮気相手からの文でも見つけましたか」

皮肉とともに、これでもかという毒を投げた。一瞬、ぴくりと頬を引き攣（つ）らせたが、環紀が知っていることを、希与が知らぬわけがない。日本橋檜物町の若女将について、日夜、愉しげに噂し合っているであろうことが読み取れた。

「御用の向きは、なんでございましょうか」

丁重に応じる。心を抑えて姑への敬意を払った、つもりである。

「蕎麦ですよ。煤払いの折には、向こう三軒両隣に、手打ち蕎麦をお届けするのが慣わしです。留以殿は、力の強さだけが取り柄。蕎麦を捏ねるのも上手いではありませんか。早う蕎麦を打ちなされ」

辛辣な口調に、かちんときた。

「義母上様。わたくし、常より思うていることがあるのですが」

それでも必死に五常を守ろうとする。仁義礼智信を守るのはすなわち、人としての道を守ること。しかし、希与はちらりと意地悪い目を向けた。

「聞きたくありませんが、聞いてあげましょう。なんですか」

この程度の厭味にめげていては暮らせない。

「蕎麦を届ける慣わしのことです。煤払いをする日は、十二月十三日。この日にどこでも行いますので、どの家でも蕎麦を打ちます。それを向こう三軒両隣に持って行きますと、あら、こちらからも、あら、あちらからもと、家の台所は蕎麦だらけ。余ってしまうではありませんか。しばらくの間、蕎麦を食べ続けなければならないのは、楽しみではのうて、苦行です。いっそ、かような慣わしはやめるのが宜しいのではありませんか。自分の家で打った蕎麦を、自分たちで食べる。それがなによ

りではありませんか」
　一気にまくしたてた。
「そなたは」
　希与の目が、いっそう冷ややかになったのは言うまでもない。
「蕎麦を打つのが、いやならいやと、正直に言えばよいものを、あれこれ理屈をこねるのは、聞き苦しいことこのうえありません。蕎麦を捏ねずに理屈をこねるとはの。宜しいか、留以殿。他家は知らぬが、我が野村家においては、煤払いの折、蕎麦を配る慣わしをやめるつもりはありませぬ」
「わかりました」
　殊勝に頭をさげ、煤払いの竹を希与に渡した。
「では、すぐに蕎麦を打ちます」
「あ、これ、煤払いを終えてからでも……」
　呼びかけは右から左、聞こえないふりをして、台所に足を向ける。廊下で聞き耳をたてていたおのぶが、慌てて台所に戻った。すでに蕎麦打ちの材料が、土間の膳台に用意されている。
「そなたも地獄耳のようですね」

留以の言葉に、おのぶは無言で頷いた。とにかく女医者のことが案じられてならない。さっさと終わらせて、奉行所に駆けつけるのが得策。蕎麦粉を袋から出して、膳台の上に広げた。

「まだ朝香先生は、口を貝のように閉じておられるとか」

おのぶが話しながら、丼に入れた水を差し出した。早朝、弥太郎が前夜の話を調べてきてくれる。蕎麦粉に水を加えて、留以は捏ね始めた。

「だれを庇うておられるのでしょう」

「わかりませんが……そもそも本当に毒入りの煎じ薬を与えたのでしょうか」

おのぶの問いかけに、きっと眦をあげる。

「与えるわけがありませんよ。もし、そうだったのだとすれば、薬を間違えたのです。その庇うておられる者が」

ぴんとひびくものがあった。

「薬種問屋ではないでしょうか」

自問のような呟きに、「なるほど」と、おのぶが手を打った。

「朝香先生がどこの薬種問屋から人参を仕入れていたのか調べてみます。嵩を増やすため、安い人参になにか混ぜものでもしたのかもしれませんね。それが病人には、

毒のように働いたのかもしれません」
「薬は量が過ぎれば、毒にもなります。混ぜものではのうて、看病する者が煎じる量を間違えたのかもしれません」
留以の頭には、茫然と空を仰いでいた少女――佐知が浮かんでいる。早く治ってほしい、よくなってほしいと思うあまり、人参の量を多くしたのではないか。もっとも人参を多く飲んだ者が、死んだという話は聞いたことがないが……。
「急ぎ薬種問屋を調べてみます。朝香先生に診てもらっている者に訊けば、すぐにわかると思いますよ。いまだに奉行所の仮牢に留め置かれているのは、疑いがはっきりしないからかもしれませんね」
おのぶの疑問はもっともなことだった。罪人は大番屋か小伝馬町の牢屋敷に預けられるのが常であり、いつまでも奉行所に身柄を預けておくことはない。奉行所は罪人を呼び出して、取り調べを行う場所なのである。朝香笙子の扱いはかなり異例なことといえた。
「わたしもおかしなことをすると思うておりましたが」
「ごめんくださいまし」
裏木戸の方で女の声がひびいた。

「女狐です」
おのぶは正直すぎるのが欠点かもしれない。
「失礼ですよ」
口では窘めたが、内心、同意していた。招びたくはないものの、向かいの家となればそうもできなかった。
「これは、沙苗様」
留以は木戸を開け、中に入るように示したが、
「いえ、煤払いのご挨拶だけでございます。本日はお煤払いで、お目出度うございます。夫が打った蕎麦にござります」
沙苗は布巾を被せた笊を差し出した。
「ありがとうございます。早いですね。煤払いはもう終わったのですか」
受け取って、そつなく答える。本庄美之助は平左衛門とは違い、普通に余禄のある定町廻り同心だ。下男夫婦もいるうえ、臨時に煤払い役も頼んだのだろう。
「はい。朝のうちに終わりました」
沙苗は余裕たっぷりに答えた後、
「留以様には、御礼を申しあげなければと思いまして」

急に声をひそめた。
「なんのことでしょうか」
「本所相生町の女医者のことです。夫の話では、お縄になったとか。あの女医者はやめておいた方がよいと、留以様にご助言いただきました折は、つい言い返してしまいました。申し訳ありませんでした」
深々と辞儀されてしまい、留以は慌てた。
「いえ、とんでもない。民子様のためには、玄斎先生の方がよいだろうと思うただけなのです。慥かな腕をお持ちですので」
答えながら、複雑な思いをいだいている。沙苗に話したときは、笙子のことを知らなかった。しかし、今は非常に親しい気持ちをいだいている。病人のことを考えて、洗濯までする女医者の心根にうたれていた。
（疑いを晴らさなければなりませぬ）
まずは煤払いと蕎麦打ち、それを終わらせなければならない。
「いつまで油を売っているのですか」
「怠けるのだけは上手くなりましたねえ、母上」
母娘の厭味が、背後でひびいている。

留以は大きな吐息をついた。

二

次々に命じられる用を片づけて、留以が常盤橋（ときわばし）内の北町奉行所に着いたのは、八つ半（午後三時）頃だった。

今月は北町が当番であるため、朝香笙子はここの女仮牢に繋がれている。平左衛門から思うように話が入ってこないのは、南町の当番月ではないからであって、無能だからではないと、留以は思っていた。

「早く出せ。貧乏人を助けてくれる先生なんだ」

「朝香先生が病人を殺すわけがねえだろ」

「そうともさ」

「あたしたちには神様のようなお方なんだよ」

奉行所の門前は、昨日同様、笙子を慕う者たちが集まっていた。時々、同心が出て来るのだが、留以がそっと声をかけても、ろくに話を聞こうとしなかった。殺気立った様子に、内心、脅えているのかもしれない。

「やはり、お目にかかるのは無理でしょうか」
留以は門番に素早く紙包みを握らせる。
「そう言われましても」
「勝手な真似はできません」
二人の門番は、探るような視線を交わし合っていた。昨日も同じやりとりを交わしている。幾ばくかの銭と引き換えに、門番の職を失う気持ちにはなれないのだろう。二人とも苦りきった表情をしていた。
「どけ。邪魔だ」
「道を空けねえか」
不意に後ろで大声がひびいた。同心や小者が十手で人々を追いやっている。北町ではなく、夫と同役の南町の定町廻り同心だった。平左衛門や本庄美之助の顔は見えない。暴徒になりかねない群衆を追い払って姿を見せたのは――。
与力の八木沢兵庫である。
「八木沢様」
兵庫を見た瞬間、留以の頭で幾つかの事柄が繋がった。北と南の奉行所は、諸商の問屋を分けて、受け持っている。たとえば書物、酒、廻船、材木などは北町、呉

服や木綿、薬種問屋などは南町というように、各々、係を分けていた。

兵庫が来たのはすなわち薬種問屋がらみの話ではないのか。その薬種問屋とは、朝香笙子が人参を頼んでいた見世ではないのか。見世がわかったため、薬種問屋の係である南町の与力、八木沢兵庫が呼ばれたのではないだろうか。

（そのあたりの事情があったために、朝香先生を奉行所の仮牢に留め置いたのかもしれませんね）

常とは異なる流れを、自分なりに解釈する。

「犬目与力ですよ」

おのぶの囁きを、留以は手で制した。

犬目とは、涙の出ない目を意味する語であり、泣くことを知らない非情の人のたとえとされている。犬目与力は兵庫を毛嫌いする町人がつけた異名であった。挨拶しようかどうしようかと悩んでいるうちに、向こうが留以を見つけた。

「留以殿ではござらぬか」

兵庫は留以を呼ぶとき、御新造、あるいは御内儀という呼び方は絶対にしない。馴れなれしく肩を抱き、群衆から連れ出した。湿ったなまあたたかい手で、さわられるのはいやだったが、今は我慢する。

「八木沢様には、あの折、お手数をおかけいたしました。まことに申しわけなく思うております」

留以はまず先日の礼を述べたが、

「お気になさらずともよい」

兵庫は小声で言った。

「いかがなされた。なにゆえ、ここにおられるのか」

門の手前で訊いた。

「捕らえられた朝香先生とは知り合いなのです」

答えて、問い返した。

「朝香先生が人参を頼んでいた薬種問屋がわかったのですか」

「む」

兵庫は、唇を引き結ぶ。南町の与力が出張って来た理由を、即座に察したその眼力に、少なからず驚きを覚えたのだろう。

「野村は果報者じゃ。されど、留以殿の値(あたい)をどれほどわかっておるのやら。与太郎には過ぎた女房殿よ」

辛辣だった。かちんときたが、これもこらえる。

「八木沢様のお力で、引き合わせてはいただけませぬか。わたくしがいれば、朝香先生の重い口が開くやもしれませぬ。女子は女子同士、相通ずるものがあると思うのです」

あくまでも丁重に訴えた。正直なところ、この男に借りを作るのは本意ではないが、四の五の言ってはいられなかった。

「確約はできぬが、言うてみよう。おいでになるがよい」

兵庫は言い、門から中に入る。

「留以様」

付いて来ようとしたおのぶに告げた。

「そなたはここで待っていなさい」

急いで兵庫を追いかける。

正門から突き当たりの玄関式台までは、約六尺（百八十二センチ）幅に青板の敷石が続いていた。噂では伊豆石という話だが、真偽のほどはわからない。敷石の両側には那智黒の玉砂利が敷き詰められている。小者たちが磨きぬく玉砂利は、朝は光って見えるらしいが、午後になると、流石に埃にまみれて、輝きは失われていた。敷石の左右には、天水桶が山形に積んであり、大小の玄蕃桶が列んでいる。これ

また小者たちが未明から桶のタガを磨きあげるとあって、こちらは午後でも光っていた。従って来た同心と小者は、玄関脇に畏まっている。

「南町与力、八木沢兵庫、まかりこしました」

兵庫の挨拶を、玄関上の座敷に控えていた中番と呼ばれる係が受けた。

「御役目、ご苦労にござる」

羽織袴姿の家臣は、町奉行直属である。同心並みの扱いを受けているものの、武士とも若党ともつかない立場で、主人が他の役目に就く場合は、若党侍として小姓や徒や雑役を勤める低い身分の者だった。とはいえ、今は決して軽い職務ではない。

「そちらの御新造は？」

首を伸ばすようにして、留以を見おろした。

「南町奉行所の定町廻り同心、野村平左衛門のご妻女にござる。吟味を受けている朝香笙子とは知己であるとか」

兵庫が肩越しに見やったため、留以は屈みこんで頭をさげた。

「野村留以にござります」

「本日の吟味の前に、逢えぬだろうかと頼まれました次第。門前に集まっている女

医者の信奉者も、なかなか引きさがりますまい。御新造に取り持ち役と申しまするか、宥め役をまかせるのはいかがでござろうかと思いまして」

兵庫は勝手な申し出をする。群衆の宥め役を押しつけられたのは、いささか迷惑な話だったが、それが条件であるならば敢えて受けるしかない。これで貸し借りなしであるから、却って好都合かもしれなかった。

「しばしお待ちを」

中番が消えると、すかさず兵庫が言った。

「案ずることはない。留以殿のご推察どおり、それがしがここに来たのは、女医者が人参を頼んでいた薬種問屋がわかったからでござる。南町に密告がござってな」

と、まだ騒ぎのおさまらない門前を振り返る。

「おおかた彼の者たちのひとりでござろう。薬種問屋の代わりはあるが、無料同然で診てくれる女医者の代わりはおらぬとばかりに、文を投げ入れたのでござろうよ」

「どちらの薬種問屋なのですか」

留以は胸が苦しくなるのを感じた。よもや妹の嫁ぎ先の〈山崎屋〉ではないだろうが、もしやという思いもある。

「神田駿河町の〈宮本屋〉でござる。主や奉公人を南町に呼び出して確かめたところ、観念したのであろう。奉公人が間違いないと白状した次第。すでに主の身柄を大番屋に移し申した。主の調べは、これからでござる」

犬目与力の冷ややかな目が、凍りつくような光を発した。確かめたというのは、拷問したのだろうか。

留以は「それにしても」と思った。笙子は北町奉行所に留め置き、〈宮本屋〉は早くも大番屋に移されている。この差はなんなのか。

「いまだ朝香先生が、奉行所に留め置かれておりますのは、背後に〈宮本屋〉という薬種問屋がいるのを察しておられたからですか」

当然の問いかけが出た。

「ふうむ」

兵庫はつるりと顎を撫でる。そういった仕草も、留以はきらいだった。色男だと誇示しているようにしか見えない。

「いかがでしょうか」

促すと、

「まあ、外れてはおらぬ」

渋々といった感じで認めた。

「これは、わたくしの考えでございますが、〈宮本屋〉は朝香先生に、毒入りの煎じ薬を渡していたのですか」

踏みこんだ問いかけを投げる。薬種問屋が医者に毒入りの煎じ薬を渡すなどという話は聞いたことがない。誤って毒が混じったのか、間違って売ってしまったのか。

「さて、そのあたりのことはまだわからぬ。なれど、質の悪い下品（げぼん）の人参を流したのは間違いないとのことであった。これも奉公人の話だがの」

「それでは、朝香先生は」

期待に満ちた留以の言葉に、兵庫はさも恩着せがましく答えた。

「うむ。それがしが来たからには、これ以上、北町に無用な詮議はさせぬ。お咎（とが）めはなしとなろう」

「ありがとうございます」

鼻につく態度だったが、顔には出さず、深々と頭をさげる。

「ついては、留以殿にひとつ、頼みたい。朝香笙子の口からも〈宮本屋〉の名を引き出してほしいのじゃ。貝のように口をつぐんだままでは、なにもかも承知のうえと思われても致し方なきこと。お解き放ちはむずかしゅうなる」

なるほど、と、ここで得心していた。すんなり留以の訴えを聞き入れたのは、幾つかの思惑がらみだったわけである。

食えぬ男、利なくして動かぬ男。

あらためて兵庫の犬目与力ぶりを実感していた。こんな調子で平左衛門は、いいように使われているに違いない。

「できるかどうかはわかりませぬが」

留以は答える。

引き受けざるをえないはめになっていた。

三

留以は、ひとりで鞘と呼ばれる薄暗い土間の廊下に足を踏み入れた。

仮牢にはこの鞘を通って入るのだが、入る手前には厳重な錠前付の潜りがあって、その外に同心の詰所がもうけられている。兵庫と同心は、そこに待機していた。

仮牢の場合、町人ならば穢多頭の弾左衛門の配下が扱い、武士であれば牢屋同心が扱うことになっていた。入牢証文を作る間、入れられる牢屋であるため、笙子

はまさに異例の扱い。いささか長すぎる逗留といえた。

「朝香先生」

格子越しに呼びかけた。六畳の畳敷きの女仮牢にいたのは、笙子ひとりだけ。もっとも夜目の利く留以なればこそ、ひとりだとわかったのかもしれない。窓のない牢屋は昼にもかかわらず、真っ暗だった。

動いた気配はあったが応えはない。逢ったのはわずか二度、さらに暗くて笙子からは顔が見えないのかもしれなかった。

「野村留以でございます」

名乗ると、安堵したような声が聞こえた。

「留以様」

すぐ格子戸の方に来る。深川佐賀町の裏店で別れたときの姿のままだった。髪が少し乱れているものの、涼やかな眸が、暗い中でも射るような輝きを放っている。力を失っていないのを見て、留以は胸を撫でおろした。

「お解き放ちだそうです」

まずよい話を口にする。

「なれど、その前に薬種問屋〈宮本屋〉との関わりを、お話しいただきたく思いま

す。すでに主を捕らえた由。これは奉公人の話ですが、間違いなく、朝香先生に人参を渡していたと白状したとか」

次に条件をまじえた事実を告げた。

「まことですか」

笙子は格子に手をかける。細くて白い指、多くの民を救う手。貧乏人を救うその手に、留以は格子越しに手を重ねた。

「詳しい詮議はこれからのようですが、奉公人が白状したのはまことです。やはり、神田駿河町の〈宮本屋〉に、安い人参を融通してもろうていたのですね」

確認するような問いかけが出る。

一瞬、微妙な間が空いた。

なんと言っても知り合って日が浅い。どこまで話していいものやら、躊躇(ためら)っている様子が見て取れた。

「色々と不安はおありだろうと思いますが、お上は朝香先生と〈宮本屋〉の関わりが知りたいだけだと思います。〈宮本屋〉から人参を手に入れていたと言うだけでよいのです。朝香先生が自ら下品の人参を、仕入れたと考えているわけではありません」

「それは……そのとおりですが、安く用立てていただきました。〈宮本屋〉さんには、御恩がございます。わたくしの口から密告するような話はできません」

と、笙子は目を伏せる。思っていたとおりの女だった。我が身よりも他人のことを第一に考える。

「わかっております、だから、わたくしが参りました」

留以は懸命に食いさがった。自然に熱がこもっていた。

「なにか手違いがあったのやもしれませぬ。毒入りの人参だったのかどうかは、まだわかりませぬが、〈宮本屋〉も与り知らぬことだったのやもしれませぬ。まずは朝香先生がここを出るのが先ではありませんか。そして、次に……」

「わかりました」

遮るように言った。顎をあげた笙子の顔からは、迷いが消えていた。

「お上にお話しいたします」

「よかった。あ、いえ、失礼いたしました。今少しお待ちください」

留以は詰所に走って、兵庫を呼んだ。犬目与力を連れて戻る間に、笙子は、乱れた髪を指で整え、畳に正座している。兵庫が来ると、額を畳にこすりつけるようにして訴えた。

「お上に申しあげたき儀がござります」
「〈宮本屋〉のことか」
「はい。人参を安く用立てていただきました。なれど、〈宮本屋〉さんに非はござりませぬ。毒入りの煎じ薬という話は、なにかの間違いでござります」
「何人かが続けざまに死んだと聞いた。深川の仙台堀近くで見つかった女も、そのほうが診ていた病人だったとか」
深川の仙台堀と聞いて、留以はどきりとした。おのぶの話が胸をよぎったのである。顔がどす黒く染まっていた亡骸、亡骸はひとつではなく、三つ、見つかっている。あの話も関わりがあるのだろうか。此度の騒ぎは、大きな騒ぎへと繋がるものなのだろうか。
訊きたかったが、今は呑みこんだ。黙って成り行きを見守っている。
「はい」
笙子は短く答えた。得心できなかったのだろう、
「さらに過日、元数寄屋町の裏店においても、女がひとり死んでいる。次から次へとよう死ぬものよ。たいした腕前じゃ」
兵庫は挑発するように言った。怒りを煽って、本音を引き出すのが得意な策。は

らはらする留以の気持ちを知ってか知らずか。

「わたくしが診ておりました病人は、死病に罹った者ばかり。助けるのがむずかしい病人たちでございました。〈宮本屋〉さんから買うた人参のせいで、亡くなったわけではございません」

笙子は冷静に応じる。己の策が通じぬとわかって、いささか腹が立ったのかもしれない。

「それはこれから調べることじゃ」

冷ややかに制した。常に優位に立ちたい与力としては、顔をつぶされたように感じたのだろう。肩のあたりにぐっと力がこもっている。女医者ごときに言われたくないと全身で告げていた。

「差し出口でございました。申し訳ございません」

笙子は平伏したまま、さがるようにして詫びたが、

「僭越ながら、ひとつ、お願いいたしたき儀がござります」

遠慮がちに訴えた。

「聞く義理はないが、話のついでじゃ。申せ」

「人参のことでございます。安く手に入らないでしょうか。いえ、わかっておりま

す、無理を承知のお願いにござります。なれど、お上の口利きがあれば、名乗りをあげる薬種問屋もいるのではないかと思いまして」

言い終えるや、あとは無言で平伏していた。顔をあげずに答えを待っていた。

「牢屋でかような頼み事をされるとは」

兵庫は苦笑する。ちらりと目を向けられたのをこれ幸いと、留以もその場に平伏する。

「わたくしからもお願いいたします。朝香先生は、貧しい者にとりましては、まさに菩薩のようなお方、菩薩先生にござります。意外な訴えは、すべて病人のため、民のためにござります。八木沢様にお口添えいただけますれば、薬種問屋も名乗りをあげましょう。菩薩先生を助けた見世として、江戸中にその名が知れわたるに違いありませぬゆえ」

「なるほど。その手があるか」

ぽんと兵庫は太腿のあたりを叩いた。

「江戸中に名を広めるための善行か。はたして、それを善行と呼ぶか否かは、意見が分かれるだろうがの。名乗りをあげる薬種問屋はおるやもしれぬ」

「では」

顔をあげた留以に、兵庫は素早く問いかけた。
「確か留以殿の妹御も、薬種問屋に嫁がれたのではござらぬか」
よく知っている。
「はい。わたくしから話してみるつもりですが、〈山崎屋〉は公儀御用達の大店。値段の安い人参は、扱っておりませぬ。引き受けかねるのではないかと思い、口にするのは避けました次第」
「さようか」
頷いて同心を呼んだ。型どおりの質疑は、終わったと考えていいのだろうか。まだなにかあるのではないか。相手が食わせものの与力となれば、そう簡単にはいかないのではないか。油断したところに、あらたな条件を出すことも考えられる。
鍵を持って来た同心が、女牢の錠を開けたのを見て、ようやく身体の力をぬいた。
「出るがよい」
兵庫に促されて、笙子が土間の廊下に出て来る。やはり、気を張っていたのかもしれない。深呼吸するように大きく息をついた。
「ありがとうございました。留以様のお陰です」
「いえ、わたくしはなにもしておりません。八木沢様のご尽力のたまものです」

手柄は兵庫に譲る。笙子は、幾重にも腰を折って礼を述べた。犬目与力は大仰な謝辞を受けるのがきらいではない。薄ら笑いを浮かべていた。鮫が笑ったようで、背筋が冷たくなる。

「騒がしいことよ」

不意にぼそっと呟いた。相変わらず門前では怒声や叫び声が続いている。

「留以殿。大騒ぎしておる菩薩先生の信奉者を、早う落ち着かせてはいただけぬか。うるそうてかなわぬわ」

いつもの、にこりともしない表情に戻っていた。留以はむしろこの顔の方が、兵庫らしくていいと思っている。妙な笑みを浮かべられる方が薄気味悪かった。

「承知いたしました」

答えて、潜り戸に急いだ。晴れて笙子は自由の身、多少なりとも手助けできたのが嬉しくてならない。門を出ると、おのぶが駆け寄って来た。

「お解き放ちでございますか」

「まだなにも言うていませんよ」

「お顔に書いてございます」

おのぶは言い、振り返って叫んだ。

「朝香先生はお解き放ちとなりました。お解き放ちでございます！」
おお、と、波のような、どよめきが起きた。
「こうしちゃいられねえ。おいら、知らせてくらあ」
「あたしも行くよ」
駆け出す者あり、意味もなく右往左往する者ありと、門前は大騒ぎになっている。狂喜する群衆の中に、ひとり、沈んだ気を発している男がいた。
（あのときの）
留以は即座に気づいた。過日、助太刀した若侍は、目が合ったとたん、ついと背中を向ける。慌てて、おのぶに囁いた。
「尾行けます」
「は？」
「わたしは囮役になりますゆえ、そなたは彼の者の住まいを突き止めてください」
「留以様」
おのぶは怪訝そうに眉をひそめたが、もと仕事人。それ以上、よけいなことは訊かなかった。留以はおのぶの手から小太刀を取る。
主従は少し距離を置きながら、若侍を尾行け始めた。

四

同じ頃、平左衛門は、小伝馬町の牢屋敷を訪れていた。

「野村殿がまたおいでになられたか」

牢屋奉行――石出帯刀（いしでたてわき）は牢屋同心の知らせを受けて、無宿牢に足を向けた。代々世襲で石出帯刀の名と職を継いでいる。役高は町奉行所の与力よりは少し良い三百俵十人扶持で、配下に牢屋同心、牢屋下男（しもおとこ）が付属していた。

奉行所同様、鞘と呼ばれる土間の廊下を牢番が見廻っている。人別帳から除かれた原籍のない者を指して無宿者と呼び、一般庶民が入る大牢とは明確に分けられていた。

「石出様」

平左衛門は、無宿牢の外の廊下で待っていた。深々と頭をさげて、しばらく顔をあげようとしない。牢屋奉行は重要な役職であるにもかかわらず、囚人を扱うため、いつしか卑（いや）しめられるようになり、町奉行の同心の中にも、あからさまに居丈高な態度を取る者が少なくなかった。

そういった中にあって平左衛門は、帯刀や配下はむろんのこと、囚人にさえも温かい眼差しを向ける。

「物好きなことよ」

帯刀は率直に言った。

「すでに刑を言い渡された囚人のもとに、足繁く通う役人は、野村殿のほかにはおられぬ。なぜ、かように藤兵衛のことが気になるのでござるか」

ゆえに、と、心の中で続けた。

（今少し藤兵衛の刑を引き延ばしておるのだが）

しばしば平左衛門の頼みを受け入れるのは、帯刀自身、囚人の調べに得心できない部分があるためだった。刑を言い渡して、執り行えば終わりだと普通は考える。が、眼前のこの男はそうではない。

「なにゆえ、藤兵衛が豊吉を殺めたのか。その理由がわかりませぬ」

平左衛門は、ゆっくり顔をあげた。どこといって取り柄のない平凡な顔立ちであり、会った後もすぐに忘れてしまうであろう凡庸な男である。

にもかかわらず、帯刀は惹かれるものがあった。

それがなんなのか、わからない。ゆえに、なのである。帯刀もまた平左衛門の訪

れを心のどこかで待っていた。
「怨みであろう。藤兵衛は樫の木を自ら削って、木刀を作った由。それで豊吉を殴り殺した。よほど怨みが深かったのであろうよ」
過日と同じ言葉が出る。
「会うても宜しゅうございまするか」
平左衛門も同じ問いかけを返した。
「うむ。されど、それがしも立ち会うが、宜しいか」
「は」
ここまでのやりとりもまた過日と同じだった。
「あ、刑を執り行うのではないと、はじめに言うていただきたく存じます。無用な怖れをいだかせたくはありませんので」
という平左衛門の労りも変わらない。同じ場面を見せられているような錯覚に陥っていたが、
「承知した」
帯刀は答えて、牢屋下男に命じた。
「武州無宿、藤兵衛を中庭に連れて来るがよい」

「お気遣い、ありがたく存じまする」

陽当たりのよい中庭を対面場所に選んだのだが、平左衛門は心からの感謝を示した。ふたたび頭をさげる。放っておけば藤兵衛が出て来るまで、そうやっているのではないだろうか。

「先に参ろう」

帯刀は呼びかけて、中庭に出る戸口に向かった。夕闇がうっすらと暗い廊下に射しこんでいる。冬の夕暮れを眩しく感じるほどに、牢屋の廊下は暗かった。

「せめてと思うたが、いささか時が遅すぎたか」

思わず呟いている。藤兵衛に日向の暖かさを味わわせてやりたかったのだが、吹きつける風はあまりにも冷たかった。七つ（午後四時）を告げる前の捨て鐘が鳴りひびき始める。よけい物悲しさが増した。

「夕闇の美しさを愛でるのもまた一興ではないかと」

平左衛門はそう言った後で、照れたような笑みを浮かべる。

「がらにもないことを申しました」

「いや、お人柄が表れておる。そういえば、ここに来るようになられたのは、一年ほど前からでござったな。所帯を持たれたことと関わりがあるのでござるか」

剣術小町と呼ばれる美人を妻に娶ったことは、牢屋敷にも広まっていた。あの野村平左衛門がと、だれもが驚き、意外に思ったものである。帯刀もそのひとりだったが、今は少し違う印象を覚えていた。

「は」

平左衛門は早くも額に汗を掻いている。

「それがしは、かねてより、罪を犯した者にも後顧の憂いなきよう、刑に臨ませてやりたいと思うておりました。殺めた相手に対しましても、心からの謝罪ができねば、真の救いは訪れぬと思いますゆえ」

「ほう」

我知らず感嘆の声が洩れた。はからずも己と同じ考えを持っていることに気づいたからである。

「外道に陥ちてはならぬ、ということでござろうか」

「は」

平左衛門は畏まって、続けた。

「されど、なかなか実行する機会には恵まれませなんだ。母は、その、よけいな真似をするなと考えるたちでござりまして。所帯を持ちました折、妻に話しましたと

ころ、『是非、おやりなされませ』と力づけられまして」

手拭いで汗を拭きふき、説明した。妻に力づけられたからと、臆面もなく言うあたりにも、平左衛門らしさを感じている。

「なるほど。噂どおりのようでござるな。鴛鴦同心の呼び名に違わぬ様子。羨ましゅう存ずる」

来たか。と帯刀は一歩、さがる。牢屋下男が藤兵衛を連れて来た。外の空気を楽しむように、老人は何度も大きく深呼吸している。以前は日傭いの人夫でもやっていたのか、くろぐろと日焼けした顔には、深い皺が刻まれていた。下男に命じられて、藤兵衛は地べたに畏まる。

「ちと調べてみたのだが」

平左衛門が口火を切った。無駄話をしないよう、気をつけていた。

「そのほう、豊吉から殴られたり蹴られたりしていたようではないか。物乞いをして稼いだなけなしの銭を、奪われることもあったと聞いた。まことか」

「さあて、どうだったか」

藤兵衛は曖昧な答えしか返さない。内々の詮議のようなやりとりなのだが、老人の目はすでに死んだ魚のそれだった。虚無の穴が開いているような、うそ寒さを覚

える。覗きこんだとたん、己までもが引きずりこまれてしまいそうな、深い、深い闇の穴――。

行戸走肉。

帯刀の頭には、いつもの言葉が浮かんでいた。ただ生きているだけで役に立たない人物、無学、無能な人を嘲っていう言葉だが、まさに藤兵衛を言い表しているように思えた。物乞いをして生計をたてていた暮らしに、なにか喜びはあったのだろうか。

平左衛門の調べが確かだとすれば、若者たちからひどい扱いを受けていたに違いない。殴られて、蹴られた挙げ句、わずかばかりの銭まで奪われた。

（堪忍袋の緒が切れたのであろう）

ありきたりの結論に至ったが、平左衛門はしぶとく粘る。

「わしは、得心できぬ。どうしてもわからぬのじゃ。おまえがたやすく人を殺めるとは思えぬのよ。なにか事情があったのではないか、ええ、藤兵衛よ」

屈みこんで藤兵衛の目に目を合わせた。肩を抱くようにして、続ける。

「心残りがあろう。なにかしてほしいことはないか。逢いたい者はおらぬか。逢いたい者がいれば、すぐに連れて……」

「旦那」

力なく遮った。淀んだ目が、落ち着きなく彷徨っている。なにか言おうとしていた。喉もとまで言葉が出かかっていた。

「言うてみよ。わしにできることがあれば、なんでもする。子がおるのか、どこにいるのじゃ。住まいはわからぬのか」

「いや」

藤兵衛は、弱々しく首を振る。訴えようとしたものの、最後の決意が揺らいだという感じだった。この年寄りもまた多くの囚人同様、人を信じていない。裏切られることに慣れてしまい、淡い希望を持つことにさえ、怖れを抱く人間だった。いや、希望を持つことを己に禁じているという方が近いかもしれない。

「藤兵衛。わしは……」

「早くやっておくんなさい」

藤兵衛は深く頭をたれた。もともと小柄な身体が、いっそう小さく見えた。これ以上、話を聞きたくないという、意思表示だろうか。両手でしっかりと耳を塞いでいた。豊吉を殺めたことについては、はじめから素直に認めている。が、悔やんだり、謝罪するといった態度はいっさい見せていない。

「藤兵衛よ」
帯刀はつい口を出していた。
「おまえは、殺めた豊吉に対して、すまぬとは思うておらぬようじゃ。殺められて当然だと思うておるのか」
「……」
答えはない。両耳を押さえたまま、背中を丸めた年寄りは、すでに自分の殻に閉じこもっていた。もはや目をあげようとはしなかった。
「宜しゅうござるか」
帯刀の問いかけに、平左衛門は小さく頷いた。
「は」
「連れて行け」
落日が虚しさを掻き立てた。囚人を悔い改めさせたうえで刑を執行するのが、目指す形なのだとは思っている。人の命を奪う役目なればこそ、命を奪うその重みが身体にのしかかる。
（だからこそ、なのやもしれぬ）
帯刀は、平左衛門の訪れを待つのかもしれなかった。

「いつまで引き延ばせるかわかりませぬ。急遽、執り行うことになった場合は、使いをやりますゆえ」

これが精一杯であるのは、わかっているに違いない。平左衛門は無言で頭をさげた。二人の男は、ほとんど言葉をかわすことなく別れた。

耳が千切れるほど冷たい風が吹いている。

魂風（たまかぜ）だった。

五

魂風は、北西風につけられた呼び名である。

羽州や奥州では、玉風とも書くが、その方角から鬼や外敵が来ることから、名付けられたとされている。

（おお、寒い）

留以はあまりの寒さに何度も身震いした。若侍を尾行けて両国橋を渡り、回行院（えこういん）を右手に見ながら、東に真っ直ぐ進んでいる。左右に広がるのは大小とりまぜた武家屋敷。昼間でも人通りの少ない場所だが、日が落ちた今は人気（ひとけ）がほとんどない。

空気が冷えているためか、暮六つ（午後六時）を告げる鐘が不気味なほどよくひびいていた。

ひたひたと背後に聞こえる足音は、おのぶのものだった。若侍は、いったい、どこに行くのだろう。わざとこの道を選んだのではないだろうか。一本道であるため、尾行けるのはむずかしくなる。

（朝香先生が出て来るのを待っていたのでしょうか）

歩きながらも浮かぶのは、笙子と若侍のことだった。断ちがたい想いが、若侍を奉行所の前に行かせたのか。留以と目が合ったとたん、くるりと背中を向けたのは、女医者への恋心を知られたくないからだろうか。

思いきって声を掛けてみようか、と思ったとき、

「あ」

留以は足を止めた。脇道から現れた二つの人影が、若侍を尾行け始めたのである。若侍、二つの人影、留以、そして、おのぶという順になっていた。

前方の脇道で待ち伏せしている刺客もいるかもしれない。そうなれば、前後を挟まれて若侍が逃げ場を失うは必至。留以は足を速めた。

「後ろに刺客がおります」

叫びながら、小太刀を袋から出して、抜き放った。包んでいた袋と鞘は、その場に放り投げる。おのぶが拾ってくれるに違いない。前方ではすでに刃鳴りがひびいている。留以の声が合図になったようだ。

どちらにつくべきか。

一瞬、迷ったが、留以の推察どおり、前方からも幾つかの人影が近づいて来る。多勢に無勢は卑怯と心が決まった。

「助太刀いたします」

掛け声でひとりが振り返る。留以はすかさず斬りつけた。男は右にかわそうとしたが、すでに留以はかわしたその先に二撃目を放っている。低い位置から斜めに斬りあげた小太刀を、相手は避けきれなかった。袴がざっくりと裂ける。

「う」

男は飛びさがったが、よろめいた。腹の肉まで断ち切れたのだろう、血の臭いが立ちのぼる。構えようとしたのだろうが、その場に膝をついた。うずくまった男を横目で見ながら、留以は別のひとりに迫る。

「手出しは無用でござる」

若侍は告げたが、言葉どおりには受け取れない。いやおうなく留以は若侍と背中

合わせになっていた。二対四、腹を斬られた男を入れれば敵は五人だが、流石に動けないのか、路端に座りこんでいる。

「わたくしは、野村留以。南町奉行所の定町廻り同心、野村平左衛門の妻にござります。名乗るのが礼儀ではござりませぬか」

若侍や刺客に向けての言葉だったが、だれひとりとして応えない。袈裟斬りを叩きつけて来たひとりを、留以は軽く右にかわした。男は素早く逆袈裟斬りに変化させようとしたが、留以の小太刀の方が速かった。いち早く男の右手を斬りつける。

「うぁっ」

男が落とした刀を、留以は足で遠くに蹴った。別のひとりが左から真っ向斬りを放とうとする。だが、刀が上にあがった時点で、留以は男の懐に飛びこんでいた。小太刀を腹に浅く食いこませるや、すぐに男から離れる。致命傷ではないものの、浅傷ではない。最初に座りこんだ男と同じく、膝から崩れ落ちた。

「無益な殺生はこれまでにいたしませぬか。双方、お引きに……」

和解案は最後まで続けられない。三人になった刺客のうちの二人が、留以に斬りかかって来る。右に左にかわしつつ、隙を見て鋭い一撃を放った。胸を刺されたひとりが後退る。手加減したつもりだったが、思いのほか力が入ってしまったかもし

れない。男は白目を剝いて昏倒した。

「残るは、二人」

と、留以は闇を見据えた。いつの間にか若侍は姿を消していたが、健闘したのかもしれない。二人の男は腕や足から血を流していた。

「今一度、訊ねます」

留以は声を張りあげる。

「どちらの家中ですか。それとも雇われただけですか」

青眼に構えて、出方を見ていた。男たちもひとりは青眼に構え、もうひとりは八双に構えている。地面にうずくまっていた二人が、刀を支えにして、立ちあがる。それに勇気づけられたのか、

「はぁっ」

ひとりが深く踏みこんだ。月の光を弾いた刀が、闇の中に銀条の軌跡を描いた。わざとゆっくり動いているのではないか、そう思うほどに遅かった。いや、留以が速かったのかもしれない。男が放とうとした逆袈裟斬りを、小太刀で押さえつける。ほんの一瞬、睨み合ったが、右側から別のひとりが襲いかかって来る。

留以は素早くさがっていた。

右側から来た男の刀を弾き返しながら、左から来たもうひとりに袈裟斬りを叩きつける。手応えはなかったが、威嚇するには充分だったのだろう。男は慌てて間合いを取る。腹を斬られた二人が加わろうとしたが、

「次は手加減いたしませぬ」

留以は続けざまに袈裟斬りを放った。二人は間合いを取ろうとしたが、かなわない。尻もちをつくように座りこんだ。低く呻いている。

「退(ひ)け」

ようやく、ひとりがその言葉を発した。留以を睨みつけながら、動ける二人が仲間を抱えこんだ。胸を刺されたひとりはもう駄目だと思ったのか、目もくれない。無情にも置いて、立ち去った。

「お待様」

留以は倒れた男に呼びかけたが、もはや為す術なし。男は絶命していた。念のために懐を探ってみる。血まみれの財布から小判が落ちた。月の光を弾いて、五枚の小判がきらめいた。

だれかに雇われた浪人だろうか。烏合(うごう)の衆(しゅう)ゆえ、見捨てていったのだろうか。それにしても、と、今更ながら腹がたってくる。

「助けられた礼も言わずに、さっさと逃げるとは」

若侍が戦っていたあたりに行ってみた。かすかに窪みがあることに気づき、留以はその場に屈みこむ。一度目のときも二度目のときも、若侍は相手を斃すまでにはいたっていないが……。

「自分の仕事はしっかりやった、ということでしょうか」

立ちあがった留以の背後から声がひびいた。

「だ、大丈夫でございますか」

問いかけた主の不安を示すように、提灯が頼りなく揺れている。ところどころに設けられている辻番から、番太が様子を見に来たようだ。留以は平左衛門の妻であることを名乗り、役人を呼ぶように告げた。

「わかりました」

番所に走る番太と擦れ違うようにして、おのぶが戻って来る。

「留以様、ご無事でございますか」

「大事ありませぬ」

「こちらのお侍は、ご無事ではなかったようで」

と、おのぶは、小太刀の鞘と袋を手渡した。跪いて手を合わせながら、留以が

斃した侍の状態を見る。傍らに置いた小判にも気づいた。
「雇われ浪人でしょうか」
「わかりませぬ」
「犬侍ですが、この先の武家屋敷に姿を消しました。小名木川沿いの屋敷です」
さらりと言った。手柄をひけらかさない点は、八木沢兵庫にも是非、見習ってほしいものである。
「場所は憶えてきましたね」
「もちろんです」
「では、家に戻り次第、武鑑で屋敷の持ち主を確かめましょう。旗本なのか、大名なのか。それだけでもわかれば……」
「門番に銭を渡して、訊き出しました。あの侍が入った武家屋敷は、会津藩の抱屋敷でございます」
「え？」
留以は少なからず驚きを覚えた。会津藩の下級藩士と思しき侍が、菩薩先生に恋い焦がれている、のだろうか。なぜ、二度も襲われたのだろうか。
このとき初めて、留以の胸に小さな疑問が湧いた。

「朝香先生の言葉は……真実なのでしょうか」

独り言のような呟きは、唸りをあげる魂風に掻き消された。血腥(ちなまぐさ)い風が、留以のまわりをまわっている。

第五章　菩薩先生

一

若侍は会津藩の藩士、くだんの藩士は朝香笙子に恋い焦がれている、それを邪魔に思うだれかが、刺客を遣わした……のだろうか。

深川の仙台堀近くで見つかった女は、笙子が診ていた病人だった。そして、元数寄屋町の裏店の女も笙子の患者。二人とも死んだが、おそらく労咳に罹っていたからだろう。労咳は死の病。ゆえにどんな名医も助けられない。

（でも、あの若侍が、朝香先生に恋い焦がれているとは思えません）

留以は必死に考えている。ともすれば閉じそうになる瞼を懸命に押しあげていた。眠くて、眠くてたまらない。此度の騒ぎや藤兵衛のこと、さらに日本橋檜物町の若

女将のことなどを思い浮かべて、なんとか目を開けていた。

〝藤兵衛は心を開かぬ〟

深更、戻って来た平左衛門は、がっくりと肩を落としていた。

〝なにか言いそうになったのじゃ。あと少しだったものを〟

やはり、藤兵衛が住んでいたという、葛西まで行くしかないだろうか。それよりも檜物町の若女将が気になってならない。

「子ができぬからですか」

昨夜、訊けなかった言葉が出た。

「ゆえに、若女将を妾にしたと」

「留以殿」

呼びかけられても、まだ頭がはっきりしない。

「はい？」

ぼんやり問い返した。

「平左衛門の妾について、あれこれ言う時間ではありませんぞ」

希与のきつい口調に、環紀が続いた。

「目を開けたまま眠るとは、つくづく器用な嫁女でございますねえ、母上」

「寝惚け眼で針を持つことは許しませぬ。たかが縫い物と思うておるのだろうがの。針は女子にとっては、殿方の刀のようなもの。いいかげんな仕事をしてはならぬ」

姑の叱りつけるような声に、いやでも目が醒めた。

「あ、も、申し訳ありませぬ。番屋での調べに、殊の外、時がかかりまして。昨夜は思うていたよりずっと遅うなってしまいました。それで」

「つい居眠りが出たわけですか」

環紀が早口で継いだ。姑の座敷に女三人で座している。留以が『地獄の刻』と呼ぶ裁縫を、姑曰く自主的、留以曰く強制的にやらされていた。

「は、い」

大欠伸が出かけたものの、うまくごまかしたつもりだったが、

「心構えができておらぬ」

すかさず希与が言った。

「宜しいか、留以殿。わたしは仕覆師としては、まだまだですがの。是非、希与様にという依頼が来ております」

傍らに置いてあった茶入を取るや、大仰に掲げた。

「良き姿じゃ。のう、環紀」

「はい。やわらかな線に、作り手の心が表れております。色合いがこれまた絶妙でございますね。春霞とでも名付けましょうか。かような色がよう出たものよと、感心いたしました次第」

「幾度となく試みたに違いない。作っては割り、作っては割りを、いやになるほど繰り返したであろう。茶の湯と言えば千利休様。利休好みが職人の技を磨きあげ、やがて、茶の湯を支える職家になったのは、当然と言えば当然やもしれぬの」

希与の十八番が出る。

千家の流れを汲む茶の湯の道具を、代々にわたって製作する職人たちを『職家』と呼んでいた。金物師、表具師、柄杓師、袋師など、優れた職人なくして、茶の湯を支えることはできなかっただろうと言われている。

この優れた職人たちは、のちに『千家十職』と呼ばれるようになったが、時代によっては、八家や九家のこともあれば、十以上になることもあった。職家では、茶事や茶の稽古に必要なすべてを、各家が分担して調整し、家元や茶の湯の愛好者の、むずかしい求めにも応じている。

「求められるがゆえに作る。わたしは袋師、つまり、茶入を入れる袋を作る仕覆師じゃが、茶入によっては、名物裂の替袋を何枚も持っておるのじゃ。大名物、名物

と呼ばれる茶入はの。その仕覆もまた大名物であり、名物よ」

ごたいそうな発言続きだったが、要するに内職だと留以は思っている。

「布にも名物裂があるのですか」

さして興味はなかったが訊いた。話の間を保(も)たせるためであるのは言うまでもない。

「むろんじゃ。名物裂や古代裂が数多く使われておる。留以殿は知らぬだろうが、茶席において仕覆は、茶入や茶杓とともに、客の拝見に供されるからの。それだけ重要な役割を持っておるのじゃ」

それぐらい存じております。これでもいちおう武家の出でございますから。と心の中でのみ答えた。

「商人の見世は暖簾(のれん)で包まれますし、武家の屋敷も陣幕で包まれます。我が国では包むという行いに、大きな意味があるのではないかと、常より思うておりました」

あたりさわりのない返事のつもりだったが、

「おや」

「まあ」

と、姑と小姑は声を揃えた。

「今朝はずいぶんとまともじゃのう」
「熱でもあるのではありませんか」
環紀がわざとらしく、留以の額に手をあてる。
「……熱などありませぬ」
「なれど、寝惚けておりましたよ。ねえ、母上」
「寝惚けてなどおりませぬ」
「そうですか？」
環紀は、留以が繕っていた腰巻を、持ちあげて見せた。すると、どうだろう。留以の着物が腰巻ごと持ちあがるではないか。うとうとしながら、腰巻と一緒に縫い止めてしまったに違いない。
「おや、まあ」
留以はとぼけたが、ここぞとばかりに母娘（おやこ）の猛攻が始まる。
「かような心得では、とうてい野村家の嫁は務まりませぬな」
「だから、平左衛門が外に女子を作るのです」
「早う孫の顔が見たいものじゃ」
「男子に相違ありませぬ。野村家の跡取りでございますよ。留以殿は当然、乳が出

ませぬゆえ、乳母を雇うしかありませぬな」

「……」

あたりまえではないか。子を産んでもいないのに、乳が出るわけがない。反論をぐっと呑みこみ、留以は無言で縫いつけた腰巻を着物から外した。

「それはそうと、母上。本庄家の沙苗様から、気味の悪い話を伺いました。ひと月ほど前から、あちらこちらで土まみれの亡骸が見つかっているとか。まるで墓の下から這い出して来たかのように、土で汚れていたそうですよ」

環紀の話に、ぴくりと耳が動いた。織江が言っていた不審な三体の亡骸とは別の話だろうか。あるいは同じ亡骸のことかもしれない。土まみれだったと聞いた憶えがある。

「外国の船が、頻々と訪れているせいやもしれぬ。政が揺らぎかねぬ事態であるのはあきらか。墓の下の亡骸も、のんびり寝んでおられぬとばかりに、這い出して来たのではあるまいか」

「かようなときでも、のんびり寝めるお方が、我が家にはおりますけれどねえ」

環紀の皮肉は聞き流した。不審な亡骸は、全部で三体、発見されている。そのうちの一体は、女医者が診ていた患者だった。

（残りの二体はどうなのでしょうか）

姑と小姑の厭味を頭から追い出すため、また気になる事柄に集中した。仮に笙子が診ていたとしても、毒を与えて殺したとは思えない。もし、自ら手をくだしたのだとすれば、人目につきやすい場所に亡骸を放置するようなことはしないはずだ。

「いえ、ちょっと待ってくださいな」

考えが声になっていたが、留以は気づかない。

「埋葬した亡骸を、掘り出したがゆえに、土まみれだったのではないでしょうか」

「では、だれが亡骸を掘り出したのですか」

環紀の問いかけだったが、裡（うち）なる声のように聞こえた。

「わかりませんが、もしかすると……背後に見え隠れする大きな騒動を知らせるために、わざとやったのかも……そうです！」

ぱんと手を叩く。

「それで、だれかが掘り出したのです。掘り出して、わざと目立つ場所に亡骸を置いたのですよ」

思わず環紀の手を握りしめたものの、露骨にいやな顔をされる。

「あ」

留以は、慌てて放した。
「申し訳ありません。と、とにかく、土まみれの亡骸には謎があります。調べ直すだけの値があるのでは……」
「よけいな手出しは無用ですぞ」
希与が鋭く制した。
「夫を支えて、後ろから助けるのが妻の役目。いくら剣が遣えるからと言うて、血腥い風を運び入れるようなことでは困ります」
「母上の仰るとおりですよ。まあ、昨夜は肝が冷えました。顔や着物に血を浴びた留以殿が、ぬぅっと入って来たときには」
「まずは縫い物の腕前をあげるのが先です。まだ他にも繕い物があったでしょう、環紀。猫の手よりは、ましですからの」
「わかりませんよ。猫の手の方がましやもしれませぬ」
延々と続きそうな悪態を、おのぶの呼びかけが遮った。
「あの」
遠慮がちに障子を開ける。
「なんじゃ」

「留以様にお目にかかりたいという者が、裏木戸に来ておりまして。名と用件を訊ねましたが、直接でなければ言えぬと」

「参ります」

留以はすぐに立ちあがった。この『地獄の刻』から助け出してくれる者は、必ずや極楽往生できる、いや、どんな極悪人であろうとも極楽往生させてやろうと心に誓った。縁側から庭に降りて、木戸に急いだ。沓脱ぎ石に外出用の草履が揃えられていたことに多少、不審を覚えたが、その疑問は即座に答えが出る。

「訪ねて来たという方は？」

「さあ、どちらへ行かれたのでしょうか。そうそう、忘れておりましたが、今朝方、元締から使いが来たのです。朝鮮人参の流れを調べてほしいということでした。留以様のお妹君が、薬種問屋に嫁いでおられるからだと思います」

「調べるのも仕事ですね」

「はい」

おのぶの含み笑いに、思わず満面の笑みを浮かべる。

留以は木戸からそっと逃げ出した。

二

朝香笙子と会津藩の若侍。若侍が恋い焦がれているという話は、どうにも信じがたいことに思えた。

さらに毒騒動のこともある。笙子が病人に毒を与えたとは思えない。人参を用立てた神田駿河町の薬種問屋〈宮本屋〉が、誤って毒入りの薬を売ってしまったのではないだろうか。

幾つかの疑問を胸に、留以はおのぶをともなって、妹の嫁ぎ先である日本橋通一丁目の薬種問屋〈山崎屋〉を訪ねた。

日本橋通町は、日本橋から南に通じる大通りの両側に、中橋まで一丁目から四丁目がある。俗に日本橋通りとも言い、古来、東海道への行程の起点となっていた。大店が軒を連ね、頻繁に人が往来するさまは、他に類を見ないだろう。

近くには、呉服問屋の〈白木屋〉、茶問屋の〈山本屋〉といった老舗が立ち並んでいる。文字どおり、江戸の一等地だった。

「ごめんくださいまし」

通一丁目の〈山崎屋〉の土間に入ったとたん、独特の匂いを感じた。さまざまな薬草が入り交じった薬種問屋ならではの匂いかもしれない。片隅に帳場をもうけた板場には、小抽出だらけの薬箪笥が置かれており、いかにもらしい雰囲気を醸し出している。

「これは、留以様」

主の千吉が、帳場から出て来た。年は三十で中肉中背、少し神経質な感じはするものの、大店を継ぐに相応しい器量や資質を、充分すぎるほどにそなえている男だった。若い頃は吉原で浮き名を流したらしいが、今は愛妻家どころか、恐妻家に転じている。

「朋江、留以様がおいでですよ」

奥座敷に続く廊下に向かって声をかけ、「どうぞ」とあがるよう示した。ほとんど同時に廊下の手前に掛けられた暖簾が揺れる。

「姉様」

朋江が姿を見せた。二歳の男児を腕に抱いている。後ろに付いていた乳母に、まずは男児をあずけた。

「いかがなされましたか。急なお出ましとは、珍しいことですね。義兄上様と喧嘩

でもなされましたか」
「いいえ。ちと訊きたいことがありまして」
「訊きたいこと？」
「あとで話しますが、煤払いは終わったのですか」
「はい。昨日、済ませました」
「ああ、なにをしているんですか。玄関先に留以様をいつまで立たせておくんですか。気の利かぬことで、申し訳ありません。ささ、二階へどうぞ」
千吉に促されて、留以は板場にあがる。おそらく奥座敷では、諸国から届く薬草を、擂り潰して調合したり、選り分けたりという作業が行われているのだろう。奉公人たちの邪魔をしてはなるまいと、帳場にいた番頭や手代たちに会釈をして、留以は階段をあがって行った。
「おのぶさんは、あちらにどうぞ」
千吉は帳場に残って濃やかな気配りを見せる。おのぶを奥座敷に案内して、温かい白湯や蕎麦を振る舞ってくれるに違いない。近藤の家もそうだが、ここも人を包みこむような空気のある家だった。朋江のおおらかな気質のお陰かもしれない。
二階の座敷に腰を落ち着けたとたん、本音が出る。

「やっと大きく息をつける気がします」
留以の呟きに、妹は笑いながら返した。
「野村家では、息を吸いこむのさえ、遠慮しなければなりませんか」
「ええ。義母上様は、嫁女には空気も与えたくないと思うておいでですから」
「姉様ったら」
笑い合えば、つい先刻、拳を握りしめた気持ちも消え去る。下女が炬燵を調えて、手炙りを運びこむと、二階の座敷はまさに極楽となった。
「そなたはいつも、かような贅沢をしているのですね。羨ましいこと」
「言葉ほど思うておられぬご様子が、表情に出ていますよ。この間も言いましたが、本当は姉様が味わっていた暮らしではありませぬか。譲られたわたしといたしましては、いささか複雑な気分ですけれど」
そういえば、と、朋江は好奇心に目を光らせる。
「噂を聞きましたよ、剣術小町の。昨夜も本所界隈で悪党退治をなされたとか。鬱憤晴らしにちょうどいいのではありませんか」
「まあ、早いこと。そなたも義母上様と同じく地獄耳ですね」
「瓦版に書かれておりました。『剣術小町、見参！』というような見出しだったと

思います。悪を許さぬ正義の刃、襲いかかる賊をばった、ばったと切り捨てる。あ、そうでした。お怪我はなかったのですか」

いかにも朋江らしい問いかけが出た。織江であれば、まずはじめに訊いただろう。茶を運んで来た千吉が、呆れたように若い妻を見やる。

「なにを言うているのやら、最初に留以様のお身体を案じるのが、妹ではありませんか。いつまでたっても、末っ子の甘えがぬけませんね」

「見ればわかりますもの」

朋江はおっとりとかわした。

「それに、姉様を打ち負かせるのは、道場の師範や師範代だけです。有象無象の輩にやられるわけがありません」

留以の腕前に、全幅の信頼を寄せている。くすぐったいような思いに、しばしひたりたかったが、ここに来た理由を忘れてはならない。

「千吉さんに、お訊ねしたいことがあるのです。朝鮮人参なのですが、神田駿河町の〈宮本屋〉は、下品の人参を扱っていたとか。それで今、主が調べを受けているのですが」

「耳に入っております。下品の人参に毒を混ぜた容疑である由。本所相生町の女医

者も捕らえられたようですが、こちらはお解き放ちになったとも聞きました」

「はい。わたしの知り合いです。此度の騒ぎには朝鮮人参が深く関わっているのはあきらか。それで色々訊きたいことができたのです。下品の人参を多く摂った病人は、命を失うことがあるのでしょうか」

「そういう話は聞いたことがありません。薬が合わない場合は、もちろんございますが、命を落とすほど人参を飲んだ例は、てまえが知る限り、ございません。ただ」

「ただ？」

「今から、そう、ちょうど四年前になりますか。ご改革のひとつとして、お上は朝鮮人参の野州一国御用作を禁じたことがあるのです」

天保十三年（一八四二）十二月。栽培技術の秘匿を目的として公布されていた御用作体制が、このとき、廃止されたのだった。勝手作――自由に作っていいというお達しがなされたのである。

「ですが、弘化元年（一八四四）の十二月に、廃止令をまた廃止したのです」

「それは、つまり」

留以の言葉を、千吉が受ける。

「自由に作ってはならぬ、と、あらたにお達しがなされました。すなわち野州一国御用作に戻すということです」

わずか二年にしか満たない解禁は、朝鮮人参の市場を混乱させるに充分だった。勝手作が認められていた時期に、質の悪い下品の人参が横行したり、下品の人参を混ぜて売られたため、人参の質が著しく落ちたのである。

「てまえどもでは、主に御種人参を扱っておりますので、さほど影響は受けませんでしたが、その折に流れた粗悪品が、今も出まわっているのではないかと思います」

御種人参とは、天平十一年（七三九）に朝鮮の使節が、朝廷に献上する品として持ちこんだ人参を指している。が、近頃では、公儀が扱う人参を御種人参と呼ぶようにもなっていた。

「だれかが毒を混ぜたのかもしれませんね。そうすれば、人参の嵩が増えるじゃありませんか」

朋江の不用意な発言を、

「めったなことを言うものではありません」

千吉が素早く窘めた。

「毒を故意に混ぜたとは思えませんが、混じってしまったということはありうると思います。まあ、毒なのかどうかもわかりませんが」

「ええ、わたしも千吉さんと同じ考えなのです。なにか手違いが起きたのだろうと思うのです。つかぬことを伺いますが」

ふと思いついた事柄を問いかけに変えた。

「先程、野州一国御用作と仰いましたが、それは下野国（しもつけのくに）において、あくまでもお上が作る人参ということですか」

「さようでございます。地元では人参御用所と呼ばれております。御用所を統轄しておりますのは、公儀の人参御役所。これは御城にございます」

「おまえさま。人参というのは、かように儲かるものなのでございますか」

朋江が問いかけた。千吉は「これだから困ります」というような顔をしたが、幼いゆえに可愛くてならない一面もあるのかもしれない。

「普通の農作物一町歩と、人参作一反歩の作穂が、同等の値と言えば、わかるのではありませんか」

わかりやすい説明が出る。朋江は目を丸くした。

「一町歩と一反歩が同じ値なのですか」

「はい。そのうえ人参畑は、猪や鹿に荒らされる心配がありません。独特の薬臭さをきらうのでしょう。食べないのですよ」

「ゆえに、隠し作りや、人参の種子の盗難などが、後を絶たないということですか」

留以の言葉に、千吉は大きく頷いて見せた。

「仰せのとおりにございます」

流石は留以様、やはり、朋江とは違いますね。夫はそんな笑みを浮かべたが、朋江は気にかける様子もない。

「今、姉様が隠し作りの話をしましたが、大名家でも人参を作ることは、許されていないのですか」

「いえ、二つの藩が許されております。ひとつは松江藩、そして、もうひとつは、会津藩です」

「え」

留以は絶句した。

三

朝鮮人参の栽培を許されているのは、出雲国の松江藩と、陸奥国の会津藩。

会津藩は、例の若侍が奉公していると思われる藩だ。若侍は朝香笙子につきまとっていた、いや、見張っていたように思えなくもない。特産品のひとつは、まさに騒動の中心となっている朝鮮人参――。

会津藩は、三代将軍家光公の異母弟・保科正之を祖とする藩である。

石高はおよそ二十八万石、松平肥後守容敬が、現在の藩主であり、保科家は御三家に継ぐ家門、徳川一族として遇されていた。薬園の創設にともなって、公儀から人参の種子を賜り、試作に成功したため、出雲藩から大量の種子を買い入れたとされる。

和田倉御門内に上屋敷、芝新銭座に約三万坪を有する中屋敷、三田綱坂の下屋敷もまた三万坪を超える屋敷と、外様大名ではあるが、押しも押されもせぬ名家だった。

「松江藩と会津藩がなにか？」

千吉が怪訝な顔になる。

「あ、いえ、ちと会津藩のことが気になりまして」

留以の呟きをどう思ったのか、

「陸奥国は大半が山地で占められております。会津・福島・郡山の三つの盆地や、河川沿岸を除きますと、目立った平野は見られません。他藩に比べて不利な条件の中、人参だけでなく、さまざまな特産品を生産できるようになりましたのは、ひとえに人々の勤勉さと工夫好きのお陰でございましょう」

千吉は一般的な意見を口にする。

「上品の人参を姉様にご覧にいれた方がよいのではありませんか。どこかで下品の人参を見たときに、役に立つやもしれません」

「おや、朋江にしては、ずいぶんとまともな訴えですね」

からかうような言葉に、朋江は夫を軽く睨みつけた。

「おまえさま」

「承知いたしました。なにかのお役に立てば幸いでございますので」

千吉は立ちあがって、二階の座敷を出る。階段を降りて行く足音を聞いた後、留以は小声で囁いた。

「朋江はご亭主を操るのが巧くなりましたね」
「嫁して三年、経ちますもの。ですが、大仏の掌（てのひら）で転がされているような感じです。まだ大仏にはなれません」
「それがわかっているだけ、よしとしましょうか」
「まあ、ひどい」
笑いながら言った。言葉ほどではないことは、口もとにたたえられた笑みに表れている。不意にその笑みが消えた。
「過日は話しませんでしたが、巷では人参騒ぎに加えて、奇妙な仏の話も広まっているとか。墓の下から這い出て来たかのような、土まみれの亡骸（なきがら）が三つ、見つかったと聞きました」
「姉上も同じ話をしておられましたよ。そなたが来る前だったと思います。毒を飲まされたように、青黒い顔だったとも言うておられましたが」
「おお、いやだ」
小さく震えた。
「人参騒動と同じですね。どちらの騒ぎも毒が関わっているのでしょうか」
「わかりません」

留以は答えた。毒という共通項があるのは、あまり喜ばしいことではない。三体の亡骸のうちのひとつは、朝香笙子が診ていた病人だ。いやでも関わりを疑いたくなる。

「なにか気がかりなことでもあるのですか」

朋江の問いかけに、考えながらの言葉を返した。

「先程、千吉さんにも言いましたが、お解き放ちになった女先生とは知り合いなのです。本所相生町に住んでいる由。この後、訪ねてみようかと思いまして」

小伝馬町の牢屋敷で刑を待つ藤兵衛のことも浮かんでいた。あらたな話を得るためには、藤兵衛が住んでいた葛西に行くべきなのかもしれない。しかし、半日、潰れてしまうことを考えると、なかなか決心がつかなかった。

さらに日本橋檜物町の若女将、千也。

愛妾のことを思い浮かべた刹那、

「旦那様に妾がいるようなのです」

つい愚痴をこぼしていた。

「まさか」

と、朋江はおのぶと同じ反応をみせた。

「義兄上様に限って、かような真似をなさるはずがありません。姉様一筋ではありませんか。なにかの間違いでございますよ」
「ですが」
「おおかた話の出所は、義母上様か義姉上様でありましょう。違いますか」
「そう、ですけれど」
「姉様をいたぶるのが、あのお方たちの趣味なのです。右から左に聞き流して……」
「すぐそこにいるのです、すぐそこの檜物町に千也という若女将がいるのですよ。旦那様がその女子の家から出て来るところを、わたしはこの目で見たのです！」
指さして、叫ぶように言った。驚いたに違いない。
「姉様」
朋江は目をみひらいている。
気まずい時が流れた。
「つまらぬことを言うてしまいました。忘れてください」
目を逸らした留以の手を、朋江が両手で握りしめる。
「わたしが調べてみます。大丈夫、だれにも気づかれぬようにいたします。万が一、

ありえぬと思いますが、事実だった場合は、夫に話して綺麗さっぱりと手を切らせます。伊達に吉原で浮き名を流したわけではありませんから」

話しているうちに、昔の伊達男が戻って来た。

「いかがなされましたか」

鈍い男ではない、座敷に漂う微妙な空気を読み取っていた。

「おまえさまの噂話をしていたのです。悪い病が治ったのは、姉様に恋をしたお陰。返せぬ御恩がありますと」

朋江がうまくごまかした。

「そのとおりかもしれません」

千吉もそれ以上、口にしなかった。紙に包んできた上品の人参を、留以の前に置いて、広げる。

「まあ、人間そっくりではありませんか」

思わず声をあげた。紙の上の人参は、人が大の字になったときのような形をしていた。顔や手足がちゃんと形作られている。

「はい。これは山参と呼ばれる野生の朝鮮人参でございます。残念ながら我が国では、ここまで質のよい人参はまだ作れません。山参は草と言うよりも樹と言うべき

人参でございまして、『草のように見せかける樹』と呼ばれるとか」
「なんだか少し気味が悪いですね」
留以はとても触る気になれなかった。悲鳴をあげそうで怖い。
「剣術小町ともあろうお方が、山参ごときを怖れられますか」
千吉は意外そうな顔をしている。
「姉様は、幽霊や生霊の類が苦手なのです。血を見るのは平気なのに……」
「朋江」
千吉が慌て気味に遮る。
「血を見て平気な女子など、いませんよ。厳しい剣術の鍛錬をすることによって、己を抑える術を身につけておられるのです。いつまでも甘えん坊のどなたかとは、心の有り様が違うのですよ」
「わかっております」
「おや、そろそろお乳の時間ですか」
千吉の言葉に、幼子の泣き声が重なる。乳母に抱かれて階段をあがって来るところなのだろう。次第に大きくなる泣き声が、二階の座敷の前で止まった。
「おねむなのかもしれませんね」

朋江が障子を開けて、乳母の手から男児を抱き取る。千吉は上品の人参をたいせつそうに紙で包み、座敷から出たが、

「仕出し料理を頼みました。ごゆるりと中食をお楽しみください」

深々と頭をさげて、階段に向かった。

「いえ、わたしはすぐにお暇を」

「中食ぐらい、召しあがっていかれませ。天からのご褒美でございますよ。食べたところで罰はあたりません」

朋江は炬燵の前に座って、お乳を与え始めた。母そのものの姿を見ると、胸が締めつけられるように痛む。ぽつんとひとりだけ取り残されたような、あの孤独感にまた襲われていた。

子がいないからだろうか？

自問が湧いた。

むろん、それもあるだろう。織江には五歳の嫡男、朋江には二歳の男児。子がいないのは、留以だけ。確かにそうなのだが……深い憂悶の答えは出ない。

菩薩先生の騒動、土まみれだった三体の亡骸、そして、なにも語ろうとしない藤兵衛。

幸せそうな妹の姿が、眩しかった。

四

夕餉も食べていってほしいと、懇願するような千吉に、留以は何度も詫びて〈山崎屋〉をあとにした。

「三つの亡骸は、埋められていたに違いありません。だれかが掘り返して、目立つところに置いたのではないでしょうか」

つい早足になっている。八つ（午後二時）の鐘が鳴り終わったため、よけい気が急いていた。おのぶも遅れぬよう、隣を歩いている。

「元締も同じように考えたのでしょう。それで、お真佐さんに調べさせていたのかもしれませんね」

二人は話しながら、両国橋を渡り始めた。弱い陽が射しているものの、大川から吹きつける風は耳が切れそうなほどに冷たかった。凍えるように寒い。行き交う人々も師走を表すかのごとく、せかせかと急ぎ足になっている。

「仕事が持ちこまれたからではないのですか。それで、お真佐さんが動いているの

だろうと思いましたが」

「そうかもしれませんが、元締は常に網を張りめぐらせています。気になる騒ぎがあると、調べさせるんですよ。仮に仕事がらみであるとすれば、岡田様も駆り出されているかもしれませんね」

「わたしも気になることがあるのです。土まみれだった三体の亡骸のうち、一体は朝香先生が診ていた病人でした。残る二人はどうだったのでしょうか」

「やはり、それが気になりますか。亭主にあたらせているのですが、思うような話は得られていません。元締も行き詰まっているようで、あらたな話はつかめていないということでした」

おのぶの夫、弥太郎は、未明から朝方にかけて、夜の町を走りまわっていた。阿吽の呼吸で動いてくれるのがありがたい。

「番町の義父上も元締に似たご気質なのか、三体の亡骸について調べていたそうです。姉上に伺うた話ですけれど、一度、行ってみた方がいいかもしれませんね」

「公儀の御目付様が、町方の騒ぎを心にお留めあそばされるとは」

舌を噛みそうになったのかもしれない。

「慣れない言葉づかいは、するもんじゃありませんよ」

おのぶは、口もとに手を添えた。
「公儀の目付が町方の騒ぎを気にするのは、おかしなこと、ですか」
留以は呟き、橋の途中で足を止めた。姉の織江から話を聞いたときは、義父らしいと思った憶えがある。町方の騒ぎであろうとも、油断なく目を光らせるあたりに、能吏らしさが表れていると思ったのだが……。
「もしかすると」
橋の欄干から、彼の屋敷の方角を見やった。
「会津藩がからんでいるとしたら、どうでしょう。いえ、おのぶが言いたいことはわかっています。目付は旗本の監視役、大名家の監視役は大目付の役目ですからね。普通は探索に時を割いたりはしません」
「なれど、此度の人参騒動に、旗本も関わっていたとしたら？」
おのぶが言葉を継いだ。留以の自問を声にしたような感じだった。頷き返して、ふたたび歩き始める。
「一度、義父上のお話を伺いに参りましょう」
「また大奥様と環紀様の、鬼攻撃をかわしながらですね」
「頼りにしていますよ」

「おまかせを」
「ついでにもうひとつ、頼みたいことがあるのです」
東の両国広小路に着いたとき、留以はおのぶに言った。
「調べて来てほしい事柄があるのです」
目で永代橋の方を指すと、
「元数寄屋町の佐知でございますね」
おのぶは即座に答えた。労咳の母を看病していた健気な娘、無事にご奉公しているだろうか。その後が気になった。
「そうです」
「では」
おのぶは南へ歩を進め、留以は、団子屋や田楽屋の屋台が並ぶ広小路を、小走りに通り抜けて行った。菩薩先生の住まいは本所相生町。竪川の北岸に西から東へ一丁目から五丁目がある。ここは一丁目を一ツ目、二、三丁目を二ツ目と里称していた。
「屋号を聞き忘れましたが」
留以の不安はすぐに打ち消された。相生町二丁目の一画に行列ができている。並

んでいた男をつかまえて訊くと、笙子に診てもらいたくて順番待ちしている列だとわかった。

「わたしは診てもらいたいのではありません。朝香先生にお目にかかりたくて参りました。お取り次ぎ願えますか」

つかまえた男が、そのまま伝言役に変わる。

「おい、先生に用があるんだとよ。空けてくれ、通してやってくれ」

留以の背中を押して、行列に割りこませた。謝りながら、少しずつ家の戸口に近づいて行く。裏店かと思いきや、笙子の家は表店の二階家だった。かつては仕舞た屋だったに違いない。土間の向こうに板の間、その向こうに座敷が見えた。

「はい、湿布薬。冷やすのが、一番よくありませんよ。湯屋でゆるりと手足を伸ばしなさい。それがなによりの薬です」

笙子は板の間で年寄りに湿布薬を渡していた。奥の座敷には、何人もの患者が横たわっている。針治療を行ったり、灸をすえているのだろう。弟子と思しき二人の若い男が、横たわる患者の間を忙しげに行き来していた。

「はい、では、次の方」

年寄りを送り出した笙子と目が合った。

「留以様」
「近くまで来たものですから、ご挨拶だけでもと思いまして」
「ちょうどよいところに来てくださいました。手伝うてくださいな。留以様は剣術の心得がおありになるとか。骨接ぎや、打ち身の手当てぐらいできるでしょう。さあ、あがってください」
「あ、はい」
一瞬、当惑したが、あがる間にいつも袖に入れている腰紐で襷がけをしていた。手拭いで姐さん被りも忘れない。家にいるときと変わらない姿になって、笙子の助手役を務め始める。
「灸のやり方はわかりますか」
「ええ。義父の手当てをしましたので」
「けっこう。では、座敷の方を手伝ってください」
「わかりました」
なにがなんだかわからないまま、座敷の患者たちの世話役に加わる。艾の煙で咳が出るほど、臭いがこもっていた。八畳ほどの座敷には、足の踏み場もないほどに患者が横たわっている。留以は、若い弟子に渡された線香で艾に火を点けてまわ

った。ざっと数えたところ、総勢十人。年寄りが多いのは当然かもしれない。

「朝香先生は安いからねえ。助かるんですよ」

ひとりの老女が、拝むように手を合わせた。

「頼めば、家にも来てくれるんだ。動けねえときもあるからよ。だれかが菩薩先生と言ってたが、そのとおりじゃ」

隣の老人も声をあげる。菩薩先生と言ったのは他のだれでもない、留以なのだが、よけいなことは口にしなかった。黙って艾に火を点けてまわる。消えた灸を取り去っては、次の病人にまた灸をすえる。ここに来た理由はひとつしかない。

疑いを拭い去りたかった。

人参騒動に笙子が関わっていないことを確かめたかったのだが……。

(わたしは恥ずかしい)

留以は己を恥じた。これだけ病人のために尽くす笙子が、毒など飲ませるわけがない。我が身を擲って病人を診る姿に、胸が熱くなるのを覚えていた。

五

無我夢中で手伝い、最後の患者を送り出したときには、暮六つ（午後六時）の鐘が鳴り終わっていた。

「日が暮れるのが合図なのです」

笙子は言った。

「行灯（あんどん）の油を節約しているのを知っておりますからね。よけいな銭がかからぬよう、みな気遣ってくれるのです」

「そうですか」

留以は、頭から手拭いを取る。途中で加わったおのぶが、ごく自然に賄（まかな）い役に就いていた。台所からは煮物を炊いたり、飯を炊く匂いが流れて来る。

「今日は大店の御新造のよう」

笙子が目を細めた。

「いつもはこれから、わたしが作るのです。長屋の女房がなにかしら総菜を差し入れてくれますから、ご飯を炊いて、味噌汁を作るだけですけれどね。綿（わた）のように疲

れたときなどは、それさえも億劫で」

「少し寒いかもしれませんが、窓を開けて、空気を入れ換えましょう」

留以は立ちあがって、座敷の窓を開けた。台所の勝手口は開けたままにしてある。両国橋の上では、刺すように感じられた北西風の魂風が、今は爽やかにさえ思えた。燻された艾の臭いがわずかではあるものの、消える。

疲れきっているのだろう、

「ああ、よい風ですね」

笙子は座りこんでいた。若い弟子が敷かれていた布団を畳み始める。留以は台所に行き、おのぶに手を貸した。洗い場には、青菜や大根が無造作に置かれている。治療代としてだれかが置いて行った野菜だろう。

「元数寄屋町の娘ですが、どこに行ったのか、わかりませんでした。母親が死んだ後、内々でささやかな葬儀を行った由。朝香先生が費用を出したそうですが」

おのぶが耳もとに囁いた。それは先刻、留以が覚えた恥を揺さぶる言葉だった。ふたたび頭をもたげそうになった疑問を、笙子への信頼感で抑えつける。

「訊いてみればよいことです」

手早く茶の支度をし始めた。

「よけいな真似をと、お叱りを受けるかもしれませんが、亭主に使いをやりました。毎日、張りつくのは無理ですが、夜の動きを知る必要があるのではないかと思いまして」

おのぶの手配りに、感謝しつつ、茶を淹れた。笙子が夜、出かけるようであれば、弥太郎が尾行けると告げていた。留以は何事もなかったような顔で座敷に戻る。

「今少しお待ちください。ご飯に芯が残ったら、台無しですからね。わたしはいまだに上手く炊けないんですよ。いつも姑に叱られてばかりで」

話しながら、笙子と二人の弟子の前に湯飲みを置いた。

「先生も」

弟子のひとりが、にやにやして見やる。笙子は悪戯を見つけられた童女のような、照れ笑いを浮かべた。

「実はわたしも下手くそなんですよ。しょっちゅう、芯ありご飯を食べさせていますね、この二人には。食べ慣れると、あれはあれで、まあ、悪くないのではないかと」

「駄目ですよ」

「そう、食べ慣れるなんて、できません」

すかさず二人の弟子から反論があがる。

「それなら、たまには作りなさい。料理を作るのは女子(おなご)だと、だれが決めたのですか。料理屋の板前さんは、ほとんどが男ではないですか。男が台所に立ってはならぬと、お上は定めておりませんよ」

負けじと笙子も言い返した。どっちもどっちだが、留以としては菩薩先生に軍配をあげたい。

「配膳だけでも手伝っていただきましょうか」

二人の弟子に笑顔で促した。その方が話しやすくなる。弟子たちが台所に行ったのを機に、訊ねたい事柄を口にした。

「過日、亡くなられた方ですが、十二、三歳の娘さんがおられました。案じられましたので、ここに来る途中、元数寄屋町に寄ってみたのです。裏店の女房に訊きましたところ、姿を消してしもうたとか。あの娘さんは、どちらに奉公しているのですか」

「ああ、佐知ですか」

笙子は答えた。

「羽州(うしゅう)から叔父(おじ)という人が迎えに来たのです。身寄りがないと言うていましたが、

ちゃんと親戚がいたんですよ。江戸には身寄りがいないけれど、在所には家があるとか。百姓家だそうですが、江戸に置いたままにはしておけないと言って、佐知を連れて帰りました」

特に狼狽えた様子はない。

「そうでしたか」

だが、留以の頭には、羽州という遥かな大地のことが残った。遠くて、簡単には行けない場所である。調べられるのを懸念して、ありもしない話をでっちあげたのではないだろうか。

「なにか気になることでもありますか」

笙子は顔を覗きこむ。

「いえ、佐知でしたか。佐知が田舎に帰る前に、今一度、会いたかったと」

答えつつ、懸命に考えていた。消えない疑問を、なんとかして消せないだろうか。捕らえられた女先生、女先生は薬種問屋〈宮本屋〉を庇っていた、下手をすれば、あのまま〈宮本屋〉の代わりに罪を問われていたかもしれないのに……。

「話は変わりますが、なぜ、〈宮本屋〉を庇うたのですか。さらに与力の八木沢様に、薬種問屋に口を利いてくれないか、などと言うたのはどうしてですか。牢屋敷

送りになっていたかもしれません。なぜ、ですか」

不可解な言動の意味を知れば、疑いが消えるかもしれない。ふわふわした頼りないものであることを、心のどこかでわかっていた。それでも縋りたかった。笙子を信じたかった。

じっと見つめる中、

「そう、自分のことであれば、できなかったでしょうね」

笙子は呟いた。息を吐き出すようにして、続けた。

「わたしのことであれば我慢したと思います。安い人参を手に入れるのが、むずかしいとなれば諦めます。仕方ありませんよ。無い袖は振れぬというやつです。留以様も同じではありませんか」

問い返されて、留以は返事に詰まる。

「それは」

あらためて訊かれると、答えようがなかった。笙子のように我が身を投げ出せるだろうか。血を分けた我が子であれば、できるかもしれないが……。

「人のためだから動けたんです。思いもかけない言葉が出ました。だれかの役に立ちたい、わたしを頼って来る病人を助けたい。その一心ですよ」

「では〈宮本屋〉のために、斬首になってもよかったと？」
「さあ、そこまではわかりません。あとでどうなるかなんて、考えていませんでした。考えたらできなかったと思いますよ」
ある意味、予想どおりの答えといえた。が、それを聞いても、すっきりしない。当初の話どおり、佐知が商家に奉公していたら、疑いは綺麗に消え去っていただろう。しかし、今は消えない疑問だけがくすぶっている。
「わたしには子がおりません。だからかもしれませんね。頼りにされると、応えたくなるのです。あのときは、なんとかして、朝鮮人参が手に入らないかと思いました。〈宮本屋〉さんが斬首となれば、もう人参は都合してもらえません。とっさに口をついて出たんですよ」
その言葉を聞いた瞬間、留以は慄えた。
（朝香先生は、間違いなく、人参騒動に関わっている）
と確信したからである。口をついて出そうになる問いかけを、無理やり押しこめた。今は言わない方がいい。笙子は、夫同様、いいように使われているのだろう。黒幕を突き止めたいと思った。
黙りこんだことを不審に思ったのか、

「なにか？」

ふたたび笙子が訊いた。

「いえ、なんでもありません。〈宮本屋〉のことですが、まだ斬首になるかどうかはわからぬようです。人参に毒を混ぜて渡したという、慥かな証はありませんから」

「でも、現実に亡くなっているのです。繰り返しになるかもしれませんが、〈宮本屋〉さんには御恩がありましたので、奉行所では言いませんでした。なれど、次から次へと病人が亡くなりました。ほとんどが労咳を患っていた方ばかりですので、八木沢様にはかように申しあげましたが」

「仮に〈宮本屋〉の仕業だとした場合、そこでまた『なぜ？』と思うてしまうのです。朝香先生が診ていた病人は、その」

言い淀むと、笙子が継いだ。

「死病に取り憑かれた病人ばかり。遅かれ早かれ旅立つ運命です」

「ええ。それなのに、どうしてでしょうか」

「わかりませんが、もしかすると、いえ、これはあくまでも、わたくしの考えですが、人参がもったいないとでも思ったのか」

「だから毒を混ぜたのですか⁉」
留以の大声に、膳を運んで来た弟子たちが足を止める。
「仮の話ですよ。本気になさらないでください」
笙子は言い、二人の弟子から膳を受け取った。さあさあ食べましょうと、艾の臭いが染みついた畳に膳を並べる。客の訪れが多いのか、箱膳の数が人数分、揃っていた。漆塗りのなかなか良い品に見えた。
悪いのは〈宮本屋〉なのだろうか。本当に毒を混ぜて、死病に取り憑かれた病人を殺そうとしたのか。そして、その理由は、人参がもったいなかったから、なのだろうか。
（わからないことばかりです）
留以の憂悶は、ますます深くなっていった。

六

憂悶はひとつではない。
遅くなったことを、どう言い訳すればいいだろうか。

留以は、野村家の門前を行ったり来たりしていた。平左衛門が戻っていなければいいが、希与と環紀はまだ起きているだろうか。ああ、明かりが点いている。爛々と目を光らせているに違いない、などなど、あれこれ考えながらも、どうしても裏木戸を押すことができない。

「朝までこうやっているおつもりですか」

おのぶに言われて覚悟を決めた。

「ただいま戻りました」

できるだけ軽やかに告げて、木戸を押した。

「義母上様、義姉上様、申し訳……」

「留以殿！」

障子が激しい音をたてて開いた。裏木戸に近い座敷は、留以と平左衛門の居室。そこで待ち構えていた姑は、仁王立ちになっている。額に鉢巻きを締めたり、長刀を携えてはいないが、留以の目にはそう映った。

「遅うなりました。申し訳ありません」

屈みこんで詫びる。

「夫が働いているのをこれ幸いと、夜遊びかえ。よいご身分ですな」

希与の厭味に、後ろに隠れていた環紀が続いた。
「これはあれですよ、母上。平左に愛妾ができたことへの、あてつけです。剣術小町は殿御に今も人気とか。出合い茶屋にでも行ったのでしょう」
「まことか？」
眦を吊りあげた希与に、大きく頭を振る。
「めっそうもない。人参のことが気になりましたので、本所相生町の医師、朝香笙子様の家を訪ねておりました。あまりにも病人が多かったため、及ばずながらお手伝いした次第です」
「ふん。人助けをしている間に、向かいの本庄家は大変な騒ぎであったわ。民子様が喀血なされてしもうての。しきりにそなたを呼ぶゆえ、弥太郎を使いに出そうとしたのじゃが、その弥太郎さえもいない始末よ。主が主なら、下男も下男じゃ」
「民子様が」
驚いて顔をあげた。
「様子を見て参ります」
後ろに控えていたおのぶが、裏木戸から飛び出して行く。足もとから冷えが、しんしんと忍び寄ってきた。これは明け方までお小言かと覚悟したとき、

「戻りました」
表門の方で夫の声がひびいた。
「旦那様」
留以はすぐに立ちあがって、表門の方にまわる。平左衛門にしては、お手柄かもしれない。一年に一度あるかないかの女房孝行だった。希与がなにか叫んでいたが、聞こえないふりをする。
「おお、留以。今、戻ったぞ」
平左衛門は玄関の上がり框（がまち）に、疲れきった顔で腰かけていた。
「お勤め、ご苦労様でございました。すぐに洗い桶をお持ちいたします」
「頼む」
「わたしもたった今、戻ったところにございます。本所相生町の、菩薩先生の家を訪ねておりましたので、遅うなりました」
姑たちに告げ口される前に、自ら告げた。
「朝香笙子の家か」
「はい。お疲れのご様子ですね。お待ちくださいませ」
振り向くと、おのぶが桶を運んで来た。手を入れて確かめると、足を洗うのに、

ちょうどよい湯加減になっている。平左衛門もそう思ったに違いない。
「気持ちがよいのう。熱すぎず、ぬるすぎずで、まことに按配がよい。おのぶはこの湯加減が実に上手いな」
両足を浸して、嘆息するような声を洩らした。
「はい。わたしは下手ですが」
足を洗う留以は、ちくりとひと刺しをせずにいられない。檜物町の千也も、よい湯加減の足湯を用意するのでしょう。料理、洗濯、縫い物と、家事も得意なのでしょうね。どうせ、わたしは剣術しか取り柄のない女。おまけに一年、経っても子ができない。
つらつらと思い浮かべているうちに、また腹がたってきた。
「機嫌が悪いのう」
平左衛門は差し出した手拭いで足を拭いた後、
「まだ、その、終わらぬのか。腹でも痛むのか」
的外れな問いかけを発した。
「は？」
留以はわざと怪訝な顔をしてみせる。

「いや、だから、その」

もごもご口ごもっているうちに、希与と環紀が来た。遅くまで起きていたのは、嫁の悪口を言うため。留以は勝手口の方に足を向ける。おのぶが足を洗う湯を用意して、待っていた。

「民子様は、落ち着かれたようです。玄斎先生が先程まで、付いておられたとか」

「よかった。今宵は遅うなりましたゆえ、お見舞いは明日にいたしましょう」

「はい」

「おのぶは早う寝みなされ。いつも遅くまで働かせてしまい、申し訳なく思うているのです。義父上の屋敷にいた頃は、もう少し、のんびりできたでしょうに」

「いえ、御目付様のお屋敷に仕えるのは骨が折れました。この家の方が、ぬけている分、気持ちが楽でございます」

ここぞとばかりに、希与に負けない悪態を放った。留以は我知らず、吹き出している。すかさず、おのぶが言った。

「そのお顔でおいきなされませ。しかめっ面はいけません」

「そういたしましょう」

多少、気持ちが落ち着いた。皮肉や厭味はご法度、檜物町の千也のことは、機会

を見て話すのが得策と自分に言い聞かせる。
「お手伝いいたします」
自室に来た平左衛門の着替えを手伝い始めた。刀と脇差を受け取って、刀掛けにそれを掛ける。寝間着を用意しながら訊いた。
「巷では、墓から這い出たような、土まみれの亡骸のことが噂になっております。なにゆえ、わたしにはお話しくださらなかったのですか」
「そなたが怖がると思うてな、口にせなんだ次第よ。それに奉行所でも、あまり他言せぬよう、お達しがなされた」
「それでも広まっております」
帯を解き、着物を脱いだ平左衛門の肩に寝間着を掛けた。
「うむ。人の口に戸は立てられぬと言うが、まことよの」
「三体のうちの一体は、朝香先生が診ていた病人だったとも聞きました。他の二体、いえ、二人については、どうだったのでしょうか」
一体、二体では、仏に悪いと思い、言い直した。
「まだわからぬ。朝香笙子は憶えがないと言うている由。鵜呑みにするわけにはいかぬゆえ、内々で調べているところよ。無宿者だったのやもしれぬ」

「調べても、わかりませんか」
「さよう。どこに住んでいたのか、奉公はしていたのか、いくら調べてもつかめぬ。幽霊のような仏じゃ。そうそう、薬種問屋の〈宮本屋〉だがな。お解き放ちになった。毒入りの煎じ薬を売った件に関しては、証があるわけではないゆえ」
ふう、と、大きな吐息をつき、文机の前に座る。
「藤兵衛は明日にも斬首となるやもしれぬ。かえすがえすも残念無念じゃ。わしを名指ししてくれたというに、なにもしてやれぬ」
「そのことでございますが、なにか思い出しませんか。よくだれかと一緒にいたとか。旦那様の他にも、言葉をかわす者がいたとか」
留以はなにげなく口にした。夫の着物の埃を落としながら、畳み始める。平左衛門は唇をへの字にまげ、しばし虚空を睨みつけていたが、
「そういえば」
思いついたように言った。
「犬を連れていた、そうじゃ、いつも犬と歩いていた」
「犬、でございますか」
仕事人同士では、標的のことを『犬』と呼んでいる。複雑な気持ちとともに浮か

んだのは、笙子の言葉だった。
〝そう、自分のことであれば、できなかったでしょうね〟
留以が答えに窮していると、さらに笙子は続けた。
〝人のためだから動けたんです。思いもかけない言葉が出ました。だれかの役に立ちたい、わたしを頼って来る病人を助けたい。その一心ですよ〟
「あ！」
留以は両手を叩いた。
「もしや、藤兵衛はその犬を、豊吉でしたか。彼の者たちに殺められたのではないでしょうか」
「なに？」
平左衛門はちらと目を向けたが、即座に「まさか」と否定する。
「たかが犬ではないか。殺されたからといって、人を殺めるであろうか」
「藤兵衛は可愛がっていたのかもしれません」
「では、犬の仇討ちか。それよりも、わしは常より行われていた自分への暴力が、原因ではないかと思うがの」
「自分のことならば、我慢できたのだと思います」

留以は、笙子の言葉を重ねながら言った。

「ところが、豊吉たちは無抵抗な犬を殺めた。家族のように思うてきた犬です。このとき、藤兵衛の、堪忍袋の緒が切れたのではないでしょうか」

犬のためだから動けた。藤兵衛は思いもかけない行動に出た。仇を討ってやりたい、その一心だった。

「家族、か」

平左衛門は、今ひとつ、しっくりこないようだった。留以は面白くなかったが、懸命にこらえる。他に気持ちを向けた。

「先に膳を召しあがられますか。それとも湯浴みをなされまするか」

「どちらも今宵は要らぬ」

「え」

ぴくりと頬が引き攣った。膳を摂り、湯で温まるのを、なによりの至福としている夫が、両方とも要らぬというその理由はひとつしかない。

愛妾の千也の家で、両方とも済ませてきたのだ。

「さようでございますか」

それでも抑えている。

「疲れた。床をのべてくれぬか。ああ、その前に茶を一杯……」
　このひと言で完全にきれた。
「茶も日本橋檜物町の家で、堪能してきたのではないのですか」
「な、なに？」
　平左衛門はあきらかにたじろいだ。留以は勢いづく。
「若女将の千也さんは、さぞ美しい方なのでございましょう。わたしと違い、女らしゅうて、優しくて、料理上手で裁縫も得意、ついでに言うと閨の技も得意なのではありませんか。まことの日記には、『日々是平安也』ではのうて、千也さんの美点が書き連ねてあるのではありませんか！」
「そ、そなたは、な、なぜ、千也さんのことを、い、いや、まことの日記とはなんじゃ。なんの話じゃ」
「……」
　やはり、と思った。これはもう間違いない。
「実家に帰らせていただきます」
　頭をさげるや、座敷を飛び出していた。
「ま、待て、留以、待て、留以っ、留以ぃ――っ」

雄叫(おたけ)びのような呼びかけが、夜陰を切り裂いたが……。
（切り裂かれたのは、わたしの心でございます）
留以はあふれる涙を拭いながら、裸足(はだし)で走っていた。

第六章　魂風（たまかぜ）

一

切り裂かれた心をしずめるのは――。

「まずは五行（ごぎょう）の構えじゃ」

育ての親である義父――近藤時之助（ときのすけ）との稽古だった。平左衛門のもとを飛び出した後、草履（ぞうり）を持って追いかけて来たおのぶと一緒に、留以は番町（ばんちょう）の実家に戻っている。屋敷内に設けられた武道場は、小野派一刀流の師範代の腕を持つ時之助が、自らの稽古場として作ったものだった。

「天の構えから始めるがよい。諸手（もろて）上段じゃ」

年は五十一、小柄だが、稽古着のうえからでも頑健な身体つきが見て取れる。色

男ではないものの、浅黒い精悍な顔立ちのためか、年よりも若く見られることが多かった。鋭い眼差しを前にすると、留以はいっそう気持ちが引き締まるのを感じた。

「はい」

答えて、竹刀を上段に構えた。両手の場合は諸手上段、片手の場合は片手上段と呼ばれる。時之助は地の構えと呼ばれる中段――青眼に構えていた。右からと留以が思っただけで、義父の竹刀の先から気が迸る。

気の動きを読んでいた。

「雑念が多すぎる」

時之助が言った。

「はい」

わかっております、心を占めているのは、雑念のみ。なさけない話でございます。

声にしなかった答えに、義父が応えた。

「人の構えに変えるがよい」

留以は無言で頷き返すと、ゆっくり竹刀をさげていく。人の構えは、下段の構えのことだが、変化させる間に打ちこんで来るかもしれない。時之助から目を離さないようにして、下段に構え直した刹那、

「ふん！」

時之助が動いた。青眼から打ちこまれた一撃を、留以は右に避ける。と同時に時之助の竹刀が左肩に打ちこまれた。しかし、留以はいち早く飛びさがっている。二人はいったん間合いを取った。

「次は陰の構えじゃ」

告げられて、留以はまた構えを変える。八双とも呼ばれるこの構えは、左足を一歩、踏み出して、体を斜めに開き、右拳は右肩の前あたり、左拳は右胸の前に位置させて竹刀を立てる。

戦場において甲冑と兜を着けた場合には、大上段に振りかぶれないため、この構えは古くから行われた。充分に相手の動作を見ることができ、ただちに次の行動に移れる構えである。

「さて、どちらから行くか」

時之助はわざと言い、青眼に戻した。留以は両腕は八双のまま、右に足を送り始める。誘っていたが、たやすく打ちこんでは来ない。竹刀の先端が留以を追うように動いている。当然、時之助も少しずつ身体をまわしていたが、急に構えを変える。陽の構えと言われる脇構えに変えていた。右足を一歩、引いて体を斜めに開き、

竹刀の先を後方の斜め下に来るようにしたとたん、留以からは竹刀が見えなくなる。

来る！

そう思ったときには、時之助の竹刀が撥ねあがっていた。間一髪、留以は間合いを取る。軽く竹刀の切っ先がふれたが、落とすまでにはいかなかった。気迫のこもった攻めに、雑念が消え、集中力が高まる。

時之助はもう一度、陽の構えを取る。

身体に無駄な力が入っていない。静かな目をしていた。対峙しているだけで、留以の心も静寂に満たされる。

〝そうじゃ。よけいなことを考えてはならぬ〟

今度は時之助の声なき声が聴こえた。

〝見えざるなにかに身をゆだねよ。打ちこもうと考えてはならぬ。そのときすでに、そなたは打たれておるのじゃ〟

すべてを消して、無になる。

邪念を追い出して、時之助の気に気を合わせた。竹刀は今も義父の身体に隠れている。切っ先は見えない、はずだったが、

動いた。

と感じた瞬間、留以は打ちこんでいた。床を滑るようにして伸びた時之助の竹刀に勢いよくあたる。並みの腕前であれば、弾き飛ばされていたかもしれない。それほどに強い打ちこみだったが、流石は時之助。打ちこまれると同時に、さがって間合いを取っている。そのため、手を打たれずに済んでいた。

「今の動きはよかった」

時之助は告げ、三度、陽の構えを取る。竹刀が見えなくなっていた。留以は青眼の構えに変えた。いっそう心気を凝らして次の一撃を読もうとする。

時之助がつつっと前に出た、留以は押されるように一歩、さがる。が、さがるのはいやだと不意に思った。さげた右足で前に踏みこみ、時之助の腹めがけて突きを叩きつける。常人であれば、まともに突かれていただろう。しかし、時之助は消えるかのごとく、左に移動していた。

「う」

目標を失った留以は、危うく前にのめりかけたが、かろうじて踏ん張る。日頃の鍛錬のたまものかもしれない。足腰を鍛えていなければ、膝をついていたかもしれなかった。留以は素早く竹刀を変化させる。左に移動した時之助に、薙ぎ払うような一撃を浴びせかけた。

「む！」

時之助は受け止めたが、珍しく体勢をくずした。すかさず留以は攻めに転じる。打ちこんで、間合いを詰める。苛烈に容赦なく打ちこんだ。時之助は守勢にまわらざるをえない。反撃の隙を狙っているのだろうが、留以の打ちこみが早すぎて間に合わないようだった。

留以は身体が動くにまかせた。それが心地よかった。なにも考えずに、ひたすら竹刀を操る。

とそのとき、守勢一方だった時之助の目つきが変わった。留以は弾け飛ぶように後ろへさがる。青眼の構えに戻した。

「なにゆえ、さがったのじゃ」

時之助が訊いた。

「義父上（ちちうえ）の目つきが変わりましたゆえ」

「読まれたか」

苦笑いして、時之助もまた青眼に構え直した。竹刀の先を軽く触れ合わせる。いざ、と、二戦目に入った。

（真実が知りたい）

振り払ったはずの邪念が、むくむくと湧いてくる。藤兵衛の騒ぎ、人参騒動、土まみれの三つの亡骸、そして、愛妾のもとに通う夫の平左衛門。かなうものなら、この一撃ですべてを白日の下にさらしたい。さらすことができれば……。

「考えてはならぬ」

またもや時之助から叱声がとんだ。

「心を無にするのじゃ」

反撃のつもりなのか、打ちこんで来る。ついさっき感じた殺気まじりのあれは、奥深くしまいこまれていた。もう一度、と、留以は受けながら攻めの機会を狙っている。先刻のあれは、おそらく時之助の奥義が出る瞬間の殺気に違いない。あれを引き出したい。かわせるかどうか、試してみたい。

「はっ」

機を見て、打ちこんだ。上段、中段、下段と、さまざまに変化させ、時之助を追い詰める。ただ奥義が見たかった。話に聞いたことはあるが、実際に立ち合ったことはない。一刀流の遣い手に代々伝えられるという幻の秘技。剣術を学ぶ者として、留以は純粋にそれを求めた。

留以は打ちこみ続ける、時之助は巧みに受ける。

力まかせに打つと、たやすく受け止められた。が、力を抜いて打つと、竹刀のあたりが違うのを感じた。まだまだよけいな力が入っていたのだろう。時之助は立ち合いながら、足りない部分を自覚させるのが巧い。それゆえ、留以は義父との稽古が好きだった。

「つぅっ」

突如、時之助が声をあげた。慌てた留以に、大声で叫んだ。

「そのまま、そのまま」

「はい」

留以は攻めの姿勢をくずさない。上段から打ちこんだ一撃を、中段では水平打ちに変えて、さらにそれを下段では逆袈裟斬りに変化させた。間合いを詰めたり、逆に間合いを取ったりしているのは言うまでもない。足はいっときも止まっていなかった。

雑念が消える、時之助の竹刀だけが見える。

留以は打ちこんだ。じりじりと間合いを詰めて行く。時之助はさがる、押されるようにさがる。一瞬、目つきが変わった。

「それまで！」

だれかの声がひびいた。相手を確かめる暇はない。留以と時之助は息を整えながら、間合いを取る。冷えきった道場の様子を示すように、互いの身体から白煙のようなものが噴き出していた。

礼をして我に返る。

「義兄上」

留以は、織江の夫、近藤左兵太を道場の戸口に見た。

「いや、お二人とも凄まじい気迫でござった。それがしが止めていなければ、義父上が奥義を見せたは必至。剣術小町と謳われた留以殿の美貌に、万が一、傷でもつけた折には、織江が角を生やすのは間違いあるまいと思いまして」

左平太は織江を引き合いに出して、不粋な制止役の言い訳をする。年は織江よりも四つ年上の二十八、婿養子で時之助とは血の繋がりがないにもかかわらず、身体つきや顔立ちがよく似ていた。

「お怨みいたします」

留以は、格子窓に掛けておいた手拭いを取る。

「義父上の奥義を目にする数少ない機会でございましたのに」

「危うく二度も放ちかけた。左兵太の制止がなければ、留以はふためと見られぬ姿

になっていたやもしれぬ」

時之助も汗を拭いている。

「お言葉を返すようですが、返り討ちに遭うていたやもしれませぬ。ふためと見られぬ姿になったのは、義父上の方だったやもしれませぬ」

「これじゃ」

時之助は呆れたような顔をしたが、その実、目は嬉しげに笑っている。気の強い愛娘(まなむすめ)を、この義父はだれよりも愛していた。

「はじめは雑念まじりに見えたが、打ち合ううちに、無の境地に近うなる。不思議な感じを覚えたが、留以。なにを考えていたのじゃ」

「真実(まこと)でございます。それを知りたいと思いました。隠れているものを抉(えぐ)り出し、あばき出すことはできぬかと」

「ふぅむ、把羅剔抉(はらてつけつ)か」

時之助が呟いた。隠れているものをほじくり出して、人の秘密や欠点などをあばきたてる意味を持つ。また隠れた人材や長所、美点を探し出して用いるという意味もあった。

「あれはさながら『剔抉の太刀』じゃ。わしもつい本気になりかけたわ」

「残念でございます」
心からの言葉に、戸口の呼びかけが重なる。
「いつまで、わたくしをひとりにしておくおつもりですか」
織江が微笑していた。
見た者をたいらかな気持ちにさせる美しい笑み。三人は顔を見合わせてから、道場をあとにした。

二

「人参騒動と土まみれの亡骸騒動でございますが、二つの騒動のどちらにも、毒が関わっているような気がしてなりませぬ」
留以は口火を切った。中食を終えて、母屋（おもや）の奥座敷に集まっている。同席しているのは、長女の織江、義父の時之助、婿の左兵太の三人だけだ。おのぶは、台所を手伝っているのだろう。中食の膳をさげてから茶を運んで来たが、よけいな口は出さなかった。黙ってさがる。
「毒か」

「義父上。やはり、土まみれの亡骸も毒を飲まされたのですか。姉上より伺うた話では、顔がどす黒く染まっていたとか。ゆえに、義父上は町人の騒動であるのに、調べ始めたのだと伺いましたが」

「が？」

時之助は鋭く訊き返した。

「町人の騒動ではないと、留以は考えておるのか」

「まだわかりませぬ。されど、人参は普通の作物とは異なる扱いを受けていると聞きました。お上より、野州一国御用作の通達がなされている由。諸藩で作るのを許されているのは、松江藩と会津藩だけであるとも」

ちらりと目を投げる。

「続けるがよい」

言われて、留以は頷いた。

「はい。ちと長くなるのですが、お聞きくださいませ」

本所相生町の朝香笙子、笙子につきまとっている若い侍、この侍は会津藩の抱屋敷に姿を消した。

「会津藩の抱屋敷に消えたとき、もしや、と義父上のことが浮かんだのです。目付

の御役目なのやもしれぬ。此度の騒動には大名だけではのうて、旗本も関わっているのではないか、と」

「悪くない読みじゃ。続けよ」

否定しなかったそれが答えと思い、さらに続けた。

「朝香先生は、わたしの知り合いにござります。民に慕われておりまして、奉行所に留め置かれました折には、大勢が集まりました。みな血走っておりまして、暴動の一歩、手前のような感じでございました」

「その女先生が、二つの騒動に関わりがあるのですか」

織江が問いかけた。三女と違い、他人事ではないという切迫した表情をしている。それが留以は素直に嬉しかった。

「おそらく関わりがあるのではないかと、わたしは思うております。土まみれの亡骸のうちのひとつ、いえ、ひとりは、朝香先生が診ていた病人でした。他の亡骸についてはわかりませんが、いかがでございましょうか」

と、話を時之助に振る。

「まだ詳しいことはわかっておらぬ。なれど、毒を飲まされたのは、おそらく間違いあるまい。問題は、なにゆえ、耳目を集めるような真似をしたのか、というこ

とよ」

「わたしも義父上と同じことが気になります。亡骸が土まみれだったのは、一度、葬られたからだと思いますが、それをだれかがわざわざ掘り出して、人目につくところに置いたのですから」

留以の頭には、会津藩の若侍がちらついていた。恋い焦がれていたと考えるよりも、見張っていたと考えた方がしっくりくる。笙子の後ろにちらつく黒幕を引っ張り出すために、敢えて亡骸を人前にさらした。仇を討ってほしいと訴えるかのように……。

考えながらの言葉になにか感じたのか、

「人目につくところに置いた者に、心あたりでもあるのか」

時之助が訊いた。

「いえ、あの、これはあくまでも、わたしの考えですが」

「かまわぬ。聞かせてくれ」

「どうにもあの若侍が気になってならぬのです。朝香先生はつきまとわれている、つまり、惚れられてしまい、困っているのだ、という様子でございましたが、わたしにはそうは思えませぬ。どちらかが嘘をついているのだろうと思いました次第」

「なるほど、真実が知りたいという裏には、さまざまな理由があったと見ゆる。それゆえ稽古に熱が入ったか」

義父は愉しげに笑った。『剔抉の太刀』と名付けた技は、言うなれば雑念から始まっている。真実を知りたいという留以の想いが、昂じた結果といえた。

「不思議なものでな。悪事の裏には善行が、善行の裏には悪事が隠れていることがあるのじゃ。それと同じく雑念と無の境地もまた表裏一体か。つくづく留以は面白い女子じゃ」

「つくづく義父上は、留以に甘うございますね」

織江は苦笑いしている。

「早う家に戻れと、諭してほしゅうございますのに、剣術の稽古など」

「なに、案ずることはない。じきに平左衛門殿が迎えに来る。なんというても、留以殿、ひと筋じゃ。愛しい奥方様がおらねば、夜も日も明けぬであろうからな」

婿の左兵太が応じた。

「わたしはしばらく戻りませぬ。それはそうと、義父上。会津藩の人参については、調べは進んでいるのですか。〈山崎屋〉に行って千吉さんに色々、訊いたのですが、隠し作りや、人参の種子を盗まれる話が後を絶たないとか。そういった話が、此度

の騒ぎの原因ではないのですか」

踏みこんだ問いかけは、話を変える口実のように感じられたかもしれない。

「そなたは、まあ、朋江の家にまで行ったのですか」

織江が呆れたような顔をした。

「わからないことは、それを商っている者に訊ねるのが一番です。野州一国御用作が一時期、廃止されたせいで、下品の人参が数多く出まわるようになった由。お上のご改革は中途半端でいけません。おかしな通達をするから市場が混乱するのです」

「ははっ、仰せのとおりにございます」

時之助がおどけて、平伏する。一同、どっと沸いた。ひとしきり笑い合った後、おのぶが近藤家の跡継ぎを連れて来る。

「真吾様がお帰りになられました」

「ただいま戻りました」

真吾はわずか五歳だが、目付の惣領らしく、学問所の講師を務める武家に手習いを受けに行っていた。利発そうな目をした姉似の甥っ子が、留以は可愛くてならない。

「さあ、こちらへおいでなされませ。どれほど重くなられましたか」
手を差し伸べて、膝に抱いた。
「わずか十日ほどであるのに、また大きくなられましたね。あとで剣術の稽古をいたしましょう。すわ一大事となったとき、真っ先に飛び出して行くのが真の侍。及ばずながらこの留以が、ご指南させていただきたく思います」
「かたじけない」
真吾の返事に、大人たちは思わず笑みを浮かべていた。
「お返事だけは一人前ですね、真吾。剣術小町と呼ばれた憧れの叔母上を前にして、つい見栄を張ってしまいましたか」
織江に言われて、真吾は頬をふくらませる。
「母上」
「おお、生意気に照れるところも一人前じゃ。真吾は留以殿の訪れを、今か今かと待ち詫びているのでござるよ」
「おやめください、父上」
真吾は留以の膝から立ちあがって、訴えた。
「叔母上が剣術の稽古をするさまは、絵に描いたように美しいと、父上も仰せあそ

ばされるではありませぬか。これは母上には内緒だぞ、などと耳打ちされて」

「まあ、まことでございますか」

織江に睨みつけられてしまい、左兵太は頭を掻いた。

「面目ない。技の切れは言うに及ばず、留以殿の一挙手一投足に、気がつくと見惚れておる始末。いや、真吾のことは言えませぬな」

そこでまた笑いが広がった。

不安のない平らかな暮らし、なにかあったときには、ここに戻ればいい。義父はむろんのこと、姉夫婦も喜んで迎えてくれるだろう。ありがたいと思っているのに……。

「失礼いたします」

用足しに立つふりをして、留以は廊下に出た。いつもの孤独感に襲われていた。ぽつんとひとりだけ取り残されたような寂しさ。織江一家も朋江一家も、留以を拒絶したことはない。それどころか、いつも両手を広げて、受け入れてくれる。今回もよけいな問いかけはしないで、まず招き入れてくれた。

（なぜ、なのか）

自問しつつ、庭に降りた。これは姉や妹の問題ではなく、己自身の問題ではない

のだろうか。子ができない僻みが、壁を作らせているのではないか。

確かに羨ましいと思っていた。

自分と夫の血を分けた小さな存在を、一刻も早くこの手に抱きたいと、心から願っている。だが、このところ留以を悩ませている憂悶が、子のできない悩みなのかどうかは、わからなかった。

「留以」

呼びかけられて、どきりとする。

いつの間にか時之助が後ろに立っていた。

三

「まったく気配を感じませんでした。流石でございますね、義父上」

留以は、寒椿の前で立ち止まる。春ほど華やかではないが、南天や青木の赤い実や、さりげなく植えられた葉牡丹が、色の少ない冬の庭に彩りを添えていた。

風がやんだからだろうか。降り注ぐ陽射しが暖かく身体を包みこんでいる。いや、それは時之助の温かさだったかもしれない。

「申し訳ありませぬ」

さまざまな思いをこめて、詫びた。

「自分でもようわからぬのです。姉上や朋江を見る度、胸の中に魂風（たまかぜ）のような冷たい風が吹きぬけるのです。なかなか子ができませぬゆえ、辛いという気持ちは確かにあるのですが……壁があるように思えてなりませぬ。その壁を作っているのは己自身、わかっているのにどうすることもできませぬ。取り払う術はないでしょうか」

愚かな問いかけといえた。相手が時之助でなければ、こんな愚痴まじりの問いかけは発しなかっただろう。甘えが出ていた。

「胸に魂風の吹く理由（わけ）か」

呟いた後、微妙な間が空いた。重苦しい沈黙に耐えきれず、留以が促そうとしたとき、

「そなたは『見た者』だが、織江と朋江は『見ておらぬ者』じゃ。違いが出るのは致し方あるまい」

時之助は告げた。

「……」

留以は、はっとした。言い当てていると思った。

十年前のあのとき、留以は仏間の隠し部屋で、母が殺される様子をつぶさに見た。しかし、織江と朋江は見ていない。両親に再会したときすでに、仏間は片づけられていたし、最愛の二人は清められて横たわっていた。

見た者と見ておらぬ者、体験者と傍観者。

「そう、かもしれません」

よろめいた留以を、時之助は抱きとめる。

「忘れるのは無理やもしれぬ。されど、織江はそなたの気持ちを察しておる。痛ましげな表情を見せるあれが、わしは憐れでならぬのじゃ」

「姉上が」

そういえばと思った。留以の胸に魂風が吹き抜けるとき、織江はなんとも言えぬ表情で見つめていたではないか。つい先日、こう告げてくれたではないか。

〝わたくしと朋江はいつも隣におりますよ。なにが起ころうとも離れませぬ。いざとなれば、ともに戦う心づもりでおります〟と。

あらためて知った。苦しんでいるのは、自分だけではないことに気づいた。織江は、あの場にいなかった己を責め、苦しむ留以を救えない己をふがいなく思ってい

るに違いない。

「思い至りませんでした。姉上がお気遣いくだされていることは、重々、わかっておりましたのに……心を閉ざしておりました」

知らぬ間に殻に閉じこもっていたのではないだろうか。姉や朋江にこの苦しみをわかってもらおうと、少しでも努めただろうか。

否。

心の裡で声がひびいた。どうせわからないのだと、勝手に決めつけていた。辛い胸の裡を話せばよかったのだ。泣いて、叫んで、苦しいと訴えればよかったのだ。

「姉上にも申し訳ないことをしました」

「なにもできぬが、わしも織江と同じじゃ。いつでもそなたの味方じゃ」

時之助は、留以を抱きしめる腕に力をこめた。

「義父上」

このぬくもりを忘れまい。また魂風が吹いたときには、織江と時之助の温かい心を思い出せばいい。滲んだ一滴の涙を、留以は指先でそっと拭った。

「もう大丈夫でございます」

「そうか。では」

と、時之助はふたたび武道場に足を向けた。姉や甥のいる場所では、話しにくい事柄だったのかもしれない。武道場の片隅に腰を落ち着けたとたん、
「会津藩のことだがの」
先刻の続きのような話が出た。
「留守居役と勘定方の者が、人参を横流ししているという噂が流れておる。言うまでもなかろうが、ご公儀の話ではない。会津藩の留守居役と勘定方の話じゃ」
「その者たちが、毒入りの人参を流したのですか」
「わからぬ。嵩を増すために、なにかを入れたやもしれぬが、毒であるかどうかまでは確かめられぬ。主に動いているのは、留守居役のようだがな。当然のことながら、彼の者と薬種問屋を取り持つ旗本もいる話よ」
各々の大名家には、公儀や商人の仲介役、さらに御城で執り行われる祭事といった雑務の相談役のような、専属とも言うべき旗本が必ず存在する。大名家の騒動は、それだけでは終わらないのが常。上級旗本、しいては公儀内の重臣にまで累が及ぶ可能性もあった。
「先程は明言せなんだが、そなたの言うとおり、わしが動いたのも旗本に関わりある騒動だからじゃ。人参は儲けが大きいからの。みな鵜の目鷹の目で狙うておる

わ」

「捕らえられた薬種問屋〈宮本屋〉がお解き放ちされたのは、もしや、かような方々のお力が働いたからですか」

留以は、一歩、踏みこんだ問いかけを投げる。

「うむ」

時之助は小さく頷いた。

「内々に大目付様のご吟味がなされるはずであったが、それをされては困るお方がおるのであろう。その前に〈宮本屋〉は、お解き放ちと相成った次第よ」

「わたしの知り合いの女先生も、いいように使われているようなのです。貧乏人を助けるために、なんとかして人参を手に入れようと腐心しておられるのですが」

お人好しの我が夫、平左衛門と笙子を重ね合わせずにいられない。八木沢兵庫や同役に、いいように利用されている平左衛門。笙子を見ていると、不安を覚えてしまうのだった。大丈夫だろうか、追い詰められて始末されてしまうのではないか、と。

「朝香笙子か」

ぽつりと出た言葉に、驚いて問い返した。

「ご存じなのですか」
「菩薩先生であろう。近頃、なにかと噂になっておるゆえ、な」
意味ありげな目には、艶聞の含みが感じられた。面白がって言い広める輩がいるのかもしれない。良きにつけ悪しきにつけ、女子は噂の種になる。同じ女としては、そんな話は聞きたくなかった。
「朝香先生は、北町奉行所にずっと留め置かれておりました。思えば、おかしな話だと思うのです。通常は、大番屋に繋がれながら、北町か南町、それぞれの奉行所に呼ばれます。すでに刑が決まった場合は、小伝馬町の牢屋敷ですが、刑が決まらぬ場合も牢屋敷に移されることがございます」
「いずれにしても、奉行所に留め置く例はめったにない」
「はい」
「なるほど」
時之助は腕を組み、ひとつの考えを口にした。
「責め問いされるのを懸念したのやもしれぬな」
拷問された笙子が、自白してはかなわぬと、あらかじめ手を打ったのではないか。義父が同じ考えと知り、留以は確信が高まるのを感じた。

「わたしもそう思いました。だれかが手をまわしたように思えてなりませぬ。薬種問屋がらみでありますため、当番月ではない南町の与力、八木沢様が出張って参りました。南町は薬種問屋を受け持っておりますゆえ、特に不審はございませぬが」

「留以は気になってならぬか」

またもや先んじて言った。おのぶと話すときもそうだが、よけいな説明が要らないのはありがたい。

「気になるというか……わたしは、八木沢様があまり好きではありませぬ」

ぽろりと本音が出る。

「さようか。留以は、あの切れ者の与力がきらいか」

時之助は大声で笑ってから、告げた。

「されど、八木沢兵庫は確かに遣り手じゃ。すでに年番方に任じられておるが、近々、支配役も賜るとか。与力から町奉行に出世した例はないがの。唯一の例になるやもしれぬと、公儀内でも囁かれているほどよ」

「八木沢様が支配役に」

我知らず声が沈んだ。兵庫の、じっとりと湿ったなまあたたかい掌を思い出すだけで不愉快になる。はてしない野心を隠そうともせずに、着々と階段をあがって

いくであろう、犬目与力。平左衛門がやりにくくならねばよいがと、想うのは夫のことだけだった。

「話を戻すが、そなたの言うた会津藩の藩士と思しき者は、会津藩の留守居役の配下やもしれぬ。人参がらみのことで、朝香笙子の知辺をうろついておるのではあるまいか」

「会津藩の、御目付役の配下ということは考えられませぬか」

留以の女子らしからぬ鋭い推測が、義父としては嬉しかったのかもしれない。

「考えられるであろうな」

時之助は目を細めて、続けた。

「姓名がわかれば調べられるが、名無しでは調べようがない。留以が会うた感じでは、いかがじゃ。悪事を働きそうな者か」

「わかりませぬが、二度目に助太刀いたしました折、わたしを置いて、さっさと逃げました」

「ほう、逃げたか。よほど腕を見込まれたのであろう。二度目だったゆえ、安心して逃げたのやもしれぬ」

面白がっていた。女子を助けるべき侍が、置いて逃げるなど言語道断、とは言わ

ないあたりに、時之助の一筋縄ではいかない気質が見え隠れしている。

「二度目のときに感じたのですが、かなりの遣い手のように見えました。本気になれば、わたしの助けなど要らなかったのではないかと思うのですが」

「血を見るのが、いやなのやもしれぬ」

「わたしも好きではありませぬ」

「わしとて同じだが、ふうむ、いささか変わり者の遣い手と見ゆる。調べてみるゆえ、ちと待つがよい」

「はい。話を菩薩先生に戻します。見つかった不審な三つの亡骸のうち、ひとりの女子は朝香先生が診ていた病人だった由。労咳だったと聞きました。他の二人については、いかがでしょうか。義父上のお耳に、噂話などは届いておりますか」

「わしは目付、町方の話には通じておらぬ。耳に入ったのは、やけにどす黒い顔をしていたということぐらいよ。土で汚れていたにもかかわらず、その異状さが目についたようだが……留以。訊く相手を間違えてはならぬぞ」

町人の事柄は、平左衛門の方が詳しいはず。時之助は目顔で告げていた。夫の場合、そうとは限らないのだが、よけいな話はしない。

「肝に銘じておきます。疑うのはいやだったのですが、朝香先生の見張り役に弥太

郎を付けました。人参を餌代わりにされているような気がしてなりませぬ。黒幕に利用されているのでしょう。早く真実をあきらかにして、朝香先生をお救いしたいのです」

笙子は利用されているだけ、いざとなれば残酷に切り捨てられる。次の犠牲者にさせてはならない。早めに手を打ちたかった。

「なにかわかった折には」

そう言いかけた時之助に、

「はい。義父上にもお知らせいたします」

早口で告げた。

「頼む」

「義父上、姉様、どちらにおられますか。武道場でございますか」

不意に母屋の方から朋江の声が聞こえた。

「うるさいのが来た」

そう言いながらも時之助の口もとはほころんでいる。

「だれが考えたのかは知らぬが、姦（かしま）しいという字は、よう考えたものよ。女が三人、集まると、この字を思い浮かべずにはいられぬわ。まことにもって姦しい」

言葉が終わらぬうちに、武道場の戸が開いた。

四

「やはり、こちらだったのですね」
朋江がひょいと顔を覗かせる。幼い頃そのままの悪戯っぽい笑顔だった。とても二歳の子がいる母親には見えない。
「そなたひとりですか」
留以は訊いた。
「ええ。八丁堀のお宅をお訪ねしてみたのですが『嫁女は昨夜、飛び出して行ったきり戻らぬ。野村家が気にいらぬというのであれば、無理に戻らなくてもよい』と、希与様より言伝を頼まれました。やむなく便り屋の役目をお引き受けした次第です」
「さようですか」
平静を装ったが、内心、気が重かった。本気ではないとわかってはいるが、いびり攻撃の度合いが強くなるのは間違いない。

「家に戻るのであれば早い方がよい。遅うなればなるほど、帰りにくうなるは必定。鴛鴦同心の異名が泣くぞ。戻りづらいのであれば、わしが同道するという策もある」

「いつもながら義父上は、姉様に甘いですね。わたしのときは、ろくに話も聞いてくれないではありませんか」

朋江がすねてみせる。むろん言葉だけの軽い訴えだった。

「そなたは祝言をあげた翌日から、実家通いをしておるではないか。亭主殿が寄り合いで遅いと言うては戻り、構うてくれぬと言うては戻る。まともに付き合うてはおられぬわ。亭主殿はようこらえるものよと、わしは常々、感心しておるのじゃ」

「あら、かようなことを仰せになられてもよいのですか。義父上のお好きな塩煎餅を買うて参りましたのに」

「お、それはすまなんだ。硬いやつか」

「むろんでございます」

「塩煎餅を売っているのは、どちらの見世にござりますか。朋江はよう買い求めて来ますよね。わたしも気をつけているのですが、めったに見かけませぬ」

留以の問いかけに、朋江が答えた。

「屋号は憶えておりませぬ。いえ、屋号があるのかもわかりませぬ。うちの見世の近くで、ときどき商う駄菓子屋のような床店にございますよ」

「粳米の粉で作る煎餅じゃ」

「糝粉でございますか」

「さよう。糝粉を練って蒸し、それを餅のように搗いて、薄くのしたものを、型でぬいて乾燥させる。これを焼いて醤油を塗るのじゃ。江戸の名物煎餅は、どうにも甘くてかなわぬ。女子供であればともかくも、わしの口には合わぬわ。煎餅は朋江が買うてくるあれに限る」

この頃、かつて流行った塩煎餅が、また売られるようになっていた。平左衛門も好きなので、今度は朋江に家の分も頼もうと密かに決めた。

「早う家に入りましょう。かような寒い場所で長々と話をするのは、義父上と姉様ぐらいです。塩煎餅でお茶にいたしましょうよ。あ、そうそう、寒鰤もお持ちいたしました。鯛にしようかどうしようか、悩んだのですが、鯛はこちらで用意なさると思い、気を利かせました。この時季はやはり寒鰤だろうと思いまして」

言い置いて、朋江は武道場の戸口から姿を消した。

「鯛？」

留以は立ちあがりながら訊いた。
「祝い事でもあるのですか」
「織江じゃ。来年の夏には、二人目の子の母となる」
時之助も立ちあがって、留以と目を合わせた。長女が懐妊と聞けば、心穏やかではいられない。また殻に閉じ籠もりそうになった。
「羨ましい」
ぽつりと言った。義父の前では正直な娘でいたかった。
「仲が良すぎる夫婦は、子ができにくいとか。わしも結局、子には恵まれなんだ。なれど、盟友だった小十郎の忘れ形見が、今ではわしを支え、慰めてくれる。つくづく縁とは不思議なものよ」
大きな手で肩を叩いた。
「いざとなれば、養子を迎えればよい。血の繋がりよりも、絆じゃ。ひとつの考えにとらわれてはならぬ」
「は、い」
複雑な思いは胸にしまい、時之助の後ろに続いた。少し陽射しが強くなったかもしれない。先刻よりも暖かくなっていた。母屋の手前で待っていた朋江が、小走り

に近づいて来ると、
「わかりましたよ、日本橋檜物町の女子。調べるほどのこともありませんでした」
素早く耳打ちした。母屋に入った義父の様子を、ちらちらと見やっている。戻って来ないか気にかけていた。
「え？」
「与力の八木沢兵庫様に、囲われている女子だそうです。年は二十六、名は千也と聞きました。もとは辰巳芸者だったとか。間違いないと思いますが、いかがでしょうか」
朋江は不安げに顔を覗きこんだ。ほとんど同時に、留以の頭には兵庫の薄ら笑いが浮かんでいる。つるりと顎を撫でる様子まで、まざまざと甦っていた。
「やはり、いいように使われているのですね」
忌々しげな呟きが、妹は理解できなかったに違いない。
「なんの話ですか」
訊き返した。
「八木沢様の企みだと思います。夫に月々の手当を届けさせているのでしょう。そういった様子をだれかが見れば、『これは、もしや、野村平左衛門に愛妾か!?』と

なるやもしれませぬ。夫婦喧嘩が起きるのを期待したように思えなくもありません。わたしと旦那様を仲違いさせようとしたのやもしれませぬ」

「はあ、仲違い」

朋江はきょとんとしている。素直な気質ゆえ、複雑怪奇な犬目与力の企みを看破するのはむずかしいだろう。

「考えすぎではありませんか。だれかが義兄上様のお姿を見かけて、誤解をするという話は、ありうるかもしれませんけれど、八木沢様の企み云々は、とうてい信じられませぬ」

「だれか」

ふとひらめいた。

「向かいの本庄美之助様。もしや、我が家の鬼と小鬼に、要らぬ話を吹きこんだのは」

「本庄様ですか？」

訊いた後、「ああ」と朋江はひとりごちる。

「そういえば、あのお方も、姉様に想いを寄せておられましたね。姉様が剣術小町と呼ばれていたとき、神田の道場の格子窓に、へばりつくようにして見ていた姿を

憶えております。色男でしたから、いやでも目についたのですよ」

この妹は色男に目がない。夫の千吉も昔は女を泣かせたほどの伊達男だった。歌舞伎役者はもちろんのこと、宮地芝居の役者まで、美男の役者に精通している。もしかすると、八木沢兵庫についても憎からず思っているのではあるまいか。

「でも、よくわかりません。八木沢様はもちろんですが、本庄様も、なぜ、希与様たちにかような話をしたのでしょうか」

またもや理解できないという顔になる。嫉みや僻みといった感情とは、無縁のところにいる妹を、留以は呆れ顔で見やった。

「そなたは、ほんに天真爛漫ですねえ。悩むのは、お乳の出ぐらいでしょうか」

「まあ、ひどい。他にも色々ありますよ」

「どんなことですか」

突っこむと、

「それは」

返事に詰まる。

「ほら、ごらんなさい。大店の御新造ぶりが、板についていますね。でもまあ、平らかな暮らしがなによりですよ」

「まあ、ひとつしか違いませんのに」
くすっと笑った。えらそうなことを仰ってと言いたげだった。そう、あの惨劇が起きるまでは、たった一歳の差だった。しかし、今は違う。
見た者と見ておらぬ者。
時之助の言葉がちらついている。織江は感じているが、朋江は気づいていない。それでいいと思っていた。
「家に戻ります」
そわそわと落ち着かない気持ちになっていた。平左衛門が迎えに来ないのは、藤兵衛の刑が執り行われるからではないのか。年老いた囚人の心を、開くことはできるだろうか。
「夕餉の膳を召しあがってからになされませ。あ、そうそう、義兄上様もお呼びすればよいではありませんか」
「暇がないと思います。旦那様は、気にかかることが、おありなのです」
留以も気になっている。
「犬でございます、絶対に」
つい声に出していた。

「今度はなんの話でございますか」
「あ、いえ、こちらのことです。旦那様の杞憂は、わたしの杞憂。どうしても気になりますので帰ります」
半日、離れていただけなのに、長い間、逢っていないような、心細さを覚えていた。今度は朋江が呆れ顔になる。
「今まで怒っていた姉様がなんとやら、ですね。なれど、夕餉だけは召しあがっておいきなされませ。祝いの膳でございますよ、鯛と寒鰤です。姉上のご懐妊を、ともに喜ぶのが姉妹の務めだと思います。それに」
ふたたび囁いた。
「ご懐妊の幸が、姉様にも伝染るやもしれませぬ。待ち望んだお子を授かるやもしれませぬ。祝いの膳だけは、お摂りになられるのが宜しかろうと存じます」
「かような作り事をわたしが信じるとでも思いますか」
そう答えながらも、足は門には向かない。頭では藤兵衛の刑が執行されるのではないかと思い、心では織江の懐妊に揺れる自分がいた。
「早うお茶にいたしましょう。すっかり身体が冷えてしまいました」
朋江の言葉に苦笑して、留以は母屋の勝手口に足を向ける。野良犬に違いない。

だれかに激しく吠えかかっていた。
「あ」
留以は小さな声をあげた。蹴り返されたのか、突如、吠えていたそれが、悲痛な鳴き声へと変化した。
長く尾を引く鳴き声を、藤兵衛の犬もあげたのではないだろうか。
耳の奥底にいつまでも……後味の悪い余韻が残っていた。

五

「そなたの言うたとおりであった」
平左衛門は告げた。
「藤兵衛は一匹の犬を、我が子のように可愛がっていたのじゃ。名はテツ、茶色い犬でな。よう懐(なつ)いておった由(よし)」
どこへ行くにも連れて歩き、少ない食べ物は分かち合って食べた。孤独な老人にとっては、子や孫に等しい存在だったのは確かだろう。ひとりと一匹の間には、たやすく切ることのできない絆が育っていた。

しかし、平らかな暮らしは突然、ぶち壊された。

「この爺さん、駄目だ。いくら痛めつけても、へらへらしてやがる」

豊吉は仲間に目配せする。年老いた主が叩かれたり蹴られたりする間、震えながらも逃げようとしない犬。薄汚いあの犬を、代わりに痛めつけたらどうなるか。

「やめろ」

とたんに藤兵衛は顔色を変えた。

「よせ、やめねえか。テツに手を出すな、わしをやれ、叩け、蹴るがいい。よせ、やめろ、やめてくれぇっ」

老人の力は及ばない。テツは豊吉たちによって、叩き殺された。

「自分のことなら我慢できた」

藤兵衛は言った。

「だがよ、あいつら、なんの罪もねえテツを」

あの鳴き声が耳から離れないのだと言い添えた。石出帯刀が立ち会った折、耳を塞いでいたのは、愛犬の鳴き声を聞きたくなかったから。助けてくれと訴えていたのに、なにもしてやれなかった。年老いた主が暴行されていたときも、逃げずにいた無垢な存在。傷ついた藤兵衛の顔や腕を、労るようになめてくれた——。

「犬の亡骸は、葛西の漁師小屋の前で火葬にしたとか」
平左衛門は話し終えると、留以が差し出した手拭いで涙を拭いた。
「最期の頼みは、テツと一緒に埋めてほしいということであった。小屋を借りていた漁師に、幾ばくかの銭を渡して、預けておいた由。捨てられてしもうたのではないかと思うたがな。取りに行かせたところ、律儀な男で『必ずだれかが取りに来ると思っていた』と言うたそうじゃ」
「類は友を呼ぶという、諺どおりでございますね」
留以は、淹れ替えたばかりの茶を夫の前に置いた。夕餉の膳を早めに切りあげたつもりだったが、番町の屋敷から戻ったのは、五つ（午後八時）の鐘が鳴り終わる頃だった。姑と小姑の厭味は、織江がもたせてくれた祝いの膳の折詰めでごまかしている。平左衛門もその残り物で、遅い夕餉を済ませていた。
「うむ」
口の重い夫に訊ねる。
「『犬を豊吉たちに殺められたのではないのか』とお訊ねになられたとき、藤兵衛の様子はいかがでございましたか」
「号泣した」

ぼそぼそと小声で続けた。犬のことを訊かれた藤兵衛は、一瞬、惚けたように口を開けた。刑が執り行われるまさに寸前だったため、常とは異なる状態だったのは間違いない。

虚脱したような表情の後、

「うわあぁっ、とな」

平左衛門は仕草で示した。雄叫びのような声をあげ、藤兵衛は身を震わせて慟哭した。処刑場の土を握りしめて、魂切るような咆吼を放った。石出帯刀や首斬り役人、下男らもしばし声が出ない。ただ見守るしかなかった。

落ち着くのを待って、平左衛門は確かめる。

〝おまえは無宿者、無縁仏として葬るしかない。テツと申すこの犬も、おまえの横に葬ってやればよいのか〟

骨壺ならぬ骨箱は、藤兵衛が作ったもの。白木の綺麗な箱だった。骨壺どころか、骨箱にさえ収められずに旅立つ主とは、ずいぶん差があるかもしれない。

〝はい〟

藤兵衛は答えた。

〝旦那。鳴き声が消えました〟

耳の奥底にこびりついて消えなかったテツの叫び。それが消えたと何度も言った。晴れやかな顔をしていた。

〝豊吉さんには、申し訳ないことをしました〟

深々と頭をさげて、藤兵衛は処刑場の露と消えたのである。

「そなたのお陰じゃ」

平左衛門は留以に向かって頭をさげる。

「すまぬ」

「なにをなさるのですか。頭をおあげくださいませ」

「いや、わしは『まさか』と思うた。たかが犬を殺められたぐらいで、人を殺すわけがない、犬の仇討ちなどするわけがない、とな。そなたが出て行った後、ひと晩、考えた」

「藤兵衛の想いを理解できたその理由は？」

「言えば、また怒るやもしれぬ」

「怒りませぬ。是非、聞きとうございます」

「わしは」

うつむいて、平左衛門は心を明かした。

「そなたと犬を置き換えてみた」
「まあ」
「お、怒るでない、そう言うたでは……」
笑っているのを見て、ほっとしたように吐息をつく。自分のことなら我慢できる。だが、もし、留以を殴られたり、蹴られたりしたら、穏和な平左衛門もこらえきれずに反撃するかもしれない。
「藤兵衛の、すべては無理じゃが、少なくともテツに対する想いは、わかったような気がするのじゃ」
刑は予定どおり、執行された。死んだ豊吉が戻って来るわけではない。それでもなにかが変わって、藤兵衛は旅立った。
「耳の奥に残っていたテツの鳴き声が消えたのですね」
「そう言うていた」
「ようございました」
留以は、夫の手に手を重ねる。ぬくもりを感じたかった。藤兵衛のように、自分の耳から虎落笛（もがりぶえ）の音が消える日はくるのだろうか。
妻の手が思いのほか冷えているのに気づいたのだろう。

「かように冷たいとは」
平左衛門が両手で包みこんだとき、留以は背後に人の気配を感じた。
「なにか御用でございますか」
環紀が細く開けた障子の隙間から覗きこんでいた。
「姉上」
平左衛門が戸を開ける。責めるような二人の目を感じたに違いない。
「通りかかっただけですよ。睨まなくても、よいではありませんか。斬首が行われた日に、子を作るのは不謹慎ですからね。それにかような子は、ろくなものに育ちませぬゆえ」
言い訳しながら、自室に戻って行った。
「ふう」
二人はどちらからともなく吐息をつき……顔を見合わせる。これまたどちらからともなく、笑っていた。
「今宵は早う寝もうぞ」
「さようでございますね」
答えつつ、留以は耳に意識を集める。裏木戸を開けるかすかな音を、いち早くと

らえていた。
「いかがした」
「だれか来たようです」
その言葉に、雨戸越しの呼びかけが重なる。
「旦那」
「辰蔵じゃ」
小者の名を呟き、平左衛門は雨戸を開けた。抱えている二人のうちのひとり、年嵩の辰蔵が裏庭に屈みこんでいた。
「〈宮本屋〉の主夫婦が、首を括って死んだそうでさ。つい今し方、番屋に知らせが来たとか」
「なに？」
神田駿河町の薬種問屋〈宮本屋〉の主は、お解き放ちになったばかり。留以の胸には、始末されたのではないかという疑いが湧いた。むろん口には出さない。北町奉行所の当番月だが、それは訴えを受け付けるための当番にすぎなかった。
「お支度を」
「うむ」

平左衛門は慣れている。座敷に取って返すや、支度を始めた。留以も手伝いながら、消えない疑問を問いかけに変えた。

「過日、見つかった不審な三つの亡骸ですが、ひとりは女子だった由。前にも伺いましたが、あとの二人はどこのだれなのでございますか」

「いまだに名も在所もわからぬ。亡骸を見た者によると、浪人のようだったという話じゃ。無宿の浪人ではあるまいか」

「ご浪人でございますか」

「いやな騒動が続き、なにかと物騒じゃ。出歩くときは、充分に気をつけよ。まあ、そなたには要らぬ言葉やもしれぬが」

「いえ、嬉しゅうございます」

「参る」

玄関に急ぐ平左衛門を追いかける。玄関先にまわっていた辰蔵が、主を待っていた。魔除けの火打ち石を、おのぶが持って来る。それを打った後、留以は手をついて、夫を送り出した。

「ご無事でお戻りなされますよう」

呟きは聞こえなかったかもしれない。慌ただしく平左衛門と小者は、門の潜り戸

から飛び出して行った。

「こちらへ戻りましてすぐ元締の使いが参りました」

おのぶが姑たちの座敷を気にしながら告げる。

「すでに幕はあがっているそうです。元締の筋書きに従いまして、岡田様はとうに仕掛けを始めておられるとか。お真佐さんが留以様に『あること』を確かめてほしいと言うて参りました」

「あること」

お真佐が奉公しているのは、吉原の遊女屋。売られて来た女たちが、苦しみと悲嘆の沼であがく場所だ。ほとんどは親の借金のカタに、泣くなく苦界に陥(お)とされた者ばかり。留以はひとりの娘の顔を思い浮かべずにいられない。

「それは、もしや、母親を労咳で失った佐知についてのことですか」

当て推量だったが、おのぶは小さく息を呑んだ。

「流石(さすが)は留以様。仰せのとおりにございます。肩入れしておいでのお方は、どうやら浅草に別邸をお持ちのようですよ。亭主が調べて参りました」

「元締には」

「もちろんお知らせいたしました。さて、此度の仕事の題名はどうするかと……」

突然、女の悲鳴がひびいた。少し離れた場所からだったが、走っているのだろう。
絶叫が近づいて来た。
「小太刀を」
「はい」
おのぶが小太刀を取りに走る。
留以は戻るのを待たずに、裸足で飛び出していた。

第七章　剔抉（てつけつ）の太刀（たち）

一

闇に沈んだ八丁堀が、青白い月明かりに照らし出されている。時折、月が雲に隠れると、周囲は真の暗闇に覆われた。流れる雲の速さが、天気の変わり目を示している。

「助けてっ、助けてください！」

こちらに駆けて来た女の手を、留以は握りしめた。月が隠れてしまったため、相手の顔は見えない。素早く背中に追いやって、追いかけて来た幾つかの人影を睨みつける。

「手出しはさせませぬ」

「留以様」
すぐ後ろで聞こえた声に驚いた。
「朝香先生でしたか」
「はい。病人を診(み)た帰りなのです。家に戻ろうとしたのですが、この者たちに追いかけられました。八丁堀の近くでしたので、とにかく留以様の家に逃げこもうと」
「ここはわたしにおまかせください」
さまざまな思いは胸の奥に秘める。一歩、前に出たとき、四つの人影がちょうど月明かりに浮かんだ。そのうちのひとりは、会津藩の抱屋敷に消えた若侍。
「また貴方ですか。よくよくご縁があるようですね。もっとも此度は、敵味方のようですけれど」
「それがし、剣術(やっとう)小町と刃を交えるのは、本意ではござらぬ。その女子をこちらにお渡しいただけぬか」
「駆け込みされたも同然の相手を、言われるまま渡せるわけがありませぬ。吟味の筋であるならば、それ相応の手順を踏むのが宜しかろうと存じます」
「半四郎(はんしろう)」
前に出ようとした仲間を、若侍が手で制した。

「さがってくれ。手は出すな」
履き物を脱ぎ捨てる間に、留以もおのぶから小太刀を受け取っている。襷掛けをするのを忘れない。小太刀をぬいた留以に、若侍は初めて名乗った。
「戸田半四郎でござる」
「会津藩の御留守居役でございますか。それとも御目付様のご配下でございますか」
答えを聞けば、ある程度のところまではわかる。目付の配下であれば、付き添い役を訴えた後、朝香笙子の吟味を許さないでもなかったが、
「ゆえあって、答えられぬ」
半四郎は頑なだった。鯉口を切って、ゆっくり刀をぬいた。
「では」
参ります。
留以は、青眼に構えてまずは出方を見る。仲間たちは言われたとおり、後ろにさがって見守っていた。まともな対応に、もしかすると、目付の配下かもしれないという気持ちが湧いた。
〝心気を凝らせ〟

不意に時之助の声なき声が聞こえた。心で応えると、留以は一歩、踏みこんだ。誘っただけだと気づいたのか、半四郎は動かない。脇構えになって、しっかと目を見据えている。留以は見返しながら、右に足を送り始めた。義父との稽古を頭に広げている。

剔抉（てっけつ）の太刀。

時之助が名づけた技を、試してみようと決めていた。無の境地になって、攻める。真剣ではたせるだろうか。

「おのぶ」

低く呼びかけた。

「はい」

「朝香先生を家へ」

「畏まりました」

返事を聞くや、躍（おど）りかかった。体重を乗せた一撃を、半四郎は刀を真横に構えて受け止める。留以はすぐにさがって、横にまわりこもうとした。が、半四郎は左足を軸足にして、身体を正面に持って来る。まわりながらであるため、隙ができそうなものだが、攻めこむ隙は、ない。

〝無になるのじゃ〟

ふたたび時之助の助言がひびいた。まだ集中できていなかった。留以は眼前の男にだけ心を向ける。何流かはわからないが、稽古どおりにやればできるはず。斬るための剣ではなく、己と相手を救う剣だ。

留以は八双に構えようとした。

が、左足を一歩、踏み出した瞬間、半四郎の刀が撥ねあがっていた。留以は小太刀で上から押さえつける。と同時にいったん間合いを取る、ように見せかけて攻めに出た。深く踏みこんで左から逆袈裟に斬りあげる。

「はっ」

どちらが放った気合いだったのか。半四郎は弾くように留以の一撃をかわしていた。考えている暇はない。今度は右から逆袈裟に斬りあげる。またもや弾き返された。返されたその反動を利用するように、もう一度、右から斬りあげる。

(止められる)

半四郎の刃の気配を感じた刹那、小太刀をくるりと反転させた。腰を浅く沈めたまま、至近距離で真っ向斬りを叩きつけたのである。

「半四郎!?」

叫ぶような呼びかけが起きた。が、半四郎は寸前で右に避けていた。軸足の左足は、同じ位置にまだある。微動もしていなかった。

留以はさがって、いったん間合いを取る。半四郎は自ら攻めることはない。徹底して受けにまわっていた。留以は二度の襲撃騒ぎを思い出している。そういえば、あのときも賊を殺めてはいなかった。

半四郎の剣は、柳のごとき受けの剣。

（攻めさせます）

真実を知るために、留以は『剔抉の太刀』を用いる。半四郎が脇構えに戻したのを見て、留以も脇構えを取った。双方、身体に隠れて刃が見えなくなる。しかし、打ちこもうとすれば、身体のどこかに力が入る。かつまた打ちこむと考えただけで、半四郎に殺気をとらえられる。留以はもう一度、静かに足を送り始めた。

己を超えたなにかに身をゆだねる。そのとき初めて、小太刀は留以の化身となる。斜め下に流していた小太刀が、弧を描くように動いた。振り降ろした一撃を、半四郎は頭上で受け止める。

胸元が、がらあきになった。

「はぁっ」

留以の小太刀が、雷光のようにひらめいた。半四郎の刀が頭上で小太刀を受け止めたと見るや、飛びさがって、突きを放ったのである。心ノ臓めがけて伸びた鋭い一撃、避けられるはずがない。だが、半四郎は蝦蟇のように低く這いつくばって、かわした。

「……」

一瞬、呆気にとられていた。

なんという、やわらかい身体なのか。

地面に張りつくように沈んだ身体は、両足がこれ以上できないほどに広げられている。留以はさがって、足を斬りつけた。が、いち早く半四郎の刀がそれを食い止めていた。むろんすでに体勢を立て直している。次は上、右、左、下からと、小太刀を変化させたが、ことごとく弾き返された。

「くっ」

留以は、下唇を噛みしめる。悪い癖が出ていた。間合いを取って、下段に構え直した。誘うように右に動いてみる。半四郎は左足を軸足にして、油断なく動きを追っている。思いきって一歩、踏みこんだ。足を狙った一撃は、勢いよく撥ねあげられた。

（心と小太刀が一（ひとつ）になっていない）

焦りを覚えている。さながら半四郎は、不動岩のようだった。どこから攻めても、すかさず受けて、弾き返される。両眼は穏やかな春海（はるのうみ）のごとき静けさをたたえていた。心と刀が一つになっているのは、留以ではない、半四郎の方だった。

（それならば）

半四郎に心を合わせればいい。留以は深く息を吸い、吐いた。半四郎の目に目を合わせ、青眼の構えから突きを放った。ほとんど力は入れていない。

若侍は軽く受けた。

殺気がないため、威嚇の一撃と思ったかもしれない。次の瞬間、留以は小太刀の先を軽くまわした。なにも考えていなかった、ごく自然に小太刀が動いた。男の心に合わせて、女は心をさらけ出した。

絡め取られた半四郎の刀が手から離れる。

「おう」

仲間のひとりが、呻くような声を洩らした。地面に落ちる前に、半四郎は刀の柄を握りしめている。だが、大きく体勢が乱れたのを留以は見のがさない。すかさず半四郎の頭上に小太刀を振り降ろした。

鈍い刃鳴りの音がひびきわたる。

半四郎は片膝をついた姿勢で、小太刀を受け止めていた。留以は上、半四郎は下という形で刃越しに睨み合う。留以はさらに押そうとしたが、気合いとともに撥ね返された。力の差であろう。数歩、さがったものの、すぐに脇構えに戻した。半四郎もまた体勢を立て直している。

何度目かの睨み合いになったとき、

「そのほうら、なにをしておる」

誰何（すいか）の声が轟（とどろ）いた。憶えのある声だった。向かいの家の本庄美之助が、小者ともども駆け寄って来る。半四郎たちは、またたきする間に走り去っていた。

「留以殿」

美之助はさして驚いた様子はない。

「何者でござるか」

闇の彼方を顎で指した。

「わかりませぬ」

留以は虚実ないまぜの答えを返した。あれこれ問いかけられるのは面倒と思い、話を変える。

「〈宮本屋〉の主夫婦に異状があった由。夫は先程、参りましたが、本庄様はこれからでございますか」

競争心をくすぐれば、男は敵対心をあらわにする。

「いや、ちと他に調べることがあったのでござる。そのうえで出張ることにした次第。無意味に早く動けばいいというものではありませぬゆえ」

「彼の者たちにつきましては、わたしの答えは同じでございます。なにかご不審がございましたときには、またお訊ねいただければと思います」

「承りました。それでは」

美之助は頭をさげ、小者と一緒に闇の番人となる。留以は、戸田半四郎が立ち続けていた場所に跪いていた。

浅く窪みが生じている。

半四郎が軸足にしていた左足を置いていた場所だ。ほんのわずかな間であるのに、へこんでいるのは驚くしかない。最後に膝をついたとはいえ、左足がここから離れることはなかった。さらに半四郎は一度として、攻めの太刀を使わなかった。受けに受けて、留以を傷つけることを避けた。

仁義礼智信を守った五常の剣。

「答えが見えました」
留以は呟いた。
「『剔抉（てっけつ）の太刀』が」
真実を教えてくれた……。
「そこにいるのは、だれですか」
視線を感じて、留以は身構える。元締――源内の使いの少年が、しのびやかに迫って来た。女のような美しい顔が、月の光を受けて、妖しく輝いている。
「幕開けです」
擦れ違いざま、告げた。源内が書いた脚本（ほん）を、留以の手に残していく。
それは仕事が始まる合図。
舞台の幕は、すでにあがっていた。

二

翌日の午前。
「具合はいかがですか」

朝香笙子は、亀戸町の裏店を訪れていた。本所横十間川の東、天神橋通りを挟んで南北両側にある町だ。東に広がる区域の大部分は田畑が占めている。繁華な両国橋の広小路から見ると、いかにもうら寂しい江戸の東の外れの田舎町だった。

「昨夜の雨のせいか、咳が止まりませぬ。それに魂風、さよう。北西の冷たい風が、ことさらこたえ申した」

家主の浪人は四畳半の座敷に横たわっている。擦り切れた畳にのべられているのは煎餅布団、掛けているのは紙製の掻巻。一畳ほどの土間に、鍋がひとつある以外、家具らしきものはいっさいない。利発そうな十歳前後の女児は娘だろう。目鼻立ちのはっきりした顔が、父親似に見えた。

「そうですか」

笙子は、ちらりと留以を振り返る。手伝い役を買って出たのだが、役目はないと言いたげだった。

「水を汲んで参ります。早く人参を煎じた方が、宜しいのではないかと思いますので」

「水は先程、汲んで参りました」

娘が答えた。はきはきした口調は、印象どおりの聡明さを感じさせる。

「父上は、隠れてお酒を飲むのです。よくないからと止めるのですが、わたしの目を盗んで、居酒屋に行ってしまいます。朝香先生からも、よう言うてやってください」

続けて出た言葉に、大人たちは苦笑せざるをえなかった。

「困ったものですね。だから咳がひどくなったのでしょう。雨や風のせいにしてはいけませんよ」

笙子は襷掛けをして、家にあがる。歩く度、畳がたわみ、抜け落ちそうだった。腐りかけているのかもしれない。

「お粥だけでも作りましょうか」

留以の問いかけに、娘はきっぱり首を振る。

「大丈夫です。父上のお世話は、わたしがいたしますので」

「では、朝香先生にお茶をお淹れしましょう」

二度目の言葉には口ごもる。

「お茶は」

うつむいた幼い表情には、貧しさへの恥が表れていた。茶葉がないことを口にできない辛さ。それを誇りと呼ぶか、見栄と呼ぶかは、人それぞれ。留以は「大丈夫

です」と風呂敷を広げた。
「これは茶葉、これは水飴、これは梅干ですよ。家にあったものですが、お見舞いがてらお持ちいたしました。袖振り合うも多生の縁、ご挨拶がてらと思いまして」
「父上」
娘は眸を輝かせて父を見やったが、
「それがしは物乞いではござらぬ」
咳きこみながら言った。不精髭は伸び放題、寝間着もおそらく一枚しかないのだろう、薄汚れていた。
「つまらぬ意地は、犬にでもくれてやりなさい」
笙子は自ら持参した薬箱を開ける。二人の弟子は、いつものように相生町の自宅で病人の治療にあたっていた。
「留以様。これを煎じていただけますか」
と、薬箱から煎じ薬を出した。
「先生」
浪人は苦しげな息の下から訴える。
「薬代がござらぬ。今までの代金も払えませぬ。これ以上、おいでいただいても、

支払うのは……」

咳きこんで続けられない。笙子は背中を撫でながら、やさしく言い聞かせた。

「よけいなことを考えてはなりません。治るものも治らなくなりますよ。幸いにも娘さんは元気な様子。この間も言いましたが、奉公に出せばよいではありませんか」

まさに菩薩のような表情で続ける。

「何軒かの大店に、伝手(つて)があります。賄(まかな)いの手伝い程度ですが、多少なりとも稼げましょう。薬代には及ばなくとも、現金が入るのはなによりだと思うのですが」

「確かに、お、仰るとおりだと」

また咳が出て、話が途切れる。

「土瓶を洗って参ります」

留以は渡された煎じ薬の包みを持ち、薬用の土瓶を取りあげた。手を伸ばした娘に、小さく首を振って、外に出る。凍りつくような北西風が、裏店の路地にも吹いていた。

あまりにも寒いためか、井戸にはだれもいない。留以は水を汲みあげて、土瓶を綺麗に洗った。懐から手拭いを出すときに、隠し持っていた煎じ薬の包みと、笙子

が渡した煎じ薬の包みをすり替える。持参したのは、本庄民子が服用している人参だった。

〝〈宮本屋〉さんが斬首となれば、もう人参は都合してもらえません〟

留以は、笙子の家でかわした会話を思い出している。あのとき、まだ〈宮本屋〉の刑は決まっていなかったのに、女医者はなかば断じていた。

（それでも）

留以は最後の望みに縋ろうとする。

（この煎じ薬に、毒が混じっていなければ）

警戒しているに違いない。

「留以様」

笙子が顔を覗かせた。留以は立ちあがって、浪人の家に戻る。持参した煎じ薬を、座敷に戻った笙子の目の前で土瓶に入れた。柄杓（ひしゃく）で水を注ぎ、竈（かまど）に載せる。

「土瓶が汚れていましたか」

菩薩先生の目が、不安げに揺れていた。

「いえ、汚れがついているように見えたのですが違いました。今まで煎じた人参の色でしょう。毒騒ぎが起きておりますので、用心のうえにも用心をと思いまして」

「そうですね」
答えて、笙子は病人の枕元に座り直した。
「前にも訊いたと思いますが、江戸にご親戚などはおられぬのですか」
脈を取りながらのやりとりになる。
「身寄りはおらぬ。妻は同じ病で二年前に命を落とし申した。それがしも、あとどれぐらい保つか」
「弱気は禁物です。前向きに考えねば駄目ですよ。話を戻しますが、いかがでしょうか。娘さんをご奉公に出されては」
「なれど、娘はまだ九つ。不憫でなりませぬ」
「わたしのことでしたら、父上。お気遣いは無用です」
娘は健気に申し出る。座敷にあがって、きちんと正座した。
「下働きでもなんでもいたします。前にも聞いた憶えがありますが、朝香先生が後見役になってくださるとか」
「ええ。喜んでなりますよ」
「それでは明日からでも、宜しくお願いいたします」
「待て、わしは……」

「親孝行がしたいのです」
娘は、父がはねのけた紙の掻巻を掛け直した。
「母上のときは、まだ小さくて浅蜊売りぐらいしかできませんでしたが、もう働ける年です。でも、後見役がいなければ駄目なのです。口入れ屋ではろくに話もしてもらえませんでした」
「朝香先生が後見役であれば、これ以上、心強いことはありません。なにを案じられているのでしょうか」
留以も口添えする。笙子が満足げに微笑んだ。
「ご奉公先は、本町一丁目の薬種問屋なのです。これはまだ定かではないのですが、人参も少し安くしていただけるかもしれません。あ、もちろん上品のものではありませんが、今よりも質のよい人参をまわしていただけると思いますよ」
「人参を？　本当ですか？」
娘は怖いほど真剣な眼差しになる。
「偽りは申しません。もうひとつ、その薬種問屋は、お上の御用商人になりたいようで、色々と手をつくしている様子。まだはっきりしないのですが、小石川の養生所に入れるかもしれません」

「養生所に」
娘はもう涙目になっていた。
「父上。養生所に入れていただければ」
命が助かるかもしれない。母は諦めざるをえなかった。だからこそ、父だけはとせつに思う。なんとしてでも助かってもらいたい。
「今の話は、まことでござるか」
確かめる表情や声に力が湧いていた。上半身を起こした父に、娘は掻巻を掛けてやる。父子の深い絆が見て取れた。
「何度でも申しましょう。まことです」
笙子は胸を張って、申しわたした。
「小石川の養生所は、すぐにとはいかぬと思いますが、それまでの間、賄(まかな)い付きの寮をお世話できます。これはわたしの考えに賛同してくだすった商人の方々の、お力をお借りして営んでいる寮なのですが」
言葉を切り、四畳半の家を見まわした。
「失礼ながら、こちらよりはましなのではないかと存じます」
「その寮に入れば、小石川の養生所に入れるのですか」

と、留以は訊ねる。

「さようでございます。養生所に入るための、順番待ちの場とお考えください。お金はいっさいかかりません。薬はもちろんのこと、寮として使わせていただいている家の賃料も、台所の賄いや衣服にかかるお金も、すべて金主たちの懐から出ますゆえ」

「あ、ありがとうございます！」

娘は泣きながら頭をさげた。感極まって、突っ伏してしまう。金や薬の心配がない暮らし、まさに夢のような暮らしだった。

「養生所に入りたいのであれば、この証文に記してください」

笙子は懐から一枚の紙を出して、父親に渡した。

「これは？」

「これも前にお話ししたと思うのですが、養生所に入るためには、色々と手続きがいるのです。そのために必要な証文なのですよ」

「さようでござるか。では、今宵、よく目を通したうえで記すことにいたしまする」

慎重な態度に、ぴくりと笙子の眉が動いた。が、特に言葉は発しない。菩薩のよ

うな笑みをたたえている。
「わかりました。また参ります。さあさあ、横になってください。薬が出来あがったら、ちゃんと飲んでくださいね」
「先生。お酒は飲まないようにと」
念を押した娘に、また苦笑した。
「そう、お酒はいけません」
「わかりましたか、父上」
「うむ」
父は紙の掻巻を被って、寝たふりをする。明日への希望が満ちあふれた会話は、笑いとともに終わりを告げた。まだ他にもまわらなければならない。
「朝香先生。参りましょう」
留以に促されて、笙子は腰をあげた。

三

三日後の夜。

朝香笙子は、浅草の別邸に来ていた。離れに茶室もしつらえられた贅沢な家は、かつて〈宮本屋〉の持ち物だった屋敷である。名義を書き換えさせるのに女の武器を使ったが、無駄ではなかったと思っていた。

「冬は寒いですが、夏は、大川からの風が涼を運んでくれると聞きました。花火もよう見えるでしょう。今からそれが楽しみなのですよ」

笙子は上機嫌で、客人たちに酒を注いでまわっている。炬燵に足を突っこみ、猫のようにくつろいでいるのは、会津藩の留守居役、本町一丁目の薬種問屋〈白泉堂〉の主、そして、二人を繋ぐ役目を担った旗本の三人だった。それぞれの傍らに手炙りと漆塗りの膳が置かれている。

「朝香先生には、かないませぬな」

留守居役が言った。

「情をかわした〈宮本屋〉を、いともたやすく切り捨てるとは、いやはや、おそろしい女子でござる。辻斬りの仕業に見せかけず、夫婦心中という自死を装ったのもまた見事なお手並み。辻斬りの場合、役人の調べが入りますからな。つくづく敵にまわしたくないお方と思うた次第でござる」

「仕方ないではありませんか。病人のための『特別な煎じ薬』を用立てるのはもう

いやだと、幼子のように駄々をこねておりましたからね。怖じ気づいたのでしょうが、ほんになさけない。途中でやめると言うのであれば、はじめからやらねばよいのです」

病人のための特別な煎じ薬が、毒入りの煎じ薬であるのは言うまでもない。

「然り。こうなったら一蓮托生、ともに地獄へ堕ちましょうぞ」

気炎をあげた旗本に、薬種問屋の主が続いた。

「おてやわらかにお願いしますよ、朝香先生」

酌をしにまわった笙子の尻にふれる。一瞬、ぐっと指を陰部に食いこませるような、淫靡なさわり方だった。公私にわたって〈宮本屋〉の後釜に座りたいと露骨に示している。先刻からちらちらと、意味ありげな眼差しを向けていた。

「こちらこそ、おてやわらかに」

さりげなく手を払いのけ、自分の席に戻る。

「亀戸町に、条件を満たした浪人父子がいるのですが、なかなか証文を書こうとしません。一日延ばしにされております」

膳から小鉢を取って、和え物を口に運んだ。〈平清〉か〈八百善〉あたりだろうか。料理人が台所で腕をふるっている。

「病人を探してくださいまし」
笙子は言った。
「ここにきて、ぐんと数が減りました。小判を手に入れるには、あらたな客が必要です。おわかりでございますね」
ひとり、ひとりに目をあてる。
「条件が厳しすぎるのではないですか」
薬種問屋の反論に、旗本が続いた。
「さよう。労咳か膈といった死病に罹っておる者、明日の糧にも困っている貧乏人、江戸には身寄りがいない者、十歳前後の子供がいる者、とまあ、よくも考えついたものよ。すべての条件を満たす親子は、そうそうおらぬ」
「なれど、子供は思うていたよりずっと高値で売れるので驚いたわ。男は陰間茶屋、女は遊女屋。上玉であれば、百両以上の値がつくことも珍しくない。四人で分けても、けっこうな稼ぎになるではないか」
留守居役は満足げだった。会津藩の勘定方と手を組み、下品の人参を横流しして、相当な儲けをあげている。むろん笙子もおこぼれに与っていたが、子供を売る危ない役目を担っているのは自分のみ。それがいささか気に入らない。

「めぼしをつけた子供も、あと数人しかおりません。だからこそ、新しい病人が要ると言うているのです」

つい声が大きくなっていた。

「朝香先生。壁に耳ありでございますよ」

薬種問屋の主に窘められる。

「わかっております」

廊下に気配がないか、閉められた襖を見る。鳳凰が描かれた襖だけでも、相当、値が張るだろう。〈宮本屋〉の成り上がりぶりを示すような造りの屋敷だった。

「父か母、どちらかが死病に取り憑かれていれば、薬代がかさむのは必定。そこで菩薩先生のご登場となる。処方するのは、毒を混ぜた煎じ薬でございますゆえ、病人はすぐにお迎えがくるわけですね」

ふたたび主が、意味ありげな視線を投げた。わざと痛いところを突き、恩着せがましく助力を申し出るつもりに違いない。

「苦しむ時を短くしてやっているのです。加えて、行き場のない子らにも、生計がたつようにしております。感謝されて然るべき状況ではないかと存じます」

「開きなおりましたか。小石川の養生所は真っ赤な嘘、芥溜に送りこめば、あと

は毒入りの煎じ薬さえ要らなくなる。菩薩先生に助けてもらえると思い、病人が握りしめたその手を文字通り、切り捨てるとは、いやはや、かないませんね」

芥溜とは、千住近くの百姓家にもうけた病人の仮の住まいのことだ。造語そのままの掃きだめであり、送りこまれた者は、せいぜい三日でこの世と別れを告げる。亡骸を埋める場所に困るほど酷い有様だった。

「なにか仰りたいことでも？」

鋭く言った。薬種問屋のお力添えが要るのです、などと尻がむずがゆくなるようなことを言われたいのかもしれない。しかし、望む答えを返すつもりはなかった。だれが真の頭なのか、あらためて示しておく必要がある。

笙子の冷たい眼差しにおそれをなしたのか、

「いえ、なんでもありません。喜んで特別な煎じ薬をご用立ていたしますよ」

主は気弱げに目を逸らした。皮肉屋ではあるが、たいした男ではないと判断する。この時点で下僕になったも同然だった。

「お上は、犠牲者が出ないと動きません。それに野州一国御用作を廃止したり、また復活させたりしたのも、お上ではありませんか。市場が混乱して粗悪な人参が出まわるようになったのは、お上のせいです」

躊躇いなく言い切った後、

「さきほども申しましたが、わたくしは助かる命を助けたいのです。また不治の病にかかった病人の、苦しみを終わらせてやるのも医者の務めと思うております。亡くなった者たちには気の毒ですが、そのお陰で多少なりとも、貧乏人に目が向いたのではありませんか。お仲間である方々に、あれこれ言われるのは辛うございます」

かすれた声で続けた。泣くつもりはなかったのに、じわりと涙が滲んだ。まあまあ、と、留守居役が割って入る。注ぎ役になって、杯に注いでまわった。

「それはそうと」

旗本はその酒を飲みくだして、話を変える。

「会津藩の目付配下、戸田半四郎は、ちと厄介でござるな。埋めた亡骸をわざわざ掘り返して、道端や仙台堀の近くに置くとは……われらの動きを阻まんと、仲間の若党にも助力を頼んだふしがあり申す。過日は危うく朝香先生が、捕らわれそうになった由」

「ふむ。先生の誘いにも応じなんだ堅物よ。わしなどは、会うたその日に陥とされてしもうたがの」

留守居役の、自虐めいた虚しい笑いが、座をよけい白けさせた。笙子はむろんおもしろくない。料理屋の奥座敷で半四郎に、すげなく拒絶されたあの屈辱感が甦ってくる。誘いに応じなければ、半四郎の明日は決まったも同然だ。

「早急に始末するべきであろうと存じます」

怒りで頬が朱に染まった。

「亡骸をかように扱うとは、まさに鬼畜の所業。騒ぎを大きくして、内心、ほくそえんでいるに違いありません。これ見よがしなやり方が鼻につきます」

自分のことを棚にあげてと、多少、思わなくもなかったが、動きをつかまれていることに、恐怖に近い不安を感じていた。早く、早くと、策はないのに気ばかり急いている。

「戸田半四郎は、一刀流溝口派の遣い手。我が藩の若手の中では、抜きん出た才覚を持つ男じゃ。討つのは口で言うほど楽ではない」

留守居役は遠慮がちに意見を述べた。

「おまけに、まずい男での。付け届けや賄賂もいっさい受けつけぬ。やりにくいことこのうえない相手よ」

「まずい、とは、どういう意味ですか」

「真面目、あるいはつつましいといった意味じゃ。絵に描いたような会津武士よ。『ならぬことはならぬ』という会津魂を持っておる」

どこか羨ましげなひびきがあった。二度と戻れぬ境地、悪事に手を染めた者にとっては、眩しいような存在。笙子は苛立ちがつのるのを覚えた。

「では、なにもしないのですか。このままでは、会津藩の御目付様が動くのは間違いありません。早く手を打たないと、四人ともこれですよ」

首を斬る仕草をして、頼りない男たちを見まわした。

「腕のたつ刺客を雇うしかありませんね」

薬種問屋の主が平凡な打開策を提示する。半四郎を二度、襲撃させたのは、笙子と旗本の案だった。が、寄せ集めの浪人では、とうてい太刀打ちできないことを、いやというほど思い知らされている。

「あの女剣客はいかがでござる」

旗本が身を乗り出して、笙子の杯に酒を注いだ。

「野村留以でござったか。相手が女ならば、戸田半四郎も油断するやもしれませぬ。いったい、どういう素性の女なのでござるか」

「定町廻り同心のご妻女ですよ」

「ほう」
「なんと」
男たちは顔を見合わせる。
「おわかりでございましょう。確かに腕はたちますが、戸田半四郎に負けず劣らずの『まてい女子』。頼めば、よけい厄介なことになります。なにか考えはないのですか。雁首揃えて、ろくな話が出ぬのでは、集まった意味がありません」
「かように仰せになられましても、そうそう妙案が出るわけもなし。万が一、奉行所に捕らえられたときには、知らぬ存ぜぬでとおすよりほかは……」
主の呟きで、はっとした。
「奉行所」
笙子の脳裏に浮かんだのは、そう、色男の与力、八木沢兵庫だった。過日、捕らえられたとき、北町の当番月であるにもかかわらず、なぜか南町の与力がすぐに駆けつけて来た。その折、笙子は兵庫に「どうぞよしなに」と素早く五両の金子を渡している。大番屋や小伝馬町の牢屋敷送りを免れたのは、兵庫の手配りによるものだろう。
使える男だった。

四

「南町奉行所の与力、八木沢様を抱きこむという策はいかがでしょうか」
一同を見まわして、告げた。
「〈白泉堂〉さんとの間を、取り持ってくだすったのも八木沢様です。黄金色のご褒美が大好きなのでしょう。きっと名案を出してくださいますよ」
笙子は兵庫に、ここに集まっている仲間と同じ匂いをとらえている。どれほど小判を得ても、もっと、もっとと欲する貪愛の持ち主だ。満足するということがない。なにかを得ると、すぐ次の目標ができる。きりがなかったが、それだけに扱いやすいという面もあった。
「八木沢様、でございますか」
薬種問屋〈白泉堂〉の主は、気乗りしない様子だった。
「てまえはどうもあのお方が苦手でございます。なにを考えておられるのか、わからないところがおありになりますので」
「弱みをつかめばよいのです。ご妻女は？　妾はいないのですか？」

「ご妻女は二年前に亡くなられたとか。確か今は日本橋檜物町と深川にそれぞれ妾がいると聞きました」
流石は本町一丁目に見世を構える男、的確な答えを返した。網の張り方を心得ている。
「妾が二人もいるのですか。御奉行様はご存じなのですか」
率直すぎたかもしれない。
「さて、どうでしょうか。そこまではわかりかねます」
主が苦笑する。
「では、調べてください。与力を巧く使うには、それ相応の手綱（たづな）が要るでしょう。太ければ太いほど、操るのが楽になります。ちょいと首を絞めるだけで」
と、笙子は絞める真似をした。
「音（ね）をあげますから」
薄笑いを浮かべる。
「今のそのお顔」
主は大仰に身震いした。
「八木沢様に似ておりましたよ。ああ、そういえば、似ているのかもしれませんね、

ご気質や考え方が」
「褒め言葉と受け取らせていただきます」
「ところで」
ふたたび旗本が口をはさむ。
「この和え物ですが、土筆と茸でござろうか。酢の物は数の子と大根、それにほんの少し柚子を添えてありましたな。初物であるのはもちろんでござるが、なんとも言えぬ深みのある味わい。どちらの料理屋から料理人を招んだのでござるか」
舌が肥えすぎてしまい、平凡な料理では飽き足りなくなっている。その舌が美味いと告げているのだろう。かなり真剣な目をしていた。
「此度、お膳立てしたのは、わたしではありません」
笙子は留守居役をちらりと見る。
「いや、わしではござらぬ」
留守居役は旗本を、そして、旗本は薬種問屋の主を見た。
「てまえではありません。たいへん上品な小鉢であると、てまえも思っておりました。帰るときに屋号を訊こうと考えておりました次第で」
向けられた物言いたげな目に、笙子は笑顔で応える。

「わたしの弟子が気を利かせたのでしょう。あとが怖いですよ。いくら請求されるものやら、わかりませんね」

ふと自分の漆塗りの箱膳に目を留めた。抽出付きの箱膳もまた〈宮本屋〉が遺した品物。数多くあったため、自宅でも使っていた。なにげなく抽出を開けてみる。料理の値段でも書いた紙片が入れられているのではないかと思ったが、入っていたのはお品書きと記された紙片だった。

「『魂風の膳』ですか」

「縁起でもない」

留守居役が顔をしかめる。

「鬼や外敵が来るという風ではないか。験の悪いことよ」

立ちあがると、すかさず主が言った。

「厄落としでございますか」

「さよう」

「それでは、てまえは熱燗と次の料理の催促をして参りましょう」

二人が出て行き、笙子は旗本と二人になる。

「先程の話でござるが、実は知り合いに、条件どおりの者がいるのでござる。いか

がでござろうか。此度のこれは、朝香先生とそれがし二人の話にするというのは」

持ちかけられたのは、要するに留守居役と薬種問屋に分け前を渡したくないという話だった。

「そうですねえ」

笙子は即答できない。事が露見すれば、留守居役が機嫌を損ねるのは間違いなかった。下品の人参を用立てられるのは、彼の者だけ。小さな諍いは、大きな騒ぎを招びかねない。

「やはり、やめておきましょう」

「いや、娘は二人でござる。しかも色白で、こう、なんというか男好きする身体つきなのでござるよ。上は十一、下は九つ。健気に浅蜊売りなどをしているあたりは、今までの子供と変わりませぬが」

二人と聞いて、留守居役への薄っぺらな義理立てが消えかけた。上玉となれば、安くても百両。二人合わせれば、二百両。四人で分ければ五十両ずつだが、二人で分ければ百両が手に入る。

「なに、気づきませぬ」

旗本は請け合った。根拠のない言葉に思えたが、笙子は思わず頷いている。

「わかりました」
「では、早急に……」
「失礼いたします」
鳳凰が描かれた襖の外から、男の呼びかけがひびいた。
「酒と料理をお持ちいたしました」
どこかで聞いたような声だと思ったが、思い出せない。
「どうぞ」
笙子が答えると、戸が開いた。重ねた膳を掲げるようにして、男が入って来る。下の膳に次の料理、上の膳に何本もの熱燗が載せられている。男はうつむいたまま、旗本の傍らに膳を置いた。
「待ちかねたぞ。土筆の和え物とは、気の利いた小鉢であったわ。さて、次は焼き物か、刺身か」
膳に手を伸ばした旗本は、不意に「ぐう」と呻いた。
男が匕首で旗本の胸をつらぬいていた。
「……」
笙子は声を失ったものの、立ちあがっている。逃げなければ、まずそう思った。

膳を運んで来た男が、にやりとして見あげる。
「酒が飲めなくて辛かったぜ」
熱燗を取って、飲み始めた。旗本はすでに事切れている。胸を鮮血で染め、ゆっくり横に倒れていった。
「な、なぜ、あ、あなたが、ここ、ここに」
笙子は震えながら、それでも少しずつ襖の方に近づいていた。旗本を刺したのは、亀戸町の浪人、名はなんと言ったか。岡本、いや、岡田だったろうか。咳が止まらなくて苦しんでいたはずの男が、なぜ、ここにいるのか!?
「元締の指図でな。病人のふりをしたってわけだ。あの娘も、おれの娘じゃない。知り合いの仕事人の娘よ。さて、『魂風の膳』はお気に召したかね。さっき出て行った二人は、三途の川を渡り始めている頃だ。冥土でおまえさんを待ってるよ」
「ひぃ」
悲鳴をあげようとしたが声にならない。笙子はそばにあった膳を、岡田文士郎に投げつける。かわした隙を見て、廊下に飛び出した。
「だれ、だれか、た、助けて、助けて！」
大声で叫んだつもりだったが、掠れてしまい、ひびかない。玄関はどっちだった

か。台所に行けば、だれかいるのではないか。いや、料理人たちも文士郎の仲間かもしれない。とにかく外に逃げるのだ。玄関に行って……。

「留以様」

笙子は廊下に立つ留以を見た。地獄に仏とはまさにこのこと、菩薩とは留以のことだ。留以ならば、岡田文士郎を始末できる。

「ああ、留以様。よかった。助けてください」

これで助かる、わたしは運がいい。

走り寄ったとたん、

「う」

笙子は胸を刺されていた。

「お命、終(しま)っていただきます」

「な、ぜ？」

膝からくずれ落ちる。笙子が獲物にした数多くの者たちも、同じ言葉を発しながら死んでいったに違いない。留以を摑もうとした白い手、病人を救い、殺めた白い手が、懸命になにかを摑もうとしている。

魂風がびょうびょうと鳴っていた。

五

二日後の夜。

「留以殿！」

希与の怒声がひびきわたった。

「お呼びでございますか」

留以は居間の障子を開ける。姑と小姑は、二人仲良く膳を摂っていた。いつもは羨ましく思う光景だったが、また例の胃の腑が何も受けつけない状態になっている。座敷に漂う味噌汁の匂いを嗅いだだけで、うぷっと吐きそうになった。懸命にこらえる。

希与は冷ややかに睨めつけた。

「この味噌汁の味はなんですか。濃すぎて飲めませぬぞ」

「では、すぐに湯をお持ちいたします」

「なに？」

眉をあげた義母に、義姉が続いた。

「濃いから薄めればいいという、その考えが駄目なのです。ねえ、母上」
「さよう。気の利かぬ嫁女じゃ」
「いちいち言われなければ、わからぬのでしょうか」
「作り直しなされ」
希与に顎で指図された。持っていた盆に二人分の椀を載せる。立ちあがろうとした瞬間、ふらりと目眩を覚えた。
「あ」
盆から滑り落ちた椀が、希与の頭に落ちる。
「……」
頭から二人分の味噌汁を被っていた。
「も、申し訳ありません。わざとではないのです。昨日から食べていないものですから、足に力が入らなくて」
懐から手拭いを出して、姑の頭を拭いた。慌てたせいか、自然の成り行きか。豆腐が崩れて髪の中に入ってしまった。ちょこんと載った油揚げは、見ようによっては可愛らしく見えなくもない。
「なにをしているのですか、は、早うもっと手拭いを」

環紀に言われて、立ちあがる。
「は、はい」
一歩、踏み出したとたん、膳を蹴りつけていた。ごつっと鈍い音がして、希与の膝にあたる。
「留以殿!!」
二度目の叫びは、激しい怒りに満ちていた。
「すぐに手拭いを」
留以は逃げるように飛び出していた。台所まで一気に走り、土間に降りて、水を飲む。そこで大きく息をついた。
「力が入りませぬ」
「これを」
おのぶが二つの胡桃(くるみ)を差し出した。
「なんですか」
「指の鍛錬(たんれん)にもなりますし、鬱憤(うっぷん)が溜まったときには、ぐしゃっと握り潰すのも宜しいのではないかと」
「なるほど」

右掌で二つの胡桃を遊ばせる。カリカリと乾いた音がした。確かにいい鍛錬になるかもしれない。

「佐知のことでございますが」

おのぶは声をひそめる。亭主の弥太郎が、勝手口から顔を覗かせ、会釈した。母親を労咳で亡くした娘は、吉原の遊女屋に売られていた。もしや、と、思った元締の源内が、お真佐に命じて、遊女屋をあたらせたのである。留以は佐知であることを確かめる役目を務めた。

「菩薩先生が貯めこんでいた金子で借金を返した由。引き続き遊女屋と陰間茶屋をあたってみると言っていました。売られたすべての子供は無理でしょうが、何人かでも助けられるのではないかと」

「よかった」

「留以殿、手拭いはまだですか。桶に湯を入れて持って来なされ」

環紀の叫び声に、おのぶが頷き返した。

「わたしが参ります」

ほっとして頷いた。

「頼みます」

留以は、台所の板の間に座る。弥太郎とおのぶが、桶に湯を用意する様子を、ぼんやり眺めていた。

「留以」

平左衛門が勝手口に姿を見せる。

「旦那様」

立ちあがろうとしたそれを手で制した。

「座っておるがよい。また飯が喉をとおらぬようになっておるではないか。豆腐ならば、つるりと滑りこむのではないかと思うてな。買うてきた」

持っていた小さな桶を掲げる。留以のために八丁堀の同心が、桶を小脇に抱えて家路を急ぐ図が浮かび、胸が熱くなった。

「申し訳ありませぬ」

「賽の目に切った豆腐を、飯に見立てるとしよう。葛仕立てにすれば、なおいっそう食が進むであろうな。小松菜のみじん切りと、生姜汁も加えるか。うん、我ながら美味そうじゃ。しばし待て、留以。手を洗うて来る」

「はい」

作り方を聞いただけで、腹の虫が催促し始める。まさに食べることは生きること、

『いのちの膳』は留以にとっては、心を救う膳でもあった。

「しかし、人とはわからぬものよ」

手拭いで手を拭きながら、平左衛門が戻って来る。

「菩薩先生と呼ばれた朝香笙子が、〈宮本屋〉の寮で非業の死を遂げるとはな。仲間割れであろうというのが、御奉行様や八木沢様のお考えのようじゃ。病人に毒を与えて殺めたのか、あるいは死病のせいで死んだのか。詳しい話はわからぬままよ」

竈に薪をくべ、水を入れた土鍋を置いた。明日、いや早ければ今宵また夫は、千住近くの百姓家に出張らなければならなくなるだろう。元締の源内が、芥溜（あくただまり）で行われていた鬼の所業を、文に記して投げ入れる手筈になっていた。

「悪事の裏には善行が、善行の裏には悪事が隠れているやもしれぬ」

留以の呟きに、平左衛門が振り向いた。

「だれの言葉じゃ」

「番町の義父にござります」

「さようか。仰せのとおりよのう」

と、ふたたび料理に専念する。豊吉を殺めた藤兵衛は、犬の仇討ちに命を懸けた。

貧乏人を助けていた笙子は、裏で死病に取り憑かれた病人を始末していた。人というのは不思議なもの。我が身をあてはめて、つくづくそう感じている。

「八木沢様のお話では、会津藩では何人かの上級藩士が腹を切ったとか。寮で死んだ留守居役がらみであろうな」

背中を向けたまま、平左衛門は続けた。

「平らかな暮らしこそが、なによりの宝じゃ。御役目に出る度、わしはそれを感じておる。そなたとこうやって語らい、飯を食べるなにげない日々が……」

「平左衛門。戻っていたのですか」

環紀の乱入で、夫婦の幸せなひとときは終わりを告げる。

「これは、姉上。ただいま戻りました」

「我が家の嫁女は、粗忽者を通り越して、危険な女となりました。こともあろうに母上の頭から、味噌汁をかけたのですよ。さらに箱膳を蹴り飛ばして、母上の膝にわざとぶつけました。そなたが鼻の下をのばして甘やかすからです。日に日に乱暴になるようで、わたくしはおそろしゅうてなりません」

「申し訳ありません」

留以は板の間に畏まる。終わりのない厭味と小言こそが、平らかな暮らしの証、

かもしれない。
（日々是平安也）
祈りにも似たその言葉を、留以は、心の中で噛みしめていた。

あとがき

女版、中村主水（なかむらもんど）というのはどうだろう。

これが閃（ひらめ）いたのは、三年ほど前でした。でも、まだ技が身についてないと感じたため、機が熟すのを少し待ちました。あふれるほどに出版されている仕事人や仕掛人といった闇の始末シリーズ。その中でひと味違った、私らしい話にできないか。動き出した後は早かったですが、それまでがけっこうかかりましたね。だれかが『穴』に気づいて書いてしまうかもしれないな、とも思いました。

（『穴』とは、気づきそうで気づかない話、ああ、まだこの手があったか、というような話のことです）

一年、二年と経ちましたが、だれも書く気配がありません。それではと、及ばずながら着手した次第です。

主人公の野村留以（のむらるい）は、やきもちやきの可愛（かわい）い女性。盆暗同心（ぼんくらどうしん）だの、与太郎（よたろう）同心だ

のと、同僚から嘲られる夫を懸命に支えます。鴛鴦同心とも呼ばれていますが、夫婦を取り巻く人物たちは、一筋縄ではいかない者ばかり。苦労が絶えません。姑と小姑のいびりに耐えて、なんとか愛する夫の子を産んでほしいものですね。

話は変わりますが……七月十二日、なんと女優の浅野温子さんと対談いたしました！

浅野さんは『御算用日記』を読んでおられるとか。書くのもおそれおおいことですが、『御算用日記』のファンだそうです。それで光文社の雑誌『ＨＥＲＳ』で、猛暑の中、浅草神社で対談と相成りました。

美しくて聡明な方でした。天は二物を与えずと言いますが、二物どころか、四物も五物もお持ちの方です。古事記『よみ語り』をなさっているらしく、ライフワークにしたいとも伺いました。私は仕事の後、録画しておいた映画やドラマを観るのが息抜きなのですが、浅野さんは本を読むのがなにより癒しになるそうです。面白いなあ、と、思いました。宣伝するようで、いささか気がひけるのですが、興味を持たれた方は、今月号（二〇一一年九月号）の『ＨＥＲＳ』をご覧くださいませ。

さて、文中には『いのちの膳』なるものが登場します。主人公の留以は、『仕事』を終えた後、食事が喉を通らなくなるという状態に陥るのですが、夫の作った料理だけは食べられるのですね。

「天日干しの美味い塩が手に入ったゆえ、塩で炊いてみたのよ。醤油よりも、あっさりするのではないかと思うてな」

と、夫の平左衛門が留以に講釈する塩味の『鰤大根』。実は私の住む国分寺駅南口近くに店を構える『酒寮わだつみ』の料理を使わせていただきました。このお店は、ご主人の薊俊哉さんと、二人の板前さん——青山さんと長島さんが、それぞれ考えた料理を持ち寄って検討し、ご主人が採用を認めれば、お店で供されることになっています。

この『鰤大根』を考案したのは青山さん。

「『鰤大根』をあっさりと召しあがっていただきたくて、塩味にしました。鰤の鮮度も活かしたかった」

とのことです。留以にも元気を取り戻させる『いのちの膳』にぴったりのメニューですが、鰤の旬は冬。どんなに食べたくても、今は食べられません。そこで夏場

にお勧めのメニューを訊いてみました。

「夏場は『トマトの甘酢漬け』がお客様に好評ですね。ワインと米酢がベースですが、生姜と大葉で和風に仕上げます」（青山さん）

さらに、作品には登場させられませんが、私がこのお店で絶品と感激した一品が、『塩アイスと小豆の最中』です。他では味わえないパリパリの皮が特徴。

「アイスに合うように、皮を特別に作ってもらっています。パラパラと崩れずに、パリっとした食感が残るのは、餅米を使っているからです」（ご主人）

こだわりの皮が、もう最高です。お試しあれ、としか言えません。厨房脇の生け簀では、旬の鮮魚が泳ぎ、野菜もみずみずしくて新鮮。素材を繊細に扱うことで、深い味わいを引き出します。

日本酒と焼酎がとても美味しい店ですが、飲めない人にはランチがお勧め。お一人の予算千五百円から、二名様以上で受け付けているそうです（要予約。予約なしではランチは食べられません）。夜も予約をした方が確実です。

『鰤大根』のレシピを別掲させていただきました。素人にはちょいとむずかしいかもしれませんが、できそうなところだけ真似をして、冬に挑戦してみようと思います。

最後になりましたが、今回は（いつもそうなのかもしれませんが）特に、たくさんの方々のお世話になりました。いつも的確なアドバイスをしてくれる友人のまさみさん。実の姉妹のように私を支えてくれる、貴代さん。ヘアメイクをお願いした石田さん。着付を担当していただいた須藤さん、笹川さん。そして、この本に掲載するための写真を撮ってくだすった村尾さん。この場を借りて、御礼申しあげます。ありがとうございました。

さてさて、鴛鴦同心は日々是平安となるかどうか。

次回も騒ぎは必至。楽しんでいただければ幸いです。

二〇一一年七月十四日

六道慧

『鰤大根』レシピ（6人前の材料）

鰤の切り身……6切れ
玉葱（たまねぎ）すりおろし…中玉2個
米のとぎ汁……適量
刻み葱……適量

聖護院（しょうごいん）大根……2分の1個
脱水用の塩……適量
刻み柚子（ゆず）……適量

【A】
昆布出汁（だし）……2ℓ
みりん……200cc
粗塩（あらじお）……適量

酒……50cc
白醤油……50cc

1　鰤に塩を振り20分置き、熱湯に入れて鰤の表面の色が変わったら氷水に取る。
（臭みを取るのと、旨みを逃さないため）

2　大根は皮をむき2分の1を6等分し面取りをして鍋にいれて、米のとぎ汁を注ぎ箸で切れる位軟らかくなるまで弱火で煮る。
3　鍋に【A】を入れて火に掛ける。沸騰したら、すりおろした玉葱、臭み取りをした鰤の切り身、軟らかく煮た大根を入れて中火で30分煮る。
4　3を一晩寝かせてから、蒸し器で、中火で10分温める。（蒸し器で温めた方が出汁が煮詰まりにくく味の変化が少なくてすむ）
5　温まったら器に盛りつけて、刻んだ葱、柚子を掛けて完成。

酒寮わだつみ

東京都国分寺市南町三の十二の六
電話　〇四二-三二四-二一一八
営業時間　午後五時～十二時（ランチは要予約）
定休日　日曜日（月曜日が祝日の場合は営業）
ホームページ　http://www.mix-up.jp/



光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

奥方様は仕事人

著者　六道慧

2011年8月20日　初版1刷発行

発行者　駒井稔
印刷　萩原印刷
製本　ナショナル製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話（03）5395-8149　編集部
8113　書籍販売部
8125　業務部

© Kei Rikudō 2011

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN978-4-334-74990-3　Printed in Japan

R本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

組版　萩原印刷

お願い　光文社文庫をお読みになって、いかがでございましたか。「読後の感想」を編集部あてに、ぜひお送りください。

このほか光文社文庫では、どんな本をお読みになりましたか。これから、どういう本をご希望ですか。

どの本も、誤植がないようつとめていますが、もしお気づきの点がございましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ幸いです。当社の規定により本来の目的以外に使用せず、大切に扱わせていただきます。

光文社文庫編集部

本書の電子化は私的使用に限り、著作権法上認められています。ただし代行業者等の第三者による電子データ化及び電子書籍化は、いかなる場合も認められておりません。

お助け侍・数之進の千両智恵が冴え渡る！

六道慧

時代人情小説に新風を吹き込む
大好評「御算用日記」シリーズ

文庫書下ろし

青嵐吹く
天地に愧じず
まことの花
流星のごとく
春風を斬る

月を流さず
一鳳を得る
径に由らず
星星の火
護国の剣

駑馬十駕
甚を去る
石に匪ず

光文社文庫

秋月の牙（新装版）　峰隆一郎
三国志外伝　三好徹
三国志傑物伝　三好徹
史伝新選組　三好徹
侍たちの異郷の夢　三好徹
仇　花諸田玲子
だいこん　山本一力
人形佐七捕物帳（新装版）　横溝正史
修羅裁き　吉田雄亮
夜叉裁き　吉田雄亮
龍神裁き　吉田雄亮
鬼道裁き　吉田雄亮
閻魔裁き　吉田雄亮
観音裁き　吉田雄亮
火怨裁き　吉田雄亮
転生裁き　吉田雄亮
陽炎裁き　吉田雄亮
夢幻裁き　吉田雄亮
ひょりみ法師　六道慧
いざよい変化　六道慧
青嵐吹く　六道慧
天地に愧じず　六道慧
まことの花　六道慧
流星のごとく　六道慧
春風を斬る　六道慧
月を流さず　六道慧
一鳳を得る　六道慧
径に由らず　六道慧
星星の火　六道慧
護国の剣　六道慧
駑馬十駕　六道慧
甚を去る　六道慧
石に匪ず　六道慧
くノ一忍び化粧　和久田正明

外様喰い　和久田正明
夜明けのフロスト　R・D・ウィングフィールド　芹澤恵・芹澤仁良訳
零下51度からの生還　ベン・ミクセン　山本光伸訳
サラマンダーは炎のなかに（上・下）　ジョン・ル・カレ　加賀山卓朗訳
殺人プログラミング　ディーン・R・クーンツ　中井京子訳
ユーコンの疾走　G・ヒューソレベリー　山本光伸訳
小説孫子の兵法（上・下）　鄭飛石　李銀沢訳
密偵ファルコ　白銀の誓い　リンゼイ・デイヴィス　伊藤和子訳
密偵ファルコ　青銅の翳り　リンゼイ・デイヴィス　酒井邦秀訳
密偵ファルコ　錆色の女神　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
密偵ファルコ　鋼鉄の軍神　リンゼイ・デイヴィス　田代泰子訳
密偵ファルコ　海神の黄金　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
密偵ファルコ　砂漠の守護神　リンゼイ・デイヴィス　田代泰子訳
密偵ファルコ　新たな旅立ち　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
密偵ファルコ　オリーブの真実　リンゼイ・デイヴィス　田代泰子訳
密偵ファルコ　水路の連続殺人　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
密偵ファルコ　獅子の目覚め　リンゼイ・デイヴィス　田代泰子訳

密偵ファルコ　聖なる灯を守れ　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
密偵ファルコ　亡者を哀れむ詩　リンゼイ・デイヴィス　田代泰子訳
密偵ファルコ　疑惑の王宮建設　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
密偵ファルコ　娘に語る神話　リンゼイ・デイヴィス　田代泰子訳
密偵ファルコ　一人きりの法廷　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
密偵ファルコ　地中海の海賊　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
密偵ファルコ　最後の神託　リンゼイ・デイヴィス　矢沢聖子訳
シャーロック・ホームズの冒険　アーサー・コナン・ドイル　日暮雅通訳
シャーロック・ホームズの回想　アーサー・コナン・ドイル　日暮雅通訳
シャーロック・ホームズの生還　アーサー・コナン・ドイル　日暮雅通訳
シャーロック・ホームズ最後の挨拶　アーサー・コナン・ドイル　日暮雅通訳
緋色の研究　アーサー・コナン・ドイル　日暮雅通訳
四つの署名　アーサー・コナン・ドイル　日暮雅通訳
シャーロック・ホームズの事件簿　アーサー・コナン・ドイル　日暮雅通訳
バスカヴィル家の犬　アーサー・コナン・ドイル　日暮雅通訳
恐怖の谷　アーサー・コナン・ドイル　日暮雅通訳
アイルランド幻想　ピーター・トレイン　甲斐萬里江訳

聖女の遺骨求む　エリス・ピーターズ　大出健訳
死体が多すぎる　エリス・ピーターズ　大出健訳
修道士の頭巾　エリス・ピーターズ　岡本浜江訳
聖ペテロ祭殺人事件　エリス・ピーターズ　大出健訳
死を呼ぶ婚礼　エリス・ピーターズ　大出健訳
氷のなかの処女　エリス・ピーターズ　岡本浜江訳
聖域の雀　エリス・ピーターズ　大出健訳
悪魔の見習い修道士　エリス・ピーターズ　大出健訳
死者の身代金　エリス・ピーターズ　岡本浜江訳
憎しみの巡礼　エリス・ピーターズ　岡達子訳
秘跡　エリス・ピーターズ　大出健訳
門前通りのカラス　エリス・ピーターズ　岡達子訳
代価はバラ一輪　エリス・ピーターズ　大出健訳
アイトン・フォレストの隠者　エリス・ピーターズ　大出健訳
ハルイン修道士の告白　エリス・ピーターズ　岡本浜江訳
異端の徒弟　エリス・ピーターズ　岡達子訳
陶工の畑　エリス・ピーターズ　大出健訳

デーン人の夏　エリス・ピーターズ　岡達子訳
聖なる泥棒　エリス・ピーターズ　岡本浜江訳
背教者カドフェル　エリス・ピーターズ　岡達子訳
修道士カドフェルの出現　エリス・ピーターズ　岡本／岡／大出訳
シャーロック・ホームズ東洋の冒険　テッド・リカーディ　日暮雅通訳
クライミング・フリー　リン・ヒル　小西敦子訳

9784334749903

1920193006292

定価（本体629円＋税）

ISBN978-4-334-74990-3

C0193 ¥629E

奥方様は仕事人　六道慧

八丁堀同心の妻、留以。婚家では、夫を献身的に支え、姑や小姑との折り合いに四苦八苦する愛らしい奥方様。だが、剣術小町と称されるほどの武芸の腕前を持ち、両親を殺めた夜盗への復讐心を静かに燃やし続ける別の顔も持っていた――。留以が知り合った菩薩先生と慕われている女医者に、毒入りの薬を処方した嫌疑がかけられる。著者渾身の新シリーズ第一弾！